
桜の咲く頃に

和泉 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の咲く頃に

【Nコード】

N6167T

【作者名】

和泉 彩

【あらすじ】

プロサッカー選手篠原英治は、まだ20歳のときに、愛妻を交通事故で亡くした。愛妻の桜は、まだ一歳の息子、左近をかばって死んだのだった。

時は経って、左近は中学二年生になった。

美少年で、サッカーがうまい彼は、学校中の女子からもてていた。

しかし、彼は恋愛に全く興味がないのだった。

そんなとき、左近の所属するサッカー部に、女子マネ希望としてやってきた、結城凜花という後輩は、一風変わった少女。なぜ志願し

たのか？と尋ねた左近に、凜花は、マネージャー志望というにはふさわしくない志望動機を告げる。

「あなたに一目ぼれしたからです」と。

その出会いから始まる、左近、凜花といった登場人物が、人を愛し、悩み、色々な出来事を経て、成長していくストーリー。

第一章（前書き）

第一作目「ニルトニア物語」第二作目「すももももものうち」に、感想をくださった方々の暖かいお言葉や励ましをいただいて、3作目「桜の咲く頃に」が完成いたしました！ 次回作、期待しています。とおっしゃってくださった方々、本当にありがとうございます<>

皆様の感想のおかげで、次の作品への意欲がわき、大きな力になりました。

学園友情モノ ほのぼのファンタジー ときて、今回は恋愛モノです！

くさいセリフなんかは、書いていて恥ずかしくなったりもしました
^^;

まだまだ稚拙な作品ですが、主人公たちの成長と、人間愛みたいなを感じていただいて、少しでも楽しんでいただければ、嬉しいです。

詳しい前書きは、個人のブログの方に書きましたので、こちらではこのくらいにしておきます。

<http://ameblo.jp/lovecherry/>
こちらがブログのアドレスになります。

お暇があつて、ちょっと興味あるなーなんてかた、いらっしやったら是非遊びにいらしてくださいませ。

お待ちしております^^

感想・質問・ご意見等、何でもお待ちしております！

頂いた感想は、何度も何度も読み返して、それぞれが大切な宝物です

挫折しそうになったとき、一番、励まされています。

よろしかったら、どんな内容でも、お気軽にお寄せくださいませ。

本当に嬉しいです。

それでは、最後になりましたが、まだまだ稚拙な作品ですが、暖かい目で見守ってくださいると嬉しいです。
作者ともども、よろしくお願いいたします。

第一章

リビングとダイニングの境にあるカウンターの上に、ひとつぼつんと写真立てが立っている。

彼 篠原英治は、毎朝必ずその写真立てを手に取るのが習慣だった。

英治は、仕事のない日には、かかさずその写真立てを綺麗に掃除している。写真立てにはほこりなどついていない。

いつ手にとつても、写真立てのガラスの面はぴかぴかしていた。そのガラスの中に移っているのは、まだ19歳だった若い彼と、同じく19歳だった元妻。そして、元妻は生まれたばかりの赤子を抱いている。

若き夫婦は晴れやかな笑みを浮かべ、生後間もない赤子もまた、笑っているように見える。

幸せな家族の写真だ。

そう、確かにこのとき、この一家は幸せだった。

だった、というのは、元妻はこの一年後に死んだからである。

英治が20歳、その赤子が1歳のときだった。

元妻の桜は、やっと一人で歩けるようになった息子が、一人で家の前の国道へふらふらでていったのを、ある日目撃した。

彼女は、それに気づいてすぐに連れ戻そうとしたのだが、運悪く息子の元へ、トラックが迫っていた。

すぐ咄嗟の判断で、全速力で走って国道へ飛び出し、息子を突き飛ばすことができたが、その代わりに彼女はトラックに跳ねられて、死んだ。

英治は、死にゆく彼女の最期の言葉を聞いた。

今でも忘れられない、英治が大好きだった、しっとりとした彼女の声を聞いたのは、それが最期だった。

その時の光景は、背景の灰色の国道も、地面に降り注いだ大量の鮮

血も、彼女の美しい顔も、その全てが色褪せることなく、彼の脳裏に焼き付いている。

『えいちゃん。左近は、だいじょうぶかな…』

私、ちゃんと守れたかな…』

彼女は、死ぬ間際まで、わが子の無事を心配していた。

英治は、必死に涙を堪えながら、左近は桜のおかげで大事なさそうだ、これから救急車が来るから、二人とも病院に行つて診てもらえば、とにかく大丈夫だ、と何度も繰り返した。まるで、自分に言い聞かせるように。

『えいちゃん。ごめんね。私、これからはもう左近のこと、守つてあげられないよ。』

だから…えいちゃんが、守つてあげてね』

『何を言っているんだ、桜。もうすぐ救急車がくるから、それまでしつかりしろ』

そのときの、時間は、一分一秒が、とても長く感じられた。

本当は、救急車は、事故の後すぐ来て、その間は5分くらいのことだったのかもしれない。

しかし、英治は、何故まだこない、遅い、早くきてくれ、とばかり思っていたので、ものすごく長い時間だったように、今も感じている。

腕の中の桜は、確実に死の刻が迫っていた。

だから余計に焦っていたのかもしれない。

『えいちゃん、桜は死なないよ。確かに一度は散ってしまうかもしれない。』

でもまた咲くんだよ。

だから…待っていて。その時まで、左近をお願いします』

そういつて、彼女 桜は、目を閉じた。

そして、英治が、どんなに大声で名を呼んでも、二度とその目は開かれることがなかった。

彼女、篠原桜、という人間は、その瞬間を境に、永遠に失われたの

だった。

家族3人が揃った写真は、その写真が唯一のものだった。

だから英治は、大事に写真立ての中にいれて、リビングに置いておいた。

桜が死んでから、朝起きて、写真立てを眺め、桜に話しかける習慣は、たとえどんなに忙しい日であっても、一日たりともかかしたことはない。

正直、事故の直後から、数年の間は、その写真を見ることも、辛く悲しいことだった。

しかし、彼女の死から13年経った今、英治は驚くほど穏やかな心で、写真を眺めている。

彼女の、最期の言葉通り、二人の間に来た一人息子を、英治なりに一生懸命守り育ててきたつもりだ。

そして、あときは混乱しすぎて、桜が何を言い残そうとしたのかよく分からなかったが、今は、なんとなく分かる気がするのだった。

桜は死なない。

散っても、また咲く。

桜が死んだ直後は、なんとという気休めだろうと嘆いてばかりだったが、今では、きっと、そうなのだろう、と思う。

言葉通り、桜は散っても、また咲いて、自分たちを見守っていてくれるのだろう、と。

(そうなんだろう？ 桜)

写真に向かって英治が、問いかけた時、背後で声がした。

「父さん。また写真見てたのか。」

朝ごはん作るのも忘れてさ」

リビングの扉を開けて入ってきたのは、14歳になった息子、左近だった。

そう、元妻の桜が命をかけて守った、一人息子ある。

「おはよう、左近。」

朝ごはんなら今から作っても間に合うだろう?。」

「だからさー、昨日言ったじゃない?。」

今日から2年の部活初めで、オレ、部長になったから、早く学校行かないといけないってさー」

「なんとつ。そんな大事なこと、お父さんすっかり忘れてた!

しかし、部活初めなら、余計に朝ごはんはちゃんと食べていかないとダメだろう。お父さんすぐに作るから、全速力で作るから、食べていきなさい」

「いや…もう間に合わないからいいわ。」

「んじゃ、行ってきます」

「左近、朝ごはんを抜くのは、体によくないぞー。お父さんの愛情たっぷり朝ごはんをって、ちょ、もう行くの、ねえ、すぐ作るからつ、あとちよつとでできるからつ、もうちよつとだけ…」

さすがのように英治は言ったが、その呼びかけもむなしく、左近はそそくさと家を出て行った。

(うーん。難しいお年頃、というやつか?)

英治は、左近の後ろ姿を見送りながら、愛息子を心配して首をひねった。

第二章（前書き）

第一章から、ちょっと間があきすぎて、申し訳ありませんでした。最初の方の章は、なるべく間をあげないように、アップしていきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

第二章

4月10日。

今日から部活初めのこの日、学校の桜は満開で、時折涼しげな風に吹かれて、綺麗なピンクの花弁がグラウンドに舞っていた。

去年一年生だった篠原左近は、今日から2年生になり、サッカー部の部長となった。

部活初めだから、早めに学校へ行くと、前々から父親には言っておいたはずだったのだが…。

（あゝあ、父さんの子煩悩ぶりにもホント呆れるよなあ。

そりゃあ一人親ですつと育ててくれたんだから感謝はしてるけどさ…）

「おいつ。左近！ オレの話、聞いてる？」

はつと我に返ると、サッカー部の副部長の吉川が隣で、呆れた目で自分を見ていた。

どうやら、何か話しかけられていたのを、完全に上の空で聞き流していたらしい。

「あつ、わりい、わりい。んで何だっけ？」

「ったく、もう3度目の説明だぞ？」

オレら2年になって、3年生引退したろ？ んで、マネージャーも3年生だったから、一緒に引退しちゃったから、今日、新しいマネージャーを決めないといけないって話」

吉川は、かなりめんどくさそうに言った。

確かに、3度も同じ話をしていれば、そりゃあめんどくさくもなるだろう。

「ふーん。そんなん、てきとーに選んどけばいいんじゃないの？」

だが左近は、愛想も部長としての責任感もかけらもない返事をした。だいたい、女子マネなんて誰がやるうとどうでもよかったし、そもそも部長になったのだから、人をまとめる力があるとか、リーダー

向きだとか、そういう理由で自主的になつたのではなく、単に9番を背負っているエースストライカーだったから（実際に試合でも、左近がゴールを決める率がものすごく高かった）、という理由でおしつけられたのだ。

確かに、左近は、この中学に入学してすぐの1年生の時から、なみいる先輩たちを差し置いて、ずっとエースストライカーの9番をしようとしていた。

先輩、後輩にそれなりに区別をつけるこの中学においても、その区別を乗り越えるほど、左近のプレイと技術は圧倒的だった。

それは、父篠原英治が、プロサッカー選手であつたからかもしれない。

遺伝的にも、幼いころから父にサッカーを教わっていたという環境的理由からにおいても。

そんなんだつたから、先輩たちに疎まれたり、同級生に嫉妬されたり、顧問の先生に特別待遇とでもいうような、媚びへつらつた態度で接せられたり、うんざりする思いはたくさんしてきた。

しかし、根本的にサッカーが好きだったので、部活を辞めようとは思わなかつた。

それに、2年になつて副部長になつた吉川は、1年のときから、一度だつて左近に嫉妬したり、特別な目で見たりしなかつたので、そういう友人が一人でもいたことも、サッカー部に居続けられた理由だつたのかもしれない。

あいにく、左近は、人に対して無関心だつたので、吉川の存在をありがたいと思つたことはなかつたのだが。

「てきとーに選べたっていつてもねえ…。今年の女子マネ希望者数、150人もいるんだけど……」

「はあっ!? 何その人数」

左近はそのありえない人数に驚いた。

左近の中学は、一クラス35人程度で、1学年7組まであつた。

新一年生と現2年生合わせて、単純計算で、合計約500人いるこ

とになるのだが、そのうちの150人といったら、ほぼ3分の1ではないか。

たかが中学校のサッカー部マネージャーという役に、一体何でそこまで？

左近はさっぱり意味が分からなかった。

驚いて呆れる左近に、吉川はため息をついた。

「お前さあ、ちょっとは自覚した方がいいよ。」

父親は現役プロサッカー選手。その一人息子で、サッカーが超うまくて将来父親と同じプロになれそうで、その上身長高くて見た目もかっこいい。

全員お前目当てに決まってんじゃん」

吉川は、はーっと大げさにため息をついてみせた。

(自覚…か)

確かに、中学に入ってから、女子に告白されたのは、何十回もあった。

単にサッカーがうまい、というだけだったら、そんなにもてなかつたかもしれないが、左近の容姿は、男から見ても端正で綺麗で、非の打ちどころのない美少年だった。

だが、当の本人は、全く異性に対して無関心で、左近の心の90パーセントは、サッカーが占めているとあってよかった。

はつきりいうと、サッカー以外、全く興味がなかった。

周囲の男子からすれば、そんなところも鼻持ちならなかったのかもしれないが、興味が持てないものは仕方がない。

左近は、告白される度、内心ではめんどくさ、と思いつつも、一応丁寧に断っていた。

左近にとっては面倒なことかもしれないが、本人にしたら一大事なんだから、断るにしても丁寧に、なるべく相手を傷つけないように断れ、と吉川に常に言われていたからだ。

お前だって、いずれ人を本気で好きになったら、その気持ちが分かるさ、と。

(そんなもんかねえ)

人を本気で好きになる気持ち…、左近の脳裏に、もう亡くなってから10年以上の歳月が経とうというのに、毎朝毎朝かかさず写真の中の愛妻に話しかける父の姿が目には浮かんだ。

あれには、全く理解できなかったが、そういうのが人を本気で好きになる、というものなんだろうか。

(だとしたら……やっぱりわっかんねーなあ)

「まあとにかく、今年の女子マネは、そんな訳だから、お前が責任持って選ぶように」

「やだよ、めんどくせー。くじ引きでもなんでもいいだろ」

「お前目当てのやつが、くじ引きなんかで外れたら納得いかないだろーが。どうせ、決めるための面接だって、一人2、3分程度なんだから。そのくらいの話、ちゃんと聞いてやれよ。それだけでも、もしマネージャーになれなくなったって嬉しいと思うぞ？」

そして最後に、やっぱり左近が決める。理由は部長だから」

(……)

自分に好意を持つ大勢の女子と話さなければならぬと決めつけられるのは、納得いかなかったが、「部長だから」と身も蓋もなく言われてしまえば、さすがにこれ以上の抵抗は無駄なような気がした。

「あー、もう、しょうがねえっ。めんどくせーけど、さっさとできとーに決めればいいんだろ」

「もの分かりがよくて大変よろしい。だけど、ひとつ言っておくけど、絶対にめんどくさそうな態度とか言葉とかだすなよ。一応誠意を持って対応するんだぞ」

「へいへい」

いつもと変わらず説教くさくて、人の扱いのうまい吉川に、うまく厄介事を押し付けられた気がしたが、そんな吉川に言葉で反論したって勝てるはずもないので、左近は観念した。

(あー150人もの別に聞きたくもない女子の話……)

しかし、考えただけで、途方もなくめんどくさくてうんざりする

の
だ
っ
た。

第三章

150人の女子マネ希望者を、2年生の1組の生徒から、左近は、ひとりずつ順番に部室に招き入れた。

そして今、二人きりの部室の中で、左近と一人目の希望者の女子は向かい合って座っていた。

「サッカー部、部長の篠原左近です。学年と名前と、志望動機は？」左近は、愛想笑いのひとつもせず事務的に最初に部室に入ってきた女の子に尋ねた。

しかしこれでも本人にしてみたら、誠意をもってやっている方だった。

「2年1組、石田恵利です。志望の動機は、えーっとお、あたしサッカーが大好きで、テレビの試合はもちろんかかさず観ますし、サッカーに関する本もたくさん読みました。なので、サッカーに関する知識は、かなり勉強したつもりです。

だから…篠原くん…じゃなくって、サッカー部の皆さんのお役に立てると思うんです！」

「ふーん。で、サッカーのどんなところが好きなの？」

「え？…えと…あの…それは…」

サッカーが好きだといっておいて、肝心の質問をすると口ごもってしまう少女のその様子に、左近は、理解に苦しんだ。

これでは、そもそも本当にサッカーが好きなのかどうかと疑いたくなる。

（ああ、こりやダメだ）

「はい、分かりました。じゃあ選考は後ほどお伝えしますんで、もういいです」

あきらかにシヨックを隠しきれない表情で、彼女は部室を去って行った。

しかし、そんなことは気にもとめず、左近は、

「次の方どうぞ」

と、さくさく面接をすすめていった。

150人に対して、1分割いたとしても、150分もかかるのである。

朝練の時間が2時間しかないことを考えると、それでも足りない。そもそも、こんなことに時間を使わなければ、練習に目いっぱい時間が使えたのに、と思うと、この時間が果てしなく無駄でありもつたいない気がするのだった。

なので、適当に一人一分くらいずつ話を聞いて、後から思いついた名前で決めよう、と思っていた。

はつきり言ってしまうえば、はなから希望者の話に興味なんてなかったし、左近が納得いくような話を聞けるという期待もしていなかったのである。

ただ、吉川に言われた手前、体裁上は今朝の朝練の時間全て費やして、ちゃんと審査しました、と言わなければならないだろう、とは考えていた。

なので、次々希望者を部室に招き入れては、少し話を聞いて帰す、それを何度も何度も繰り返した。

そして、3分の2以上の面接が終わったくらいで、左近は部室の椅子の上で思いつきりのびをした。

(あーいい加減、いやるなる)

左近は、この作業にほとほと嫌気がさしていた。

最初からやる気がなかったから、というのももちろんあったが、ここまで面接をやって分かったのだが、希望者の話すことが、ほとんど同じ内容なのだ。

自分は、サッカーが好きで、知識も覚えたいし、皆の役に立ちたい。

左近が、では、そもそも一体どんなきっかけでサッカーを好きになったのかとか、具体的に、サッカーのどの辺に興味があるのか、とかいう質問をすると、皆一様に押し黙ってしまう。

これを吉川が聞いていたら、当たり前だ、と一蹴されるのだろうか、

ここにはあいにく左近ひとりしかいないので、なぜ希望者の皆が皆そんななのか、全く不思議でしょうがなかった。

しかし、そんなものは決まっているのだ。誰もが皆、女子マネになりたいのは、サッカーが好きだからじゃない、左近が好きだからなのだ。

ただ、そんなことには、鈍感で無自覚で人の気持ちに疎い左近は、理解できるはずもなかったのだが。

そうして、長くもつまらない面接もようやく最後の一人となった。左近は少し解放された気分になって、最後の希望者を部室に招き入れた。

「1年7組、結城凜花です。志望動機は、篠原先輩が好きだからです」

ゆうきりんか、と名乗った新一年生は、マネージャー募集の面接だというのに、おそらく志望動機としては見当違いなことを、しかし堂々ときっぱり言い切った。

「はあ……」

驚いて二の句が継げない左近に、さらにたたみかけるように凜花は言った。

「この中学に入学して、どこの部活に入ろうかなーって思って、仮入部の期間にたくさんさんの部活を見て回ったんです。

そしてこのサッカー部の練習を見た時、先輩に一目ぼれしました。

なんで、あの人はあんなに一生懸命ボールを追いかけらるんだろう？

なんであの人はあんなに夢中で楽しそうに駆け回っているんだろう？

私には分かりませんでした。

でも、夕方から夜にかけて3時間くらいの練習の間、ずっとグラウンドを駆け回って相当疲れるはずだろうに、全然そんな様子も見せず、ただ先輩は生き生きしていた。

時には、仲間に向けてとてもいい笑顔をむけていた。

だから、心底サッカーが好きなんだろう、と思いました。

そんな大好きなことに夢中になれる篠原先輩を好きになりました。

私は、これまでサッカーなんて、ちゃんと観たこともなかったのですが、それほどまでに先輩が熱中できるものなら、知りたい、と思っただけです」

凜花の話聞いて、左近は驚いていた。

仮入部の期間なんて、新一年生のために設けられた、ちょっと部活を覗いてみる、くらいの軽い体験期間だったはずだ。

それなのに凜花は、サッカー部の夕方の練習を3時間もの間、つまりは、ほぼ始まりから終わりまで、ずっと見ていた。しかもそれは、サッカーが好きだったからでもない。

ただ、凜花に言わせれば、3時間の間、ひたすらサッカーに夢中になる左近を、ずっと見ていて、その姿に魅かれたということらしい。今まで、数多くの女子に告白された左近だったが、こんな告白をされたのは、初めてだった。

左近の容姿だとかサッカーがうまい、といったことで好きになる女子はたくさんいたが、左近のサッカーに夢中になる姿が好きだと言ったのは、凜花だけだ。

(おもしろいじゃん)

異性として凜花に興味を持った訳でも、ましてや好きになった訳でもなかったが、左近は率直にそう思った。

「もしさ、オレが君をマネージャーに選んだら、どうする?」

だから、少し凜花を試してみたくなった。

「そうしたら、精一杯先輩を応援したいです。そして、大好きなことに夢中になつていてる姿をずっと見ていたい。」

そしてできるなら、私も一緒に夢中になりたいです」

そう凜花が言い終わるか終わらないかの頃、ガラッと部室のドアが開いた。

「おい、左近、もう始業のチャイム鳴ったぞ！」

今日はここまでにしとけ」

ドアを開けたのは吉川だった。

なるほど、始業のチャイムが鳴ったからなのだろう、開け放たれた

ドアの向こうに見えるグラウンドには、一人も姿が見えなかった。吉川だけ、ぎりぎりまで待っていてくれたらしい。

まあ、オレにこんな厄介事を押し付けたんだから当然だけど。

それにしても、いくら閉ざされた部室の中にいたとはいえ、凧花の話も聞いている間、自分はチャイムの音も聞こえなかったのか。

（へえ……。ほんとにおもしろそうじゃん）

左近は、心の中で笑った。

できるなら、私も一緒に夢中になりたいです。

凧花が最後に言った言葉は、左近の予想すらしえなかった答えで、左近の好奇心をわきたてるには十分すぎるものだった。

そして、始業のチャイムが鳴ってしまったからか、急いで校舎に走っていく凧花を目で追いながら、左近は吉川にこう告げた。

「マネージャー、あいつに決めた」

第四章

サッカー部の朝練は、早朝6時から始まり8時に終わり、始業の8時30分までに後片付けを終える。そして夕方は5時から8時までという、一日を通して、かなりハードなスケジュールだった。

当然土日も午前か午後かどちらかは、練習時間になっっていて、近隣校との試合などがある日は、一日を費やすこともよくあった。

それに加えて、1年のうち、何回か大きな大会があり、トーナメントであったり、リーグ戦であったりするのだが、それらにも、左近の所属するサッカーチームは、基本全て参加していた。

マネージャーも、もちろん、これらの練習時間や試合は、例外なく出席しなければならぬ。

これまで左近目当てなだけでマネージャーに志願し、いざ実際やってみようと、その大変さに、数日のうちに音をあげてもうこなくなると、という女子も多かったが、凜花は違っていた。

むしろ、サッカー部の誰よりも早くグラウンドに来て、すでに体操服に着替えているくらいだったし、夜も、一番遅くまで片づけをしていた。

「いい子選んだねえ、左近」

そんな凜花を見ながら吉川は言った。

「別に……」

二人が凜花のことを話していると、当の本人がやってきた。

そして、左近の練習用のユニフォームをつまんで、

「篠原先輩のは一番すぐ汚れますね。ちょうど今から洗濯するところだったので、ついでに出しておいてください」

と、にこにこしながら言った。

「ボールがユニフォームにぶつかるんだから、汚れて当然だろ。その度いちいち洗ってたら、替えが何枚あっても足りねーよ」

左近は憮然としてそう言ったが、凜花はそのくらいのことではひる

まなかった。

「そう思つて、顧問の滝口先生に、替えのユニフォームの予備をもう少し増やしてもらおうように頼んでおきましたから、心おきなく洗濯にだしてください」

「あーっ、だから、替えがあるとかそういう問題じゃなくって、いちいち着替えるのがめんどろなんだっつーの」

「ダメですよ。汚いのや汗臭いの着て練習するより、綺麗で清潔なユニフォーム着て練習した方が、集中できますよ。

さ、それ脱いでください」

「ったく、なんでもおまえはオレのオカンみたいなんだよつ。

後輩にガキ扱いされたくねーっつうの」

「あらあら、篠原先輩ってほんとにこどもみたい。自分でもよく分かっているんですね」

どこまでも、屈託なく笑いながら左近と会話する凜花は、確かに左近を前にした他の女子とは違っていた。

たいていは皆、どこかしどろもどろになったり、緊張したり、よそよそしく着飾ったりするものだったが、こつこつ言いたいことをずばずば言ったり、ましてや左近の方が遊ばれているようにも見えないというのは、誰もが初めて目にする光景だった。

「ったくしよーがねーなー、替えのユニフォーム寄こせっ」

そう言いながら、今着ていた上のユニフォームを左近は脱いだ。

その上半身が露わになった左近をみて、凜花は真っ赤になった。

左近の体は、常に鍛えているため細めの体の割にはしっかりと筋肉がついていた。

しかし、だからといって、むちむちの筋肉質というわけではなく、左近の上半身は、しなやかに美しかった。

「あ、あの、その、脱ぐなら、向こうで脱いで欲しかった、というか……」

急にうつむいて、顔を真っ赤にしながら凜花は、やっとそう言った。「脱げっつたり、脱ぐなっつたり、お前ほんとわけわかんねー」。

さっさと着替え寄せよ」

しかし、凜花は何も言わず、左近を直視しないように、左近の脱いだユニフォームを素早く奪って、だつと逃げて行った。

「ちよ、おまえ、着替え……」

上半身裸のまま、その場に取り残された左近の肩に、吉川はぽんと手をおいた。

「凜花ちゃんも、左近のこと好きなんだねえ」

「……好きっつーか、変わってるだけ？」

「でも、今まで全然女子に興味がなかった左近にしちゃあ、気に入ってるよな。」

つきあつちゃえば？」

「はーっ？ バカじゃねえのっ！ 誰があんな変わり者の上に、常にならから視線！ オレはこれでも先輩だぞ？ 一回そこんところよーく言い聞かせないと……」

自分に関わってくる女子には常に無関心だった左近が、凜花のこととなると、なぜかものすごくムキになっていた。

「へえ……。女子としゃべるのもめんどくさがってたのに、凜花ちゃんとはよく話し合いたいんだ、へえー」

「いやっ、だからっ、ちがつ、話し合いじゃなくてだ、その……」

あー、もーいいっ、替えのユニフォーム探してくるっ、と左近は走りだした。

（なにムキになってんだよ。）

あんなヤツどうだつていいじゃんか……）

そう自分に言い聞かせるわりには、何度振り払おうとしても、凜花の天真爛漫な笑顔が、つい脳裏に浮かんでくる。

（これが、好き、っていうやつなのか？）

それは、どんなに考えても、答えは出ないのだった。

第四章（後書き）

これまで、恒例今重朱里さんによるイラストは、小説のラストに載せてきましたが、今回ブログの方に、この章と同時に、イラストが載っております（左近上半身裸じゃないですけど（汗））
そちらの方も、お暇がありましたら、是非ごらんくださいませ^^
アドレスは、小説情報から作者クリックでたどり着けると思います。
よろしく願いいたします。

第五章

6時限目が終わって、ホームルームなどの全ての一日の学校で過ごす時間が終わると、凜花はいつも通り、すぐにサッカー部に出る為の準備をする。

今日もサッカー部の部活へ出る為、いそいそと体操着に着替えようとしていた結城凜花に、友達が、声をかけた。

「入口にいる2年の先輩3人に、凜花に用があるから呼んできてって言われたんだけど…」

（なんだろう？）

不思議に思った凜花は、入口に向かった。

そこには、友達の言っていた通り、2年の先輩女性が3人いた。

「急に呼びだしてごめんねえ。ちよつと、篠原くんについて聞いたいことがあつて。今から時間あるかしら？」

「サッカー部の練習に遅れない程度でしたら大丈夫です」

「悪いわね。ちよつと人にあんまり聞かれたくない話だから、旧校舎の方まで一緒に来てほしいんだけど、いい？」

「はあ…いいですけど」

そう返事をしたものの、旧校舎は現在全く使われておらず、しかもサッカー部のグラウンドからかなり離れた場所にあった。

練習に遅刻しなくなかったので、本当は行きたくなかったが、相手は上級生だし、3人もいる。

それに、篠原先輩のこと、と言われれば、聞かずにはいられないとも思った。

それで凜花は、3人の上級生について、旧校舎に向かった。

旧校舎は、新入生の凜花も存在だけは知っていたが、当然ながらこ

れまで何の用事もなかったので、来たのは初めてだった。

汚くて薄暗い旧校舎には、見る限り人は全くいない。

さらに、新校舎やグラウンドなどからも遠くて、人の声も聞こえない。

(イヤな雰囲気…)

凜花の想像は、数秒の後、見事に当たる。

「アンタ、篠原くんにどんな色目使ったんだよっ。

アンタみたいなブスがマネージャーに選ばれて、あたし達が選ばれない、なんておかしいだろーが。」

それどころか、最近では、篠原君と仲よさそうに二人で歩いてたりしてさ、篠原君の彼女にでもなったつもり？

篠原君みたいな人がアンタなんか好きなワケないだろっ。自信過剰？ 凶々しすぎるにもほどがあるよね。」

「そうそう、アンタのせいでも、篠原くんはバカな女に騙されてるって、悪く言われてるくらいなの！」

分かる？ アンタが篠原君の評判を下げてんの！」

「最低なんだけど。消えてほしいんだけど」

3人の先輩たちは、凜花を誘ったときは、全く違う表情と言葉遣いで、次々と凜花に罵声を浴びせた。

「……それだけ、ですか？」

凜花は、黙って一通り聞き終わったあと、うつむいたまま、静かにそう一言いった。

「ああ？ 何いってんだよ！ アタシ達が言ったこと分かったのか？ あ？」

「言いたいことは、それだけか、って聞いているんですよ」

静かだが、その言葉はとても重みがあった。

3人の先輩も、凜花の静かだが決意を秘めたような口調にすこし驚いたが、そこが余計に彼女たちの癪に障った。

「その余裕こいたような態度もム力つくんだよっ」

3人のうち一人が、凜花の顔を思いつきり殴った。

凜花の顔に激しい痛みが走った。

しかし凜花は、うめき声ひとつあげなかった。

「…好きにすればいい。私のことは気の済むようにすればいい。だけど、篠原先輩に何かしたら」

許さない」

凜花は殴られた顔から出た血を拭いもせず、今度はまっすぐ3人の先輩を見据えた。

（先輩は私が守らなくてはいけない。私がどうなるうとも）

何故、女であり、後輩でもある凜花が、左近のことを守らなければならぬ、と思ったのか、凜花は分からなかった。

しかし、凜花の心に浮かんだこと、それは、絶対に左近を守ること。それは、使命のように強く凜花の心を支配した。

その決意みなぎる恐ろしくも鋭い目を見て、3人はたかが新入生、たかが後輩、などと侮っていた凜花に恐怖を覚えた。

しかし、冷静に考えてみれば、こんな旧校舎に人などこない。そしてこちらは3人。数でも勝っている。

恐れおののくのは、凜花の方であるべきはずだ。

それなのに、この余裕をかましたような態度はなんなのだ、と余計に彼女たちの怒りが増した。

「だったら、お望み通り好きにさせてもらおうよっ」

3人のうちの一人がそういったのを、まるで合図であったかのように、3人は凜花に思いつきり暴行を加えた。

殴る、蹴る、手加減なしの容赦のない連続の暴行だった。

凜花の顔ははれ上がり、顔からも体からもいたるところから出血した。

しかし、凜花は叫び声ひとつあげなかった。

「アンタ、ここまでされて謝罪のひとつもしようと思わないわけ？ そんなに好きなの？ 篠原君が」

「謝罪するような悪いことをした覚えはありませんから」

「好きなのかって聞いてんだよっ」

そう言つて、一人が凜花の腹を蹴りあげた。

(ぐっ……)

「…好きですよ。その何が悪いんですか」

凜花は痛みをこらえながら、なんとか声を絞り出した。

「それ、取り消して謝りな。そして、二度と篠原君に近づくんじやないよ。」

そしたら、今回はこれで勘弁してやるよ」

すでに、体中がぼろぼろになっていた凜花は、たやすく謝ってくるだろうと3人は思った。

しかし凜花は、その目だけは最初の方と同じく決意に満ちていて、全くおびえてなどいなかった。

むしろ、ここまでの仕打ちを受けながら、その目だけは全く傷つくことなく、始めと同じく決意に満ちていた。

「謝らないし、先輩を好きなのも撤回しない。私に何かすることでも気が済むのなら、なんでもすればいい。」

先輩は、あなたたちの物ではないのだから、先輩が何をしようと、誰と話そうと、誰と一緒に歩こうと、それは先輩の勝手。あなたたちが決めることではない」

「そーいう態度が気に入らないんだよっ」

その凜花の決意に満ちた眼差しごと、3人は、思いのままにぶち壊した。

そして気のすむまで、凜花に暴行を加えた後、3人は去っていった。それからしばらくの間、凜花は痛みのために動けなかった。

声をだせていたのも不思議なくらいだった。

だが、不思議と凜花は悲しくもなかったし、悔しくもなかった。自分に与えられた痛みも怪我も大したことはない。

これで左近を守れたことになるのかどうかは分からないが、彼の方へ悪意が向けられなければよいのだけど…と、それだけが不安だった。

しばらく、旧校舎の廊下に倒れていた後、気力を振り絞り、全身に

何とか力をこめて、凜花は起き上がった。

そして、制服のスカートのポケットから携帯を取り出し、友人にメールを打った。

『急な用事ができて、今日部活に出られなくなっちゃった。もしまだ学校にいて、余裕があったら、サッカー部の誰かにそう伝えてくれると助かる！』

送信、のボタンを押した後、凜花は気を失った。

第五章（後書き）

この小説のキーワードに「残酷な描写あり 恋愛 学園 サッカー」
ってあったと思うんですけど、残酷な描写あり、ってこの章のこと
だったんですね。

私的には、これくらいは、残酷な描写って言わないんじゃないかな
ーとも思ったのですが、「誰がこんなの食べるの？（^^;）」「み
たいな、食品じゃない製品にも、「これは食べ物ではありません」
とか書いてあるので、やっぱり、念には念をいれて、注意書きを書
いておかないといけなかなーと思い、キーワードに入れました。
最初、キーワードの羅列をみたときは、「残酷な描写あり 恋愛
学園 サッカー」って、この恋愛とか学園とかサッカーのどこから
残酷描写がでてくるんだー！！って自分でつつこみたくまりました
（笑）

あと、個人のブログの方には、イラストもあります（知り合いが描
いています）。今回は、ラストに1枚だけではないので、途中で何枚
かでてくると思います。

ご覧いただければ、私の貧相な描写を少しは補ってくれるかも…し
れません（汗）

ブログも合わせてよろしくお願いいたします

<http://ameblo.jp/lovecherry/>

第六章

サッカー部の練習が始まってしばらく経った頃、凜花の友人だという子が、急な用事が出来たので、今日の部活を休みたい、というようなメールが届いたので、伝えに来た、とやってきた。

「珍しいよなー、凜花ちゃん」

それを聞いて、吉川がそうぽつりと言った。

「そうか？ 急な用事くらい誰だってあるだろ」

部員のうちの一人はそう言った。

「いや、急な用事が珍しいんじゃない、いつもの凜花ちゃんだったら、誰よりも早くグラウンドにくるだろ？ だったら、前もって部活の前に知らせてくるだろうし、もし部活が始まってから急な用事ができたなら、すでにこの場にいるはずだからさ」

「考えすぎだろ」

左近はそうは言ったが、実は、凜花がグラウンドに来ていない時点で気にはなっていた。

いつも部活を大事に考え、誰よりも早く来て準備を始める凜花。

いや、部活を大事に考えていた、というよりは、あの時の言葉だ。

『できれば私も一緒に夢中になりたいです』

そんなふうに使っていた凜花が、部活に遅刻。それも急な用事だと言ったって、誰かに伝言を頼むんじゃないか、ここに来て自分で伝えるくらい余裕はあるんじゃないか？

それすらできないほどのよっぽど緊急をよつするほどの用事ができたのか。

あるいは……。

そこまで考えた時、左近は走りだしていた。

「悪い。オレもちよっと用事できたから帰るわ」

走り際に、皆にそう言い残して。

練習用のユニフォームから着替えもしないで、左近は学校中を駆け回った。

(なんだか嫌な予感がする…)

まず凜花のクラスへ行き、まだ教室に残っている女子をつかまえて、片っぱしから凜花が何か言っただけでなかったかと聞いた。

そのうちの一人が、凜花が部活へ行くこととしていた直前に2年生の先輩3人に呼ばれていた、と話してくれた。

彼女は凜花の友人だそうで、少し気になったので、ドアの近くで凜花たちが話していたことを聞いた、とも言った。

「なんて言っただんだ！」

すごい剣幕で迫る左近に圧倒されながら、少し彼女は怯えたように言った。

篠原君について聞きたいことがあるから、今から旧校舎へ来てほしい、と。

それを聞いた左近は、わき目も振らず旧校舎の方へ走りだした。

後に取り残された少女は、ぽかんと左近を見送っていた。

旧校舎にたどり着くとすぐの一階の廊下に凜花が倒れているのを、左近は見つけた。

凜花のあどけない顔は面影もないほどはれあがり、出血していた。

制服も破れ、破れた箇所からは、打撲のような傷や青いあざが見えていた。

全身のいたるところからも出血していた。

それを見た瞬間、左近は頭が真っ白になった。

「おい、凜花！　しっかりしろ！」

倒れていた凜花を抱き起こしながら、揺さぶった。

凜花の体は温かかった。

最悪の事態は起こらなかったようだ。

そのことにまず、左近は安堵した。

そしてすぐ、頭に怪我を負った場合は、揺さぶってはいけないことに思い至り、とにかく声をかけ続けた。

凜花、凜花、と何度目か読んだ時、凜花は、目を開けた。

「篠原…先輩？」

「凜花、大丈夫か！　ここで何があった？」

何があった、と聞きながらも大体のことは予想がついた。

凜花は自分のことで、こんな誰も来ないような旧校舎に、複数名の先輩に呼び出されたのだ。

大かた、自分のことを好きだと思っている女子複数に、そのことで因縁をつけられ、暴行を加えられたのだろう。

「…何も。何もありません」

「嘘だ。何もなくてこんな怪我するわけないだろうっ！

オレのせいなのか？　オレのせいでこんな目に…」

「違います。私が悪いことをしたんです。だから、先輩は関係ありません…」

凜花が、自分には関係がないと言おうとした時、左近は何故かものすごく苛立ちを感じた。

「オレをかばうな！　オレをかばってお前がこんな怪我して、お前バカだろ！

いいか？　2度とオレをかばうなよ」

凜花を抱いていた手も離し、凜花はそのまま廊下に倒れこんだ。

それでも、左近は凜花をかわいそうだとは思わなかった。

それ以上に、とにかく腹が立った。

何故自分なんかをかばって、傷つくのか、と。

「もうお前には、会いたくもない。部活にもくるな。マナージャーも首だ」

左近は、そう言い捨てると、すたすたとその場から立ち去った。

彼は、自分のせいで誰かが、特に大切な人が傷つくのが耐えられないのだった。

そうなった場合、傷を受けたものを遠ざけて、自分との関わりをなくせば、その者は安全になると思っていた。

普通の男なら、大切な人を傷つけられたら、もっとしっかり守りたい、と思うのだろう。

しかし、守ることができない場合があることを、左近は知っていた。そして、その場合に、それが永遠に取り返しのないことになることも。

しかもそれは、自分をかばったばかりに。

だったら、大切な人ほど、自分から遠ざけなければならぬのだ。

もうあんな思いは、たくさんなんだ！

第六章（後書き）

いつも、読んでくださっている方、ありがとうございます。話の展開が遅くてすみません><

10章あたりから少しずつ展開していく（はず）なので、それまで、もしできたら見捨てないで、暖かく見守ってくださいると嬉しいです；

；それでも、おもしろくないかもしれないですけど><
自信喪失の私に感想等くださるともつと嬉しいです><

第七章

しばらく旧校舎の周りを、うろろろしていた左近は、これからどうしたものか、と考えた。

サッカー部には、急な用事ができたから帰る、と言ってでてきてしまったから、今さら戻るのもおかしい。

まあ、戻っても、こんな精神状態じゃ、まともな練習にもならないだろうが。

30分ほど辺りをうろろろしていると、次第に昂揚していた気分も収まってきて、凜花に酷い仕打ちをしてしまった、と後悔の念が沸き起こってきた。

自分が、どういう考え方であれ、あそこまで酷い怪我人をほっぽり出して、勝手に怒って去ったのは、人間的にどうだろう？と思いつたのだ。

どんな事情があったにせよ、怪我人なのだから、手当をするとか、病院に連れていくとか、たとえそれが見知らぬ他人であったとしても、そのくらいのことではして当然だった。

（あーあ、オレって最低だな）
きつと、凜花に嫌われただろう。

そう思うと何故か、ものすごく悲しかった。

しかし、いやいや、大切な人だと思うのなら、嫌われた方がいいのだ、と今までの自分の考え方に当てはめようとしてみても……やはり悲しくて寂しくて、ものすごく胸が苦しいのだった。

（ああ、凜花。オレはお前が好きなのだ）

もう2度と自分のせいで傷つけないために、自分は遠ざかるべきだ……でもそばにいたい。

その相反する考えに答えを出せないまま、左近は急いでさっきの凜花の倒れていた場所へ向かった。

左近がさつき凜花を見つけた場所へ戻ると、凜花は、旧校舎の窓につかまって、ゆっくり歩いていていた。

「あ、先輩」

「あ、先輩、じゃないだろっ。そんな怪我で無理して動くなよ」

「でも、こんなところにずっといても仕方ないですし……」

「……」

凜花を見捨てて置き去りにした以上、何も言えない左近だった。

「……その、悪かったな、さつきは。ごめん」

凜花は相当怒っているだろうと思ったから、凜花の顔を直視できずに左近は言った。

「なんで謝るんですか？」

しかし、凜花は、左近の予想に反して全く怒っていないようだった。

「いや、ふっー怒るだろ。大怪我したのに、怒られて見捨てられて……」

「先輩が怪我させた訳じゃないでしょう」

「いや、だけど……まあとにかくおぶされ。そんなんじゃまともに歩けねーだろ」

凜花は、少し迷っていたが、きつと本人も歩ける状態ではないのは分かっていたのだらう、かがみこんだ左近の背中に乗ってきた。

「病院、連れてくから」

左近は軽々と凜花を背負った。

凜花が軽かった、というより、日々運動をしていた左近にとってはこれくらいいたいたことではなかったのだが、そこは、礼義的にもそんなに重くないと言っておくべきだったかもしれない。

「病院は嫌です。自宅が近いので、そこまで送っていただければ」

凜花は、病院にいけば、誰に暴行を受けたとか問題になって、犯人などを問われた場合、素直に犯人を明かすことは、左近にとってマインスだと思った。

「私、病院大嫌いなんです。絶対行きたくないです」

だから、咄嗟にそんな嘘をついた。

「ガキじゃあるまいし、病院嫌いとか…。ああっ、もう、じゃあ仕方ねー。家に来い。」

まあ、その道のプロって訳じゃないけど、ある意味、怪我のプロがいるから」

「……………」

凜花は左近の言っている意味が分からなかったが、とりあえず病院に連れて行かれるのを回避できるなら、その提案にのるしかない、と思ったので素直に好意に甘えることにした。

第八章

「ただいまー」

左近の家は、学校からそんなに遠くない場所にあった。

家の造りは、そんなに豪華でもなく、かといって、質素というわけでもなかったが、普通の家にしては、例えば屋根とか壁とかが凝った作りで、住んでいる人のセンスを感じさせる家だった。

「おかえりー左近」

部屋の奥の方から、スリッパの音をパタパタさせて、玄関に走ってくる男性の声が聞こえた。

「って、左近！ どうしたんだい、そのお嬢さん！すごい怪我をしているじゃないかっ」

「あー、話はあと。とにかくこいつ病院嫌いだっていうから、家に連れてきた。」

父さん、診てやってくれるか？」

「うーん。父さん医者って訳じゃないから、大丈夫かな？」

「まあとりあえず診てやってくれよ」

「そうだね。上がった」

出迎えてくれたのは、左近の父親らしかった。

左近の父親に案内されたリビングは、部屋の隅々まで掃除が行き届いていて、家具も装飾品も凝ったものが多く、やはりこの家は豪華、という言葉は似つかわしくないが、センスのいい家なのだ、と凛花は思った。

リビングのソファに、ゆっくり左近の背中からおろされた凛花は、緊張した面持ちで左近の父親を見つめた。

年は、30くらい。

中学生の親にしては、随分若い。

顔は、左近と同じく端正だったが、面差しが柔和で、優しそうな印象だ。

「初めまして。左近の父です。怪我はどこが痛いですか？」

凜花をにこにこ見下ろして、左近の父が尋ねた声は、ずっと昔にどこかで聞いたことのあるような、優しく、温かな声だった。

「初めまして。篠原先輩のサッカー部でマネージャーをやらせていただいてます、結城凜花と申します。突然訪ねてきてすみません」

「いやいや、左近が女の子を連れてくるなんてね、初めてだから。」

父親としては、嬉しいやら恥ずかしいやらで。ああ、サッカー部でマネージャーを！ それはいい！ サッカーは素晴らしい……」

「そんなこといいから、早く手当してやれよっ」

後ろに控えていた左近が、スパンと、父親の頭をチョップした。

一瞬だけ左近の父親は悲しそうな視線を背後の左近に向けてから、慌てて救急箱を取り出してきた。

それは、ごく一般の家庭にあるような、コンパクトサイズの救急箱ではなく、かなり大きな救急箱だった。

さつき左近は、ある意味怪我のスペシャリスト、だと言っていたが、それと関係があるのだろうか？

「じゃあ、まずは、体のどこに傷があるのか見ないといけないからね、さっ、裸になっ」

「下着で十分だろっ」

そこで、また背後から左近のチョップ。

……この親子はいつもこんなふう漫才をしているのだろうか？

凜花はそんなことを想像しておかしくてくすくすと笑った。

「うん、笑えるようなら、そんなに大事ないかもしれないね」

左近の父親も、凜花に合わせてにこにこ笑った。

いいお父さんだなあ、そんなことを思いながら、凜花は制服を脱いだ。

男二人を前にして、下着になるのはかなり勇気がいったが、病院を拒んだのも自分なので、これは仕方がない。

左近の父親は、凜花の足や手を優しくひねったりして、こうすると痛い？とか、打撲の箇所をひとつひとつ丁寧に診ていった。

1時間ほどそうしてみたあと、

「足に捻挫と、後は打撲だね。骨折はたぶんしていないと思うよ。捻挫の方はテーピングしておくね。ただ、頭の怪我は、見た目だけでは分からないから、やっぱり念のため病院に行った方がいいね」と、凜花に告げた。

「ありがとうございます。怪我の具合とか、よく分かるんですね」「うん、まあ、自分も職業的によく怪我するから。」

ああ、プロのサッカー選手なんだけどね、知らないかな？」

「…あの、ごめんなさい。中学に入学するまで、サッカーなんて全然縁がなかったもので…」

とても失礼な質問をしてしまった、と凜花は慌てて謝った。

「いやいや気にしないで。それにしても、こんな少女に酷い怪我を負わせるなんて、ひどいやつがいたものだね。災難だったね」

どうしてこんな怪我を？ とかどこで誰に？ とか、左近の父は全く聞かなかった。

そしてそのとき初めて、凜花に怪我を負わせた相手を、凜花と会った最初の時から、全く息子の左近だと疑っていないことに、凜花は気がついた。

(この親子…ものすごい信頼関係で成り立っているのかも)

凜花は、そのことから想像して、この二人は、普通の親子の関係よりも、ずっと濃い関係にあるのかもしれない、と思った。

「ねえ左近。駅前のパイ専門店アメリカのチェリーパイ買ってきてよ」

唐突に、左近の父は関係ない話をしだした。

「はあ？ 何で？」

「だって、初めて左近が、女の子を家に連れてきたんだよ！ 当然、何かお祝いをしなくちゃ」

「んなもん、いらねーよ。だいたい、駅前のパイ専門店アメリカって、自転車で行っても往復1時間もかかるじゃねーか。なんでオレがんな遠くまで行かなきゃならねーんだよっ。食いたいなら自分で

「買いにいけよ」

「だって、父さんが買いにでかけたら、左近と凜花ちゃんが二人きりになっちゃうじゃないか。それはよくない。断固よくない」

左近の父は、目をつぶって、うんうん、と何度もうなずいた。

「だったら、近所のコンビニでできとーに菓子買ってくりゃいいんだろ」

「それもだめだ。我が家では、何かお祝いするときには、必ず駅前のパイ専門店アメリカのチェリーパイと決まっている」

左近は思いつきため息をついた。

そういえば、確かに誕生日、クリスマスなどは、他の家と同じように、ケーキでお祝いするのだが、それ以外の、例えば、父親が重要なサッカーの試合で勝った日や、左近の入学式や卒業式、といった、何かの節目の日には、必ずそのチェリーパイを父は買ってきていた。理由はあえて今まで聞いたことがなかったが、まあどうせ父親が好きなだけだろう、と左近は思っていた。

そんなくだらない決まりごとのために、これから1時間もかけて遠出しなければならぬと思うと、左近はげんなりした。

しかし、父親は、ちよつとした記念日でも、嬉しいことがあった日でも、すぐお祝いしたがるうえに、そんな日は絶対にそのチェリーパイだったので、左近がどう反論しようが無駄なことは、考えるまでもなかった。

そうは言うものの、左近も心の奥では、父親が小さな記念日を大事にするという習慣を好意的に思ってはいたのだ。

もっと言ってしまうえば、普通の親だったら忘れてしまっただり前のような、息子の些細な記念日も必ず覚えていて、そのたびに祝ってくれるのは、本当のことをいえば、嬉しかった。

それは、生まれてすぐ母を失った左近を不憫に思っていて、きっとその分も左近を愛してくれているからなのだろう。

父親なりに、精一杯、母親がいない穴を埋めようとしてくれているのかもしれない、左近はそう思っていた。

だから、表面上はついつい反抗的な態度をとってしまうのだが、結局左近は、父の言う通りにしてしまうのだった。

「ったく、しょーがねーなあ。行ってこればいいんだろ」

「そうそう。じゃあ、はい、これお金ね。気をつけて行ってくるんだよ」

左近の父は、にこにこしながら、左近を送り出した。

第九章

家の中に、突然、二人きりになってしまった凜花と左近の父は、しばらくの間沈黙していた。

凜花は、何をしゃべっていいのかわからなかったもので、とりあえず、脱いだ制服を着始めた。

先に口を開いたのは、左近の父だった。

「本当はすぐにも病院に行つて、怪我を診てもらつた方がいいんだろうけど、少し二人で話したいことがあつたから、ごめんね、凜花ちゃん」

「いえ…こちらこそ突然おじゃましちゃつて…」

二人で話したいこと？ では、左近を一人で買い物に行かせたのはそのため？

凜花は、何だろうと不思議に思った。

「あのね、左近は、君に酷くあたつただらう？ 例えば、怒つたり、ひどいことも言つたかもしれない」

凜花は、驚いた。

今回起こつた一連の出来事について、凜花も左近も、何ひとつ話していないはずなのに、左近の父親は、まるで見ていたかのように、確信を持つてそう言つたからだ。

そして、それは、当たっている。

……なんで、分かるんですか？

そう聞こうとして、凜花はやめた。

さきほど、凜花は、この親子は普通の親子の絆より、ずっと深い絆で結ばれている、そう思った。

やはり、そうなのかもしれない。

だったら、左近のことなら、なんでも分かるのではないか？

凜花は、そう思ったのだ。

「凜花ちゃんは、左近をかばつてこの怪我を負つた」

(やはり……)

凜花は、左近の父をじつと見つめ、肯定も否定もしなかった。

この怪我を負った理由や経緯は、誰に聞かれても答えるつもりはなかったが、今、肯定も否定もしなかったのは、その理由からだけではない。

そもそも、必要なんでないのだ。

肯定も、否定も。

左近の父親は、自ら言った言葉に、確信を持っている。

真実も嘘も繕いも、凜花の口から何も導き出そうとはしていない。

凜花は、最初の印象よりずっと、左近の父を並みの人格の持ち主ではない、と尊敬し始めていた。

「私には妻がいたのだけど、まだ20歳のときに亡くなってね。結婚して2年。左近がまだ一歳のときだった」

(……)

それは、普段の明るい左近からも、またこの優しい父親からも、全く想像できない悲しい過去だった。

「妻は、左近がトラックにはねられそうになったのを、かばって死んだんだよ。左近は1歳だったから、そんなこと覚えているはずないし、そもそもそんな小さなこどもだった左近に責任なんて全くない。」

だけど、後でそれを知れば、それは左近にとったら、悔しくて、悲しくて、取り返しもつかなくて、今だっつてずっと、自分を責め続けているんだ」

当時のことを思い出しながら話しているのか、左近の父は、少し上空に視線を向けながら、一言一言、かみしめるように言った。

「自分を責める必要なんてない、って言ってやりたいけど、そんなこと言っただって、慰めにもならないからね。いつか、自分で乗り越えてほしいと思っている」

そのとき、はじめて、左近の父は、凜花をじつと見つめた。

凜花は、その真摯な眼差しにどきりとした。

「だから……許してやってほしい、とは言わない。ただ、今の左近は自責の念でいっぱい、他に心を配る余裕がなかったんだと思う。だから、どうか左近が君にしたことを、多めに見てやってほしいんだ。」

それから、息子がひどいことをして、父として申し訳なかった。すまない」

左近の父は、凜花に深々と頭を下げた。

第十章

「あつ、あのつ、そんな、頭をあげてください！」

先輩のことは、許すとか多めにみるとかそんなことすら考えてないです。私は、うまくいえないのですが、ただ先輩を守りたかっただけなんです。肉体的にも、精神的にも。私は、女だし、先輩より年下だし、きつと先輩のが強いのに……。変なのは分かってます。

でも、そんな自分勝手な考えで、こうなっただけなんです。悪いとしたら、私の方なんです」

凜花は、自分でも変なことを言っている、こんなんじゃ怪我の説明にもなんにもなっていない、とは思ったが、精一杯出した言葉は、凜花が思っている全ての本当のことなのだった。

そして、今回のことに限っていえば、それこそが大事なのであつて、怪我をした経緯とか理由とか、誰にされたかとか、そんなことはどうでもよかった。

「ありがとう。君は、僕と同じ気持ちなんだね。女だからとか年下だから、とかそんなの関係ないと思うよ。僕も、左近を何物からも守りたいと思っている。それが、愛している、っていうことなんじゃないかな」

穏やかで優しい表情の左近の父親が言った言葉は、とても温かかった。

（あ、愛している……）

その言葉に、凜花はドキドキして顔がぼーっと熱くなるのを感じた。でも、心のどこかで、違う、という思いが浮かび上がってきた。

違う。違うないけど違う。でも違ってない。いやそれでも違う。

凜花は、ほんの少し心の底に湧いた疑問に、激しく心を揺さぶられた。

左近のことを好きになったから、サッカー部のマネージャーに志願

したのではなかったのか？

ずっと傍にいて、左近が夢中で生き生きとして時間をすごすのを、見ていたかったのではないか？

そして、自分も一緒に夢中になりたかったのではないか？

そうだ、確かに自分は、左近に魅かれ、左近を愛していた。ただ、自分はそれを恋していると勘違いしたのではないか？

恋だろうが愛だろうが、同じではないか。何を矛盾したことを考えているんだ。

そう思ってみても、一度凜花の胸に沸き起こった疑問をなかつたことにすることはできなかった。

そして、今回の怪我については、誰であろうと、理由も経緯も何も話すつもりはなかった。

特に、凜花が暴行を受けている間思っていた、左近を守りたいという気持ち、それだけは絶対に。

(なのに……何故？)

深々と頭を下げた左近の父に、とんでもないことだと思って、顔をあげさせたかったから？

いや、違う。どんなことをされようと、凜花の意志は固かったはずだ。

ならば何故？

左近の父の人柄を尊敬したから？

左近の父が真摯に謝ってきたから？

左近の父が息子を思う気持ちに揺さぶられたから？

違う。伝えたかったのだ。

何を伝えたかった？

……分からない。

何故伝えたかった？

……分からない。

「亡くなった奥様のこと、愛していらっしゃったのですか？」

混乱した凜花は、何の脈絡もないのに、自分でも何故そんな疑問を

口にしたのか分からなかったが、気づくとそんな言葉が口をついてでていた。

話題が全然変わっていることに、さらには、初対面の相手に聞かれる質問としては、あまりにもデリカシーがなさすぎるであろう質問だということに、全く疑問も不快感もなさそうに、左近の父は答えた。

「世界で一番愛していたよ。いや、今でも愛している」

「そう……ですか」

凜花は、うつむいた。

そんな凜花を、懐かしい人に出会ったような表情で、左近の父は見ている。

「あなたはどこか似ている。桜に 亡くなった妻に。」

だから左近は魅かれたのかな」

左近の父がそう言うのと、凜花は、はじかれたように顔をあげた。

そして、穏やかに微笑む左近の父と目が合うと、たまらなくなつてまたうつむいた。

(どうしちゃったんだろう…私)

「ただいまー」

その時、玄関の方から、左近の声がした。

その声で、凜花は現実引き戻された。

今まで凜花の中でもややもやしていた気持ちはいっぺんにどこかへ消えていった。

「ったく。ほんと遠かった。ほら、買ってきてやったぞ、駅前のパイ専門店アメリカのチェリーパイ」

リビングに入ってきた左近は、ぐちぐち文句を言いながら、チェリーパイをテーブルの上に無造作に置いた。

「ありがとう。早速切り分けよう」

左近の父はそう言つて、キッチンの方へ、パイを持って行った。

それを目で追いながら、ソファに横たわっていた凜花に、左近は耳打ちしてきた。

「なんか、うちに連れてきて余計悪かったな…。父さんの変なこだわりのせいで時間くっちゃまってさ」

「そんなことないです。いいお父さんですね」

「そうかー？」

左近とそんな話をしてしていると、切り分けたチェリーパイを持って、左近の父がにこにこしながらやってきた。

「このチェリーパイはね、絶品だよ。お店がこじんまりしてるし、ちよつと人が立ち寄らないような場所にあるから、あまり有名じゃないんだけど。凜花ちゃんも食べたことないと思うけど、ほんとにおいしいから」

いつも何かの記念日にこの親子が食べている、というそのパイを凜花も食べた。

一口食べた時、あれ？ と凜花は思った。

(これ、初めて食べたんじゃない)

でも、確かにお店の名前も知らない名前だったし、アップルパイなら何度も食べたことはあったが、チェリーパイなんて、そもそも生まれて初めて食べたはず…。

一口食べたまま、固まった凜花を見て、心配そうに左近の父は聞いた。

「凜花ちゃん、おいしくなかった？ それともどこか傷が痛む？」

「あつ、いえっ、そのっ、すごくおいしいです。あまりにおいしくてちよつとびっくりしただけで……」

「大げさだなー。まあ確かにうまいけどな」

もぐもぐパイをほおばりながら、左近は言った。

第十章（後書き）

いつも、読んでくださってありがとうございます。

今回のお話は、ブログでもアップしており、恒例の今重朱里さんによるイラストも載せてあります。

ちよつと、興味があるなー、なんて方、ブログでお待ちしております
す^^

引き続き、感想等、お待ちしております！ お気軽にお寄せくださいませ。

それでは、またこれからも、よろしく願います。

第十一章

左近の父に礼を言つて、凜花と左近は凜花の家に向かつていた。

時間も夜の7時を過ぎていたし、何より大怪我している凜花を一人で家に帰すわけにはいかなないので、左近が送ることになったのだつた。

左近は、まだまともに歩ける状態じゃないだろ、おぶされ、と言つたが、痛みもこの数時間の間に随分ひいていたので、凜花は丁寧に断つた。

凜花の家についたとき、凜花は送ってもらつたことの礼を言つた。

「お前、自宅は学校のすぐ近くにある、とか言つてなかつたか？
めっちゃくちゃ遠いじゃねーか」

「…あ、あの、その、すみません」

そう言えば、さつきは、病院に連れて行かれると困る、という思いから、咄嗟にそんな嘘をついたのだつた。

「病院嫌いとかが、ガキくせーこと言つてないで、ちゃんと明日にでも病院いけよ。んじゃまた明日な。つてその怪我じゃあ、部活は無理か」

「……？ 私、マネージャーを首になつたんじゃ？」

「ばーか。あれはその…売り言葉に買い言葉つていうか…んー、もうとにかくくれはなしだ、なしっ」

左近は、照れているのを精一杯隠そうと、必死に言い訳した。

「それは嬉しいです。ありがとうございます」

「はーっ。お前つてほんつと、バカがつくくらいお人よしだな。あんな酷い言われ方して、怒りもしないで、正直、もう会いたくないつて言われるかと……思った」

いつも、自信たっぷりで、ぶつきらばうな左近が、最後の方には、少し悲しそうに、消え入りそうな声で言つた。

「そんな訳ないじゃないですか。私はまだまだ、先輩と一緒に、サ

サッカーに夢中になっていたいですよ」

珍しく悲しそうな左近を元気づけようと、凜花は、笑ってみせた。

「あのさ…お前、前にオレに告白してきただろ？」

左近は、真剣な目で凜花を見た。

「ああ、はい、しました」

「今、その返事、していいか？」

左近は、こんなに緊張するのも、ドキドキするのも、きっと生まれ
て初めてだろう、と思った。

でも、もう自分の気持ちに知らないふりはできない。

お前だって、いずれ本気で人を好きになったら、その気持ち
ちが分かるさ。

2年の部活初めの日、吉川が言っていたことが、今なら分かる。

(こういう気持ちか…)

「はい」

凜花の返事を聞くと、左近は一度深呼吸をした。

大事なサッカーの試合前にも、左近はよくそうした。

「凜花：お前のことが好きだ。何より大切だ。…そばに、いてほ
しい」

凜花の目をまっすぐ見て、素直に左近は自分の気持ちを伝えた。

「ご、ごめんなさいっ」

しかし、先に告白してきたはずの凜花は、思いつきり頭を下げた。

「は？」

凜花は、自分のことが好きだから、サッカー部のマネージャーに志
願してきたのではないか？

はつきり、本人の口からそう聞いた、というか告白されたはずなの
に。

左近は、まさかこんな展開になるとは思いもよらず、目が点になっ
た。

「ええと…それはどうということなのか、聞いてもいいのか？」

相変わらず、左近は混乱していたが、何とか、疑問を口にした。

「…私もうまく説明できないんですけど、先輩のこと好きなのは、今も変わっていません。だけど、付き合うというか、恋人にはなれません。ごめんなさい」

「やっぱり…今日のオレのしたこと、幻滅したのか。まーそりゃそうだよな。あんなことがあったのに、ちよつと虫がよすぎたよな…」
左近は、誰から見てもすぐ分かるくらいに、がつくり肩を落とし落ち込んだ。

だから、凜花は、慌てて否定した。

「違いますっ。今日の話は、本当に先輩のこと悪くなんて、これっぽっちも思っていないです！」

「じゃあ、何で……」

左近は、憂いを秘めた表情に、伏し目がちの瞳で、悲しそうに凜花を見つめた。

左近ほどの美少年はそうそういたものではなく、左近に惚れる女の子は大勢いた。

そんな彼女たちがこの眼差しを受けたら、卒倒してしまうのではないか。

しかし、そんな眼差しは、その他大勢の女の子に向けられることは決してないのだ。ただ一人、凜花だけのために、向けられるのだ。

「…どう説明したらいいのか、私も分かりません。自分の方から告白しておいて、お断りするの、とっても失礼だと思います。でも、やっぱり先輩の想いは、受け取るわけにはいかないんです」

「……分かった。理由は全然分かんないけど、まあふられたってことは分かった」

さっきまで、落ち込んでいた左近は急に明るくなって、笑った。

「これまで通り、同じ部活の先輩と後輩として、楽しくやれりゃそれでいいや。」

んじゃーオレは帰るわ。怪我直つたら、また部活でな」

後ろ姿でひらひらと手を振りながら、左近は夜道に消えていった。そんな左近の姿が見えなくなるまで、凜花は左近の後ろ姿をみてい

た。

左近がサッカーに夢中になる姿が、あまりにいきいきしていて、輝いていて、いつまでも見ていたいと思った。

一緒に夢中になりたいと思った。

あの日の想いは、今でも同じだ。

今だって……大好きだ。

だけど……。

何か心にひっかかるものがあるままで、左近の想いを受け止める訳にはいかない。

それが何なのかはわからないけれど、凜花はそう思っていた。

左近の想いを断らなければならなかったのは、本当はものすごく悲しかった。

心にひっかかるものがなければ、凜花は喜んで左近の想いを受け入れただろう。

そして、ずっと大好きだった左近と両想いになれるのだ。

こんなに嬉しいことはないはずなのに。

(ああ、自分はもうしたらいいの……)

左近の姿が消えてしまっただけから、凜花は一人泣いていた。

凜花の前から立ち去るときは、普段通りに振舞って、何事もなかったかのようにあっさり別れたが、凜花の家からだいぶ離れたところで、左近は道の真ん中に座り込んだ。

夜だったし、普段からあまり人通りのない道だったので、誰かの交通の邪魔にはならなかった。

でも、仮にこの道に人が大勢いたとしても、左近は座り込んでしまっていただろう。

周囲のことを気にかける余裕なんて、今の左近にはなかった。

それほどに、落ち込んでいた。

今まで、何十人の女の子に告白され、女の子に全く無関心だった左近は、そのたび断り続けてきた。めんどくさいな、と思いながら。

一応丁寧に断っていたのは、自分の意志ではなく、吉川にそうしろと言われただけだからだ。

そんな自分を、なんてひどいヤツだ、と今やつと思った。

自分にとっては、何十回もの出来事だったが、その女の子にとっては、一度きりのことだったのだ。

おそらく、彼女たち一人一人も、今自分が受けているほどの、相当のショックを味わったのに違いない。

そんなことを気にかけてことなんて、ただの一度もなかった。

「ははっ」

(笑っちゃうよな)

左近は、暗い夜の道の真ん中で、自嘲気味に笑った。

因果応報っていうけど、ほんとに自分のしたことが、自分にも返ってきたのだ。

(罰があたったのかなあ…)

こんなときにも、思いだすのは、凜花の笑顔だった。

我ながら未練がましいとは思っても、ただただ、心に浮かんでくるのは、凜花と過ごした楽しい日々ばかり…。

最初は、変なヤツ、くらいにしか思っていなかった。

それなのに、いつの間にか、凜花のことが気になっていた。

そして気づけば、自分は凜花を好きになっていて、凜花は、左近にとってかけがえのない存在になっていた。

ずっと女の子に無関心だった自分は、そのことを認めるのに、随分時間がかった。

やっと、自分の気持ちに向き合って、素直になっただら…こんな結果だ。

どんなにたくさん女の子に好かれようが、たった一人、自分の愛した人に好きになってももらえなければ、なんの意味もない。

(なんの意味もねーよ…)

左近は、夜空に浮かぶ月を寂しそうに仰いだ。

第十一章（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました。

この章までで、少しは物語に展開がでてきたと思いますので、次回からのアップは、少しゆっくり、間をあけてアップしていこうと思います。

あと、この章も個人ブログにもアップしてあり、この章のイラストも載せてあります。（イラスト、見に来ていただけると大変嬉しいです><）

本編のアップとアップの間に、もし、「暇になっちゃったなー」なんて方、いらっしゃいましたら、ブログの方で、番外編や、パロディ、裏話、関係ない話等もやってますので、そんなときは、ブログへ遊びにきていただけますと、めちゃくちゃ喜びます。よかつたら是非いらしてください！！（ブログも本編と同じくらい気合入れて書いてますのでっ！）

イラストの方ともあわせて、よろしくお願いいたします。

<http://ameblo.jp/lovecherry/>

「桜花爛漫」です。

感想等もお待ちしております^^ 是非お気軽にお寄せくださいませ。

第十二章

凜花は、一月後くらいに、怪我もすっかりよくなって、サッカー部にでてくるようになった。

休んでいる間の理由は、体調がよくないので、しばらく部活をお休みします、とだけ、左近が凜花に言われた通り、他の部員達に伝えた。

部員たちは、明るくてかわいい凜花がいないと寂しいなーなどと言っていたが、吉川だけは、左近に、ほんとは何かあったんじゃないのか？ と聞いてきた。

「なんにもねーよ。そう伝えてくれって頼まれただけ」

物事に敏感な吉川は、凜花のことを心配していたが、左近は、まだふられたショックが癒えず、凜花の話をするだけでも、本当は辛かった。

そんな左近だったから、一か月ぶりに会う凜花には、どう対応していいのか分からなかった。

しかし、実際凜花に会ってみると、まず、怪我がすっかり良くなっていて、あの痛々しい凜花を最後に見たきりだったから、それは単純に嬉しかったし、また今日からは毎日凜花に会えるのだと思うと、自然に心は浮きたつのだった。

「休んでいる間、ご迷惑をおかけしました。今日からまた頑張りますので、よろしくお願いします」

凜花は、サッカー部の部員皆に頭をさげた。

「そんなの気にしない！ おかえり、凜花ちゃん」

「おかえりー。もう大丈夫なの？」

部員たちは、凜花が来るのを待ち焦がれていたのので、凜花を囲んでお祭り騒ぎだった。

そんな輪の中心にいた凜花が、左近の方へ視線をやった。

「部長。ご迷惑をおかけしました。改めてよろしくお願いします」

「お、おう。まあ、べ、別にお前がいなくらい、全然迷惑でもな
んでもなかつたけどな」

凜花が、笑顔で言うので、左近も合わせて何とか普段通りに言葉を
返した。

（何だ…全然普段通りじゃんか…）

まあ、憐れまれたり、変に気を使われたりされるよりは、よっぽど
よかつたが。

そして、部活が始まって1時間くらいしたころ、突如吉川が左近の
隣にきて、小さく耳打ちした。

「お前……凜花ちゃんにふられただろ」

「え……」

左近は、めちやくちや驚いた。
ので、絶句してしまった。

凜花が部活に戻ってきて、最初に会話して、その後この1時間の間
に何回か言葉を交わしたただけだった。

左近も凜花も、いたって普段通りの会話や、やり取りをしていただ
けだったはずだ。

なのに、何でそんなことが…。
こいつ、前々から思ってたけど、物事の洞察力…はんばねー、と驚
いて吉川を見つめた。

しかし、それを認めてしまうと、色々めんどろなことを聞かれそう
だったので、左近は必死に冷静さを保ちつつ、慌てて、吉川の言っ
たことを否定した。

「んなわけねーじゃん。何突拍子もないこと言ってるんだよ」

それを聞いて吉川はため息をついた。

「二人ともぎこちなさすぎ。何かありました、って言ってるような
もんだよ」

「……」

自分では普段通りに振舞っているつもりだったし、左近から見た凜
花だって、いつもと変わらないように見えた。

しかし、吉川の目はごまかせなかったようだ。

「最初は、凜花ちゃんの方がふられたのかと思ったけど、逆だね」

(うつ……しかもそこまでの確に……)

「告ってふられたんだろ？」

もうここまで言われてしまえば、左近は無駄な抵抗をする余地もなかった。

なので、黙ってうなずいた。

「やっぱりそうか……。そりゃ……。辛かったな」

吉川は地面に視線を落として、ぽつりと言った。

いきさつを根掘り葉掘り聞く訳でもなく、同情する訳でもなく、ただ一言、彼はそう言った。

言葉は短かったが、左近の気持ちを思いやる感情が、十分伝わってきた。

なので、左近は急に感傷的な気分になった。

まさか、女の子にふられて、それを友人に慰めてもらう日がこようとは、今の今まで一度も思ったこともなかったのに。

凜花に受け止めてもらえなかった想い、だけどまだ断ち切ることができずにいる想い、その辛さを、一緒になって共感してくれる吉川の優しさを嬉しく思う気持ち、それらが、一気にあふれ出てきた。もう、嘘をつくのも、取り繕うのも、そんなことがどうでもよくなっていた。

「もーさあ、ほんと情けねーよ。今まで誰かに告白されたら、めんどくさいとか思って、適当に断ってたんだ。オレってほんと最低だった。そのくせ、いざ自分が同じ目にあったら、こんなざまです……。ほんともう、しばらく立ち直れそうにない……」

左近は、素直に気持ちを打ち明けて、がっくりとうなだれた。

「なにお前らしくないこと言ってたよ。まだ好きなら、あきらめなきゃいいだけだろ」

「あきらめなきゃいいだけって……。それってうざくないか？」

あっさりとそう言い切る吉川に、左近は顔を上げて、不安そうに彼

の顔を見つめた。

「1点取られたら、2点取り返せば、勝ち」

にっと笑って吉川がサッカーに例えるので、左近も何だか急にポジティブな気分になってきた。

「…そっか。そーだよな。2回ゴール決めるくらい、楽勝だな。なんせ、オレは点取り専門の9番背負ってるんだから」

「そうそう、その意気。まあそうは言っても、ゴールは一人で決めるものじゃない。司令塔の俺が、いい案だしてやるよ」

サッカー部では、7番の背番号をつけているMFの吉川は、頼もしそうにいった。

実際の試合でも、吉川は頭が回るし、先が読めるしで、よく左近に絶妙なパスを出してくれる、まさに司令塔、だった。

「へえ。どんな案？」

すっかりその気になった左近は、吉川の策に期待をかけた。

第十二章（後書き）

いつも、読んでくださって、ありがとうございます。

今日は読んでくださっている方々にご報告があります。

私の書いた「すもももももものうち」が某出版社のウェブサイト&雑誌に掲載されることになりました。

これもひとえに、皆様のおかげだと思っています。

重ねてお礼申し上げます。

なお、掲載についての詳しい説明はブログに載せてあります。

もしよかったら、遊びにきてください^^

第十三章

「まず、今日から凜花ちゃんと一緒に帰れ。部活が終わるころはもう暗くなっているから、女の子一人で歩くのは危険だから、とかなんとかいって」

「い、いきなりハードじゃねーかつ。第一今までだって部活が終わる時間は一緒だったのに、凜花は一人で帰ってたんだぞ？ 急におかしいだろ」

「そこはだ、部長として今までは配慮が足りなかったって反省した、とか言えはいい。とにかく少しでも二人きりの時間を作ること。これがまず大事だな。けど、二人きりといっても、ふられた直後でいきなりデートに誘ったりはまだ早い。その点、夜遅くなったから、と家に送っていくのは、男として全然普通のことだし、ましてやサッカーの部活で遅くなってるんだ。部長としてそれくらい当然だって言えば、下心なんかより誠意の方が感じられる」

（んーそんなもんかなー）

左近は少し考え込んだが、確かに、吉川の言うとおり二人きりにならなければ、気持ちを伝えることも、アピールすることもなかなかできない。

サッカー部の部活でいくら長い時間一緒に練習している、といっても、その間にする会話なんて限られていたし、そもそも練習することが目的なのだから、長々とプライベートな話をする訳にもいかない。

凜花にもう一度、好きになってもらうためには、やはり二人きりの時間は必要なかもしれない。

「んーよし、分かった。今日からそうしてみるか」

左近は、決意に満ちた顔で吉川を見た。

「そうそう。頑張れよ」

「あーでも考えてみたら、やっぱり緊張する…。なんて切り出したら

いいんだ……」

しかし、そのたった数十秒後には、がっくりとうなだれていた。つい一カ月前までは、あんなに気楽に凜花に話しかけていたくせに、今の左近は、自信は喪失しているは、凜花のことを過剰に意識しすぎているはで、全く頼りなく弱弱しかった。

「ああっ、もう！ お前の方がそんなんだつたら、凜花ちゃんだつて意識してめちゃくちゃ気まずいだろっ。ここは精一杯普段通りを心がけて、何気なく誘うんだよ。以前の左近みたいに、ぶっきらぼうなくらいでいい。とにかくさっき俺が言ったような理由を話して、なるべく自然に誘え」

「……できるかなあ……」

左近は、まだしおれたままだつた。

どうやら、ふられたことが未だ相当なショックであるらしい。

その時、部活の顧問の滝口先生が、部員全員を集める声がした。

それで、この計画の話はここまでとなった。

左近は、ふらふらと、先生の元へ歩いていった。

その後ろ姿を見ながら、吉川は不安に思っていた。

(ダメかもしれない……)

第十四章

部活が終わるころは、もう夜で真っ暗なので、女の子を一人帰らせるのは、今まで配慮が足りなかった。部長の責任として、これからは家まで送っていくから、と、吉川に言われた通りのことを凜花に告げて、左近はドキドキしながら凜花の返事を待っていた。

吉川に言われた通り、なるべく平然と、何気ない話し方をしたつもりだった。

だが、凜花の顔を見れば、ドキドキするし、心の中はとても平然となどしていられなかった。

断られたらどうしよう、振られた直後だっていうのに下心丸出しだと思われて、余計嫌われたら…、などと悪い想像ばかり浮かんでくる。

しかし、予想に反して、凜花は嬉しそうに笑った。

「気を使っていただけで、ありがとうございます。よろしくお願ひします」

「え？ あ、いいの？」

左近は、想像していたのと全然違って、あまりにあっさりオーケーをもらえたことに、すっかり拍子ぬけた。

だから、同時に緊張も一気にどこかへ飛んで行ってしまった。

「いいも悪いも、私がお世話になるんですよ？ どうして先輩がそんなこと聞くんですか？」

「…そりゃ、だって…オレ一応ふられた、訳だし…。一緒になんて帰りたくないんじゃないかって…」

「何言ってるんですか。前言ったと思いますけど、先輩のことは大好きなんですよ。一緒に帰れるなんて、嬉しいです」

嬉しいです…。嬉しいです…。

左近の心に、まるでエコーのように、凜花の返事が何度も繰り返して響いてきた。

そしてその言葉と、凜花のあどけない笑顔が重なって、左近はもう、何が何やら訳が分からなくなってしまった。

幸福の絶頂にありすぎたのか、左近は頭の中がぐちゃぐちゃになった。

「べ、別にオレは、お前と帰りたいから誘ってる訳じゃないんだからなっ。夜だからっ、お前も一応女だから、危ないと思っただからなっ」

なので、そんな思ってもないことが、つい口をついてでてきた。

(あー、何言っただよっ)

バカだろオレ、などと後悔しても、もう放ってしまった言葉は取り消せない。

「はい、分かっています。それでも、嬉しいんです」

それなのに凜花は、笑顔を絶やさず、左近を愛おしそうに見つめている。

本当は、そんなふうに言ってもらえるのが、ものすごく嬉しかったのに、今までよりも、もっともっと、凜花のことを好きになっしまうのに、素直に態度にだすことができない。

「…ま、とにかく帰るぞ」

無愛想にそう言って、左近は凜花の持っていた鞆を黙って奪った。

凜花は、最初少し驚いたようだったが、すぐ、左近の後を追ってきた。

第十四章（後書き）

なんかこの章で、左近くんがツンデレキャラになってしまいました
(- - -)

そんなキャラにするつもりは、全然なかったんですけど……（＜
>）

女の子のツンデレはかわいいと思うんですけど、男の子のツンデレ
って…どおなんでしょう……（^- - ^-）

あ、それから、昨日と一昨日のブログに、またまたラッキーなことが
起きたので、ご報告として書いておきました。ちよつとだけ詳細
を言いますと、某出版社様の雑誌で連載決定…とかその他色々幸運
な出来事が起きました、と、そういう嬉しいお話です^^

私的に、本当に、あきらめないで小説書いててよかったー（*^^
^^）と思えるような出来事なので、少しお時間ありましたら、ご
覧くださいっただけると嬉しく思います。

<http://ameblo.jp/lovecherry/>
よろしく願います m(_)_m

第十五章

「何で、オレと一緒に帰るのが、嬉しいんだ？」

二人で夜道を歩き始めると、ぽつりと突然左近が、凜花にそう質問してきた。

「それは…、先輩のことがもつと知りたいと思っていましたからです。

あと先輩のお父さんのことも……」

凜花は、左近の家から去った後、何故かずっと、もつとあの二人のことを知りたい、と強く願っていたので、その質問に答えるのは簡単だった。

「はあ？ 父さんのことを知りたい？」

自分のことを知りたい、と言われたところまでは嬉しかったが、何故突然左近の父のことがでてるのか、左近は分からなかった。

「あつ、あの、その…先輩のお父さんがプロのサッカー選手だったとか、私全然知らなくて、失礼な質問をしてしまいましたし……」

凜花は、確かに、左近の父親のことを知りたい、などと思うのは、突拍子もなく、不審に思われてもしかたのないことなのだと思います。返して、慌ててそれらしい理由を口にした。

「別に失礼でもなんでもねーだろ。お前、マネージャーに志願するまで、サッカーなんて興味なかったんだから。知らなくて当然だろ」
「でも…とてもいいお父さん…でしたから」

凜花は、あの日の左近の父を思い出して、うつむいた。

温かくて、優しくて、まるで凜花の全てを包み込んでくれているような錯覚に陥ってしまう、不思議な魅力を持ったあの男の人を。

「…まあ、別にいいけど」

左近は、それ以上特にそのことに疑問を持たなかったようで、そこで会話は途切れた。

しばらくお互い無言のまま歩き続けていたが、凜花は、思い切って、聞きたいことを聞いてみた。

左近と左近の父のことについては、聞きたいことは山ほどあったのだ。

せつかくこうして二人きりになれたのだから、早く知りたい、と思っただった。

「先輩のお父さんは、プロのサッカー選手だから、先輩が小さい頃から、たくさんサッカーと一緒にやっていたのですか？」

「そーだなあ。物心つくまえから、気づくと公園とか空地で、一緒にボール蹴ってたな…」。

まだ、5歳とか6歳とかのこどもに、リフティング1000回続ける。とか無理なこと言ってきた、できるまで、何回も何回もやらされた。

それで、小学校になるころには、地元の有名サッカーチームの下の組織の、ジュニアってところに入らされて、サッカー漬けの毎日だったな。

他の同級生は、漫画とかアニメとかゲームとかに夢中だったのに、オレは毎日毎日サッカーばっか。

最初は不満だったけど、いつの頃からか、オレ自身、他のことなんてどうでもよくなっていた。それくらい、サッカーが好きになってたんだな、今思うと。まんまと父さんの策略にハマったみたいで、ちょっと悔しかったけど、うん、まあ、感謝はしてる。

中学になったら、当然その上の、ジュニアユースに入れてもらえると思っただけで、なんでかしんねーけど、父さんがセレクションを受けるのすら許してくれなくて、ああ、セレクションって、よーは試験のことなんだけど、あんときは、めっちゃ喧嘩した。

セレクションに落ちて入れないなら納得いくけど、その前の時点のセレクションすら受けさせてもらえないなんて、なんでだよってさ。

父さんは、サッカーならジュニアユースに入らなくても続けられる。今のまま、もしジュニアユースに入れたとしても、監督とか周りの人間はお前を特別な目で見るから、お前のためにならない。本当の

実力をつけて、誰からも文句を言わせないくらい圧倒的にうまくな
ってから、またチームに帰ってこい、って言うんだ。

当時の小学6年のオレには、全然意味分かんなくて、やっぱり喧嘩
した。それでも、父さんは、頑として譲らなかつたから、こうして
中学の部活でサッカーやってる訳なんだけど、今なら、何で父さん
がジュニアユースにいれたくなかつたのか、分かる。

親の七光りで、周りにちやほやされて、そんで自分に実力があると
勘違いして、舞いあがっちゃって、オレは練習を怠ったりするよう
になったかもしれない。練習しなければ、当然実力もつかないから、
普通ならチームにいらなくなるんだろうけど、親の手前、下手な
やつだったとしても、常にレギュラー扱いとかされるんだろう。

そうすると、もっともつと、自分は実力があるんだって勘違いして、
また練習をしなくなつて……って、そんな悪循環が起こるだろうって、
父さんは予想してたんだ。

あくまで予想だし、そうなつたかどうかは、オレには分からない。
けど、たぶん、そうなつただろうな。オレは単純だし、自信家だし。
そういうところも、父さんは見こして、そう言つたんだって、最近
分かつた。

だから、父さんの言つた通り、誰からも文句を言わせないくらい圧
倒的にうまくなつて、高校生になつたら、ユースに入るのが、今の
オレの夢かな。もっと将来的な夢だつたら、プロのサッカー選手に
なること、だけど」

サッカーについて語るときの左近は、練習しているときと同じくら
い生き生きしていて、楽しそうで、本当に素敵だつた。

初めて、サッカーに夢中になる左近を見たときは、その左近の姿に
凜花は夢中になつた。好きなものに熱中して、真剣に取り組む姿と
いうものは、この世の何よりも美しく、人を引き寄せてしまうもの
なのではないだろうか。

どんな人も、その瞬間は、キラキラと輝いているのだ。

そんなに夢中になれるものを見つけられた左近も、例え、その好き

なことに對して、どんなに実力を持つていたとしても、決して自惚れることなく努力を続けることも、さらには、その先に大きな夢を持ち続けることも、その全てが凜花には、まぶしく映った。

「あー、なんか、つまんねーことたくさんしゃべっちまったな、わりい」

凜花は、首を横に振った。

「そんなことないです。私の知らない先輩のを知ることができ、嬉しいです。もっと、先輩のこと、好きになりました」

「…そういうことは、ふつた相手には、ふつー言わねーんじゃねーか？」

「あ、その…ごめんなさい」

「あー。別に謝らなくてもいいよ。ただ…んなこと言われると……勘違いしちまうだろーが…」

左近は、以前凜花がみたような、伏し目がちの美しい瞳で、地面を見下ろしていた。

ただ、その長いまつ毛から覗いている瞳は、以前のような憂いを秘めた悲しげな瞳ではなく、とてもやわらかで、穏やかだった。ともすると、ほんの少しだけ笑っているようにもみえた。

> i 2 7 2 8 0 — 3 4 3 9 <

こんな美しくて、繊細な表情ができる男性を、凜花は他に知らなかった。

時も忘れて、見入ってしまうほど、ただただ美しかった。

左近の顔の造作が整っているから、というのも、理由のひとつではあったのだろうが、きつと、左近の心を動かす感情がとても繊細で、美しいからなのだろう。

凜花はそう思った。

そして、その表情は、左近の父を思い出させる。

そういえば、彼も、こんな繊細な表情を凜花に見せた。

そんなことに想いを馳せながら、今、こつして左近と二人きりでいられることが、とても幸せなのだった。

第十五章（後書き）

なんか、サッカーの話がやたら長くて、説明ばかり続いて読みづらくてすみません>>

あと、今回挿絵を入れてみました。

いつもと同じく知り合いの今重朱里さんのイラストです。

第三者のイラストではありますが、私の名前でアップしており、その第三者の方の了解があれば、載せてもいいと規約に書いてありましたので、問題ないと思います。

これからも、こちらでイラストをアップするか、前のようにブログのみでアップするか、検討中です。

なにはともあれ、今後もよろしくお願いします。

<追加>今日7月15日（金）に、イラストを修正後のものと入れ替えました。

第十六章

初めて左近に家まで送ってもらった日から、毎日ずっと二人は一緒に夜の道を歩いて帰った。

凜花の家まで、歩いて約40分。

その間に、時に笑いあったり、左近の話を聞いた凜花が左近にますます魅かれたり、左近の父親のことも、教えてもらったりした。

二人は以前よりずっと、お互いのことを知ることができたし、左近に至っては、凜花のことを好きだという確信をますます強くしていた。

凜花の方だって、自分の知らない左近を知ることができるのは、ただ純粹に嬉しかった。

二人にとつて、この40分は、かけがえのない時間になっていた。

「んでさ、ジュニアの練習とか試合とかで丸一日使う日とか、父さんがはりきって弁当作るんだけどさ、これがまたすごいっつーか、なんつーか…恥ずかしくて友達の前では食べにくいんだ」

「ええ？　どんなお弁当なんですか？」

母親代わりに父親が、小学生の息子のために作る弁当。

凜花は、日の丸弁当みたいなのかと思った。それは確かにいくら男子といつても、小学生にしてみれば、恥ずかしいだろう。

「まあ、毎回違うんだけどさ。例えば、ある日は動物弁当。玉子焼とかおにぎりとかそういう弁当の中身が、くまとかうさぎとかねこになってる…」

予想とは反する答えに驚きながらも、凜花は、ついぷつと吹き出してしまった。

「おかしいだろ？　それが毎度毎度いろんなヴァージョンでくるからさ。他には、ハートマークばかり入ったのとか、もうそんなんばっか。凝り性なのは分かるけど、毎回弁当のふた開けるの、すごい恥ずかしかった」

「いいなあ。私だったら嬉しくて喜んじやいますけど」

左近は、父親のことを凝り性だと言ったが、確かにそれもあるのかもしれないが、凜花は、それだけではないだろうと思った。

凝った弁当を毎回趣向を変えて作るのは、正直大変だし、時間も手間もかかる。

それでも、左近の父がずっとそうし続けたのは……左近の母が亡くなっていたからなのではないか。

母親だったら、小学生のこどもにこんな弁当を作ってやったんだろうか、とか、それだったらその分父親である自分が作ってやらなければ、などと思ったのだろう。

そう考えると、凜花の胸は少し痛んだ。

左近の父親は、左近に片親だけの寂しい思いや、みじめな思いをさせまいと精一杯、両方の親であろうとしたのだ。

左近は左近なりに、母親がいないことについて、本当のところは、寂しい思いをしたこともあったのかもしれない。

けれど、なるべくそれを取り除きたい、そういう愛が、左近の父のとる行為には、にじみ出ているのだった。

さらに、左近の話から聞くに、それだけではないとも凜花は思った。まず、初めて左近の家に行った日に感じたことだが、左近の父は、左近を絶対的に信頼している。

あの信頼関係は、どう築かれたものなのか、と凜花は思っていたが、ここ何日かで左近の話を聞いたら、それがどうということだか理解できたのだ。

左近の父は、左近が小さなときから、常に左近の意志を尊重し、左近が間違ったことをしても、温かく見守った。左近が自分で間違っている、と気づくまで辛抱強く左近を見守り続けた。

他人に害を及ぼすような、明らかに他者に迷惑がかかるような行為は、もちろんすぐに厳しく注意したらしいが、それ以外は基本左近の好きなようにやらせて、どんな生き方がいいのかとか、どうやってなら納得のいく人生を過ごせるのか、とか人生の指針となるような

ことは特に、ほとんど左近自身が自ら答えをだすように仕向けた。そのため、例えば、たくさん本を読ませたり、歴史の偉人の話を聞かせたり、左近が目指すべき目標を見つけるために、あらゆる情報と機会を与え続けた。

その情報の中には、左近の父自らの人生を見せつけることも含まれていたのだろう。

その結果、左近は、父親に何一つおしつけられることなく、全て自分が興味を持ったことを、自由に試しては、その中から、自分の生きるべき方向を見定めていった。

そしてそれは、現在もおそらく進行中なのだ。

左近は、今はサッカーのことしか考えていないが、自分でも気付かないうちに、きっとそれ以外も試行錯誤していて、どんな人生をおくりたいのか、常に模索している。

左近は、中学2年生。まだまだ子どもなのだから。

そして、その傍らには、常に左近の父親の姿があり、温かく見守っている。

左近の父親が、左近を信用しているのはもちろんのこと、そんなふうに育ててくれた父のことを、左近も信用している。

左近は、父について凧花に話すときいつも、親ばかりすぎるとか、うざいとか、常にぶっきらぼうな言い方をしていたが、それは左近の性格上、素直になれないというだけの話であって、心の底では、好きだし、尊敬もしていることは十分理解できた。

このように左近の父親が左近を育てたことによって、お互いが、絶対的な信頼関係で結ばれるに至ったのだ。

二人の関係が、親子、という関係を飛び越えて、人間と人間との関係として、素晴らしいと、凧花は思った。

左近の父親が、信念を持って左近を導いたこと、それに左近も理想的な形で応じたこと。

二人の努力と成長が、凧花は何故か、とても嬉しかった。

他人の家庭の事情だというのに、まるで自分のことのように嬉しか

った。

左近が生まれてからの14年間の二人の生活を知った今、胸に熱いものが込み上げてくる。

（ああ、ありがとう…）

凛花は、誰にともなく、そう心の中でつぶやいた。

その時見上げた今日の月がにじんで見えたのは、凛花の瞳が潤んでいたからなのだった。

第十七章

二人が一緒に帰り始めてから、何週間か経った頃、部活の練習の合間に、吉川がこっそり左近にその後の経過を尋ねてきた。

「もうだいぶ二人きりの時間を過ごしたから、少しは距離が縮まったのか？」

「んー、そうだなあ。あいつ、オレが話すると、なんかしんねーけど、すごい嬉しそうにするんだよなー」

左近は、月明かりの中で、はつきりとは見えない凧花の笑顔を思いだしていた。

夜なんだから、相手の表情がはっきり見えないのは当たり前だったが、それでも凧花は、左近と一緒に帰る時、心の底から喜んでいて、左近との時間を大切に思ってくれている、そういう確信があった。

「それはいいことじゃないか。脈あり、ってことももれないな。どうだ？ このあたりで、思い切ってデートなんか誘ってみて、さらに二人の仲を進展させてみるっていうのは？ まあちよつとした賭けだけだな」

(デートか…)

左近は、凧花と遊園地に行ったり、一緒にサッカーの試合を見に行ったり、映画を見に行ったりする場面を思い浮かべた。

二人は、どのアトラクションから乗ろうか、と計画を立てたり、今のサッカーのプレイは、すごかったね、などと興奮しながら意見を言い合ったり、映画の感想を話し合ったりするのだ。

大好きな凧花が隣にいて、そして、左近を見つめて笑っている。想像しただけで、きつとそれは、左近にとって素晴らしい時間になるだろうと思えた。

けれど……、

「デートはやめとくわ」

左近はあっさりそう答えた。

「え、何で？ 断られるとショックだからか？」

「んーそういう訳じゃないんだけど、なんか今のままでいいや、っでどこかで思っちゃってさ…。あいつが嬉しそうに笑ってるのを隣で見ているなら、もうそれで十分なのかもしれない」

左近は、空を仰いで、目を細めて穏やかに微笑んでいた。

それはついちよつと前の、凜花にふられてどん底まで落ち込んでいた頼りなくて弱弱しい左近とも、なんとしても凜花を手に入れたいと焦っていた左近とも、全然違う表情だった。

好きな人を温かく見守り包み込むような、大きな愛情が、左近をそんな境地に立たせているのかもしれない。

（ふうん。左近、成長したじゃないか）

ま、このまま二人がどうなるか、最後まで見させてもらおうよ、と吉川は心の中でこっそりつぶやいて、にっと笑った。

第十八章

その日の帰り道は、雨が降っていた。

サッカーというものは、雨が降ってもやるのだ、あまりにひどくなければ。

凜花は、屋外競技なのだから、当然部活は休みになるのだろうと思っただが、左近にそれを聞いたら、本番の試合でも雨の中やったりするのだそうだ。

まだ練習を始めた頃は、現在ほどのひどい雨ではなかったから、部活はいつも通りの時間に始まり、通常通りの午後8時まで行われた。そして、時間が経つにつれ、雨は激しさを増し、部活が終わるころには、ひどい雨になっていた。

そんなどしゃぶりの雨の中、二人は並んで傘をさして、いつものように凜花の自宅へ向かって歩いていった。

二人で道を歩く時、左近は常に凜花を自分の左側を通行させた。

たいていの男の人もそうするのもかもしれないが、右側は、車や自転車がすぐ隣を走っているからだ。

左近はずっと女の人に興味がなかったくせに、そんなところは徹底していた。

さて、今日の帰り道も、いつものように、凜花が左近に質問を投げかけ、左近がそれに答える、という、もうすでに二人の間で大体決まってきたパターンの会話を二人は楽しんでいった。

ただ、いつもと違っていたのは、雨の音も激しいので、二人が話すときには、いつもより大きな声を出さなければならなかったことだ。「でさ、オレが予告した時間に帰れなくて、ちよつとでも遅れて家に帰ると、父さんは泣きそうな顔でオレを抱きしめてくるんだよ。よくぞ無事で帰ってきた、とか言ってさ。まるで、長い間戦争にでも行っていて、ようやく無事に帰ってきた息子を迎えるみたいに。

それも、毎回、毎回」

凜花は、そんな様子を思い浮かべて、くすくす笑った。

本人は大まじめにやっているのである。左近の父の振舞いと、それに毎度毎度付き合わされてげんなりしている、左近の呆れかえった表情を対比させると、それは本当におかしかった。

凜花がいつまでも笑っているので、

「まだまだあるんだぜ、それから……」

と、左近はさらにおもしろい話を続けた。

笑いが止まらなかった凜花だったが、その時、ふとあることに気がついた。

激しい雨に隠れて、いつもより視界の悪い道路。車の通る音も、大雨の音と混ざり合って、いつもより聞こえない。

左近は、凜花が楽しそうに笑い続けているので、もっと楽しませようと、雨に負けない大きな声で、話に夢中になっている。

そんな周囲がざわついている状況の中、凜花は、対向車線を走る一台のトラックに目を止めた。

まだ、トラックは凜花からは随分遠い距離にあったが、こんな視界の悪い夜でも、それは、危険だ、と咄嗟に、凜花の視線の中にはつきりとえられた。

そのトラックは、やたらと速度が出ている上に、右に左にと、ふらふら蛇行運転をしていたのだ。

時には、センターラインを少しはみ出して、対向車線にまたがって、猛スピードで道路を走行していた。

（危険：危険：危険：危険：危険）

凜花の頭の中に、そんな警鐘が鳴り響いた。

まだ、トラックは随分こちらまで距離があるし、もしこのまま蛇行運転を続けたとしても、今のままの蛇行状態の程度だったら、センターラインを少しはみ出す程度ですむだろう。

まさか、センターラインどころか、さらに対向車線を飛び越えて、

凜花たちの歩いているところまで突っ込んできたりはしないだろう。普通の人なら、そう思っただろう。

しかし、凜花の心のなにかが、ものすごく危険が今迫りつつある、と必死に凜花に訴えてくるのだ。

それが、本能からくるのか、危機察知能力からくるのかは分からなかった。

しかしその警鐘は、杞憂に終わるなどということとは決してなく、数刻の後には、必ず最悪の事態を招くことを、必死に知らせようとしてくれているのだと、根拠など何もなかったが、凜花は確信していた。

（危ない。どうすれば…）

左近の方は、話に夢中だったし、そもそもこんな暗い夜、さらには土砂降りの雨で視界も悪く、音も遮られているので、当然、そのトラックには気づいていなかった。

（先輩に知らせる？ いや説明している時間が惜しい。先輩を引っ張って逃げる？）

ほんの数秒間の間、凜花の頭はフル回転した。

しかし、凜花が考えていた数秒の間に、スピードをどんどん増していたトラックは、すでに、対向車線をこちらに向かって爆走していた。

やはり、凜花の予想は的中したのだ。

（もう間に合わない！）

凜花が、そう思った瞬間、左近もようやく目の前に突然迫りくるトラックの存在に気付いた。

しかし左近が何かをする前に、凜花は、持っていた桜色の傘を捨て、思いっきり左近を後方に突き飛ばしたのだった。

第十九章

左近を後方に突き飛ばした直後、ものすごいスピードで二人の歩いていた場所へ突っ込んできたトラックに凜花ははねられた。

凜花をはねたトラックは、そのまま少し前進して、道路わきの電柱にぶつかってようやく止まった。

それは、突き飛ばされて転んだ左近のすぐ目の前だった。

咄嗟に凜花が突き飛ばしたおかげで、左近ははねられずにすんだのだった。

ほんの目と鼻の先で停車したトラックを前にして、左近はがくがく震えていた。

一方、凜花は、朦朧とした意識の中で、必死に左近を探していた。

（左近…大丈夫…だった…？）

> i 2 6 7 7 9 — 3 4 3 9 <

左近を思ったその時、凜花の脳裏に、雷が落ちたような衝撃が走り、その瞬間、凜花は全てを思い出していた。

ああ、そうか。

左近は自分が13年前、命を懸けて守った、大切な私のことだったのだ…。

あの時は、あれから左近がどうなったのか、知る由もなかった。

だが、今は知っている。

左近は、立派に成長していた…。

凜花の両目から、涙があふれだしていた。

『えいちゃん。ごめんね。私、これからはもう左近のこと、守ってあげられないよ。』

だから…えいちゃんが、守ってあげてね』

（あの時の約束、守ってくれたんだね…。ありがとう、えいちゃん）

ああ、でも自分はせつかく再び愛する人たちの元へ帰ってこれたのに、また死にゆくのか……。
今度は、もう離れ離れになりたくない。
もう、二人を見失いたくない。
ずっとそばに、いたい。

私は、生きたい！

凜花は、そう強く思って、意識を失った。

自分の目と鼻の先で停止したトラックを見て、左近は震えていた。
凜花が突き飛ばしてくれていなかったら、間違いなく自分も一緒に
はねられていた。

（そうだった。凜花！）

急いで起き上がり、自分よりずっと後方へ跳ね飛ばされた凜花を追
って、左近は走りだした。

3メートル。5メートル。10メートル。

まだ、凜花はいない。

左近は焦り始めていた。

やっと50メートルほど走ったところで、道路に倒れている凜花を
見つけた。

凜花は、激しい雨に打たれてずぶぬれになり、薄暗い電灯から照ら
されて見える彼女の肉体からは、おびただしい血が流れていた。

その血は、周りの道路にも飛び散っていた。

（ちくしょー！）

左近は、その場につくりと膝をついた。

おんなじ、じゃねーか。

あの日と。

まだ1歳であつた左近が、母親が左近をかばつてトラックにはねられた当時の情景など、覚えてはいるはずがなかつたが、その様子は、大きくなつたあと、何度も想像したし、夢にもでてきた。

道路に倒れ伏した母親からは、大量の鮮血がほとばしつていて、灰色の道路にもそれは飛び散り、道路を赤く染めているのだ。

茫然と彼女を見つめる左近の前で、母親はこと切れる。

何度も、何度も、想像したくなくても、何かの折にふと、頭の中に浮かんでくる光景だ。

（もう、二度と、誰にもそんなことはさせないと誓つたのに…）
なんで、よりもよつて、最愛の凜花がそれをするんだよ！

自分なんか、かばつて死ぬんじゃないよ。
バカ母にバカ凜花。

いや、母親に関して言えば、自分はまだ1歳の幼児だつた。

どうすることもできなかったのは、仕方がないのかもしれない。

だが、凜花はどうだ？

凜花は、左近より早く危険を察知して、自分を突き飛ばして犠牲になつた。

自分さえ、凜花より早く、危険を察知していれば…。

暗い夜道だつたからとか、その上どしゃぶりの雨で視界が悪かつたとか、雨の音がうるさくて周囲の音がかき消えていたとか、そんなもの全然言い訳にならない。

なぜなら、そんな中でも、凜花は、自分の身を呈して、危機から左近を守つたからだ。

（なんて、不甲斐ねーんだ…オレは）

左近の両目から、とどまることなく涙が流れ落ちた。

それは、凜花の頬に落ちて、雨と一緒に凜花の顔から流れ落ちていった。

愛する人を守れなかつたどころか、逆に守られて、愛する人は命を失っていく。

（こんな情けない自分の命なんていらねー。代わりに凜花を助けて

やってくれよ…)

神様なんて信じたこともなかった左近だったが、今はただひたすら祈っていた。

凜花を助けてくれ！

第十九章（後書き）

もおね、「桜の咲く頃に」書いている途中で、（ああ、コレ書きちやったら、絶対バレちゃうなー）って思いながら書いてたので、今さら何を（・・・ノ）ノって思われる方も多いと思いますが、それでも、「そうだったんだ！ 分からなかったよー」って方に、言いたいですっ！！

凜花は桜の転生した女の子です。

桜は凜花になって、転生したんですけど……また死にそうですね（汗）

この先、どうなるかは、実はしばらく分からないですよー。

なんでかと言いますと、この後、凜花の（桜の）「前世邂逅編」に突入しちゃうからなんです。

しかも、それ、はんぱなく長いですw

なので、凜花が、この後どうなったか分かるのは、このままアップしていけば……は、8月頃にはっ（汗）

いや、そこまで待たすんかいっ！！ まだ、7月なっただばっかやん

（#。。。#）
すみません…><

見捨てないで、読み続けてくださると嬉しいです（；；；）

あんまり、読んでくださっている方もいらっしやらないだろうなー、とは思いますが、一人の方でも、これからも楽しんでいただけたら、嬉しく思います。

感想とか、全然こんな読んでもでてこないとは思いますが、一応いただけたら喜びます、とお伝えしておきます…。

拙い作品ではありますが、これからよろしくお願いいたします。

あ、そうそう、今回も前と同じように今重朱里さんのイラストを挿絵として、挿入してみました。

なんか、絵だけみると、超ホラーって感じでも、恋愛小説に見えないですね^^;

この挿絵では消してありますが、ブログには、今重朱里さんが書いたそのままをアップしてあります。(コメントつきです)

第二十章

水野桜は、高校入学して、初めて授業があつた日の放課後、担任の先生に、職員室に呼び出された。

確か、あれは、入学式が終わつた二日後くらいのことではなかつただろうか。

クラスメートに、同じ中学出身の友達も数名いることはいたが、それ以外は全てが真新しく、来ている制服だつてまだ全然なじみがなく、高校生になつたのだ、という実感もそんなにわからない頃だつた。実際、校舎の構造が分からず迷つてしまつたこともあるし、始まつたばかりの新しい生活に、桜は、緊張と不安の毎日だつた。

そんな、張りつめた新生活に、早く慣れよう、と頑張つていたある日の、担任の先生からの突然の呼び出し。

(うわー、私、何やつちやつたんだろ…)

顔が真っ青になつていくのを感じながら、思い当たることを精一杯想像してみるのだが、特に思い当たることはないのだつた。

入学式も、問題なくちゃんと出席したし、そのあとの学校説明もしつかり聞いていたし、今日の初めての授業だつて、当てられた時はちゃんと答えることができたし…、私、怒られるようなこと、したかなあ……。

職員室に向かう途中も、何度も何度もこの三日間のことを振り返つて、呼び出された理由を考えてみるのだが、全く見当もつかない。

仕方なく、職員室のドアをノックして、ごくり、とつばを飲み込み決心を固めると、桜はおそろおそろ、中に入つて行つた。

「失礼します」

小さな声でそう言つて、桜は周りをきよきよ見渡した。

職員室には、たくさんの先生たちの机が並んでいて、その他にコピー機やらロッカーやら、色々なものが所狭しと置いてあり、そこは、雑多な空間だつた。

先生たちの話声もいたるところから、ざわざわと聞こえてきて、どの先生も忙しそうに見えた。

その中を見渡して、担任の岡田先生の姿を見つけると、桜は、他の先生たちの邪魔にならないように気をつけながら、そーっと先生の元へ歩いていった。

「あ、あの……」

机に向かって、何か作業をしている岡田先生におそろおそろ桜が声をかけると、彼は、振り返って、にっこり笑った。

「ああ、水野さん。急に呼び出してすまなかったね。実は、ちょっと君に頼みたいことがあってね……」

先生の笑顔と、そこまで話を聞いた時、桜は、ほっとしていた。てっきり、自分は何か不始末をしまって、それを注意されるのだ、と思い込んで萎縮していた心は、一気にどこかへ飛んでいってしまった。

（よかった。怒られるんじゃないよかったんだ）
ほっと安心した桜に、先生は言葉を続けた。

「知っているかもしれないけれど、現在同じ1年3組で、君の中学の同級生でもある篠原英治君のことなんだけどね。彼は、サッカーのユースに所属していて、ちょうど入学式から一週間、どうしてもユースのチームで外せない行事があるらしくて、まだ、一度も学校に来ていないんだよ。」

それで、学校説明会の際のパンフレットとか、今日の授業で配ったプリントを、彼の家に届けてほしいんだ。水野さんは、同じ中学出身だから、家もそんなに遠くないんじゃないかと思ってね。お願いしてもいいかな？」

（サッカーのユース？）

桜はまず耳慣れない言葉に、疑問を浮かべたが、それよりもあることに気がついて、焦って中学時代のことを、必死に思いだしはじめた。

（篠原英治、篠原英治……うーん、だめだ。全然記憶にないよ……）

担任の岡田先生に、同じ中学だった、と言われたのに、桜は、その人の名前も顔も、何一つ知らなかったのだ。

どんなに、中学時代の記憶を思い出そうとしてみても、その中に、篠原英治、という存在は、全く入っていなかった。

現在も同じクラスメートであるらしいのだが（岡田先生の説明で初めて知った）、まだ一度も学校にきていないのだから、そのことは知らなかったとしても、問題ないのだろうが、問題は、同じ中学の同級生だったらしいのに、さらには同じ高校へ進学したというのに、彼の名前すら今日初めて知った、ということだ。

これは、さすがに…かなり失礼にあたるのではないか。

「あ、あの、はい。分かりました」

「ありがとう。それじゃあ悪いけど、よろしく頼むよ。ええと、これがパンフレットと、今日の授業のプリントね。ああ、それから、これが彼の家の住所だ、めもしておいたから」

岡田先生から、パンフレット等を受け取りつつ、桜は罪悪感でいっぱいだった。

渡された何種類かの紙を、両手に抱えながら、桜はしばらくその場にぼーっと立ち尽くしていた。

「…水野さん？ もう行っていいんだよ？」

「あつ、は、はい。失礼しました」

岡田先生に心配そうに、顔を覗きこまれて、桜は我に返った。

そして、びよこんと一礼して、先生の前を去った。

それから、足早に職員室を駆け抜けて、出口のドアを閉めた。

ドアを完全に閉め切った後、桜はそこで立ち止まってしまった。

（ど、どうしよう…）

これから、全然知らない男の人に会って、先生に頼まれたパンフレット等を届けなければならぬ。

しかも、知らなくて当然であるような人なら、何も気に病む必要もないのだが、相手は同じ中学で3年間も一緒だった人なのだ。

しかも、その中で、同じ高校に進学する生徒は、限られた数名だけ

だったから、どこかで会っていたかもしれない。

それなのに、自分の方は、全く記憶がなくて……。

もしも、相手の方だけ自分のことを知っていたら、本当に申し訳なくて、失礼すぎて、何にも言い訳のしようもない。

そもそも、会いに行ったら、まずなんと言えばいいのだ？

こちらとしては、初対面に等しい相手なのだから、普通なら、

「初めまして」

となるのだろうけど、中学生の同級生だった相手に向かって、それはあまりにも失礼すぎて、何か悪意でもあるのかと勘違いされそう
だ。

しかし……だからといって、実際のところ、桜は、篠原英治、という人物に対して何も知らないのだから、

「同じ中学からきて、同じ高校で、さらにクラスも一緒だったんですね。これからもよろしくお願いします」

などと、全て今日初めて知った情報を、さも、ずっと前から知っていました、風を装って、臆面もなく言いきるのは……どうなんだろう……。

はつきりいって、それでは、ただの嘘つきではないか。

桜は、思いつきりため息をついた。

（あー、困ったなあ）

これから、彼に会いに行かなければならないことを考えると、桜の心はとても憂鬱なだった。

第二十章（後書き）

この章から、桜の前世邂逅編にはいつていきます。

新章突入っていつちやっていくらい、これまでとお話、がらりと変わります。

それで、この間も書きましたが、この前世邂逅編、はんぱなく長いです（汗）

これまでの分の、1.5倍はあるんじゃないかと思われます（。

！。；）

しかも、それだけならまだしも、内容が……90%くらいスポ根モノになっていて、残りの10%が恋愛……？ってカンジになっちゃってます><

あのバファリンでさえ、優しさは半分だったというのに、それをはるかに凌駕する荒業です！

そんなんでもよかったら、見捨てず読んでくださるとうれしいです

（””）

必ず最後の方は恋愛100%に戻る…ハズなんでっ！！

あ、この前世邂逅編ですが、最初ラストまで完成したときは、全くなかった部分でした。

とある理由により後から付け加えたのです……。

その、とある理由、っていうのは、明日と明後日のブログで説明できると思います。とある、にひっかけて（便乗して）、「とある企画」というくだらない企画も、もれなく付いてきます。（企画の内容は秘密です）

なので、とあるファンの皆さま、くだらない企画すぎるんで、おそらく間違っって見てしまうと、がっかりすること請け合いなので、どうか見ないようお気をつけくださいませ><

（まあもともとほとんど誰も見ていないようなブログなんで、そん

な心配いらないとは思ってますけど、一応念のため^^;)
くだらなさに笑いたいとか、暇だったから、とか、普通に「何で前世邂逅編がつけ加わったか理由が知りたい」とか、そんな方いらっ
しゃいましたら、遊びに来てください。

前世邂逅編がつけ加わった理由の説明はともかく、とある企画のく
だらなさ、内容のつまらなさはほんとにはんぱないですがw

第二十一章

岡田先生に渡された住所を見てみると、篠原英治の住む家は、桜の住んでいる町の隣の隣の町だった。

しかも、それは、ちょうど、桜の学校からの帰り道にあった。

たどり着いて、篠原、と書かれた表札を見ながら、桜は、まだ思い悩んでいて、チャイムを押すのにかなり時間がかかった。

しばらく周囲をうろろした後、勇気を出して、チャイムを押すと、すぐに、桜と同じ年であろう、背の高い男の子がでてきた。

年齢から考えて、彼が篠原英治本人なのだろう。

やはり、桜が初めて見る顔だった。

しかし、背はすらりと高く（180センチ以上はあるだろう）、細身の体に、少し日焼けした肌、目鼻立ちがとても整っていて、篠原英治は、思わずはっと見入ってしまうような美少年だった。

（こんなにかっこいい人なら、学校で噂になっていただろうに、ほんと、何で全然知らないだろ…）

しばらくの間、ぼーっと、彼の美しさにみとれていた桜だったが、ここへは用事があったのだと思いだし、慌てて、担任の先生から預かっていたパンフレット等を、彼に差し出した。

「あ、あの…担任の岡田先生に頼まれて、学校説明のパンフレットと、今日の授業のプリントをお渡ししにきました」

慌てていたので、散々悩みに悩んだ挨拶をするのも忘れてしまった桜だった。

すると、彼は、嬉しそうに笑った。

その笑顔が、あまりに素敵で、桜の心臓はドキドキした。

「わざわざありがとう。水野さん」

（……え？ 私の名前、知ってる…）

笑顔で見つめられて、さらに、まだこちらから名乗っていないはずなのに、名前まで呼んでもらえたことに、桜はびっくりした。

(やっぱり…、向こうは私のこと知ってるんだ！)
最悪だあ…と桜は泣きそうだった。

もう一刻も早くこの場から立ち去りたい、と桜は思ったが、
「せつかくだから、あがって行ってよ。お茶くらいだすから」
篠原英治が、にこにこ言うので、断る理由も思いつかなかつた桜
は、彼の言葉に甘えて、家にながらせてもらうことになったのだっ
た。

篠原英治の家は、ごくごく普通の家で、桜の家と似たような感じの
家だった。

(うう…帰りたいたいよー)

そんな彼の家の中を、桜はとぼとぼと歩きながら、これから一体何
を話せばいいのか、と悩みに悩んでいた。

現在までの会話の内容では、桜が篠原英治のことを、全く知らなか
った、という事実は、おそらく相手には伝わっていないはずだ。

しかも、予想していた中で一番最悪のパターンで、彼の方は、桜
のことを知っているらしい。

これ以上、ぼろがでないうちに、失礼なことを言ってしまうという
ちに、すぐにも逃げ帰りたい桜だった。

廊下を歩いていた篠原英治が、あるドアの前で立ち止まった。

おそらく、このドアの先がリビングになっているのだろう。

きつと中には、彼のお母さんとかいるんだろうから、きちんと挨拶
しなきゃ…と、桜は腹をくくった。

「どつぞ…」

ドアを開けて、中に入るよう篠原英治が促したので、桜は、そーっ
と中を窺いながら、足を踏み入れた。

入ってみると、その部屋は1.5畳ほどの、やはりリビングだった。
柔らかそうなソファがあり、その前に茶色のテーブルがあつて、さ

らにその前にはテレビがある。

部屋を見渡すと、壁や棚に、花や小物、絵画などが飾られていたりする、どこにでもありそうなリビングだ。

(あれ…?)

しかし、桜は不思議に思った。

部屋に誰もいないのだ。

隣はダイニングとキッチンになっているようだったが、そちらにも人がいそうな気配もない。

「そのソファに座って待っていてくれる？　すぐお茶を持ってくるから」

そう言つて、篠原英治は、キッチンの方に消えていった。

(彼自身がお茶を淹れてくれる…?　ということ、この家に両親は今、いないってことなんだろうか…?)

疑問を抱きつつ、桜は指定されたソファに腰かけた。

見た目通り、とても座り心地の良いソファだった。

第二十二章

しばらく、一人でソファに座って周りを眺めていると、篠原英治が二人分のお茶を運んできた。

「お待たせ。水野さんは、コーヒーとか、紅茶とかのがよかったかな？ ごめんね、僕お茶しか淹れたことなくって……」

すまなそうに、お茶を、桜の前のテーブルに、彼はおいた。

「いえっ、あの、そんなに気を使わないでください。先生に頼まれて、プリントを届けにきただけなんですから……」

「……それでも、嬉しかったから……」

篠原英治は、どこまでもやわらかな眼差しで桜を見つめながら、嬉しそうにほほ笑んでいる。

（なんて、温かなほほ笑み方をする人なんだろう……）

さきほどから、篠原英治は、ずっと笑っていたが、普通の人の笑顔と違って、ものすごく優しく、温かいのだ。

その笑顔で見つめられると、まるで、とてもやわらかな何かに、全身を包みこまれているような気分になってくる。

桜は、不思議な感覚に、でもそれでいて、とても心が安らぐ気持ちをおぼえていた。

（って、くつろいでる場合じゃない！ だって……この家に他に誰もいないってことは……男の人と二人きり？）

それはさすがに、15歳の桜にとって、よいことではない。

「あ、あの……ご両親は？」

けれど、まだ二人きりだと決めつけるのは早いかもしれない。

ここは、ちゃんと聞いてみなければ。

勇気をだして、桜は質問してみた。

「ああ、うちは、共働きだから。しかも二人とも正社員で働いているからね。帰ってくるのは、いつも二人とも残業してくるし……夜の11時くらいかなあ……」

(二人きり、確定！)

桜は、何とか理由をつけて、ここはすぐに帰った方がよさそうだ、と思った。

別に、篠原英治が、桜に何かしようとして、誰もいない家に呼んだのだと疑っていたわけではない。

しかし、どう考えても、まだ15歳の男女が、二人きりで部屋にいるなんて、よくないことに決まっている。

それに、これ以上何か会話を続けていたら、桜が篠原英治について、今日まで全く知らなかった、ということもばれてしまうかもしれないという、当初から抱いていた不安もあった。

「ええと……」

桜が、何とか帰る理由を探していると、篠原英治が突然話し始めた。「父さんも母さんも、僕がユースにいるから、無理してたくさん働かないといけないんだ……。ユースに居続けるには、かなりのお金がかかるから……」

ふと、隣に座っている篠原英治を見ると、彼の顔からは、笑顔が消えていた。

代わりに、ものすごく寂しげで、辛そうな表情を、今の彼はしていた。

それは、見ているこちらも、思わず苦しくなってしまうような、色々な苦悩を抱えているだろうと思われる表情だった。

確かに、共働きの両親ならいくらでもいるだろうが、二人の帰りが、夜の11時だというのは、少し遅すぎる。

ユース、というものには、そんなにもお金がかかるものなのだろうか？

「あの……ユースってなんですか？」

だから桜は、少し彼の話を聞いてみようか、という気持ちになっていた。

「ああ、ごめん。ユースっていうのは、高校生が所属する、サッカーのJリーグの下の組織のチームのことなんだけど……」

元々僕は小学生の頃、ジュニアっていう、やっぱりJリーグの下部組織である小学生のチームに所属していたね。そこでフォワードをやっていたんだけど、周りから、得点王だとか、まさに我がチームのエースストライカーだとか、天才サッカー少年だとか、おだてられて、6年生のときに、ジュニアユースのセレクションを受けたんだ。かなりの競争人数だったから、受かるなんて思わなかったけど、受かってしまった…。そこでも、ずっとフォワードのレギュラーとして、やらせてもらっていた。

さらに中学3年のときに、今度は、ユースのセレクションを受けた。ずっと一緒にやっていた仲間が、たくさんそのセレクションで落とされていったよ…。僕も、今度は受からないだろうって思っていたし、受からなければ、どこか、サッカーの名門の高校でも行って、国立を目指そうと思ってたんだ。…やっぱり、サッカーやっている人間にとつたら、国立は憧れだからね。

でも、僕の予想に反して、僕はユースのセレクションにも、合格してしまった。名門サッカー高校に通って国立を目指すか、ユースに行くか…ものすごい悩んだけど、結局僕はユースに入ることにしたんだ。

でも、今でも僕の選んだ道は正しかったのか、って時々分からなくなる…。

僕の夢はプロのサッカー選手になることなんだけど、別にユースに入らなくても、なっている人はたくさんいるしね。

それなのに、ユースはお金がかかるし、通っている高校の部活でサッカーをやるなら、通学時間だけですむけど、ユースの練習場は、ここからけっこう遠いから、通うだけでも時間がかかるし、その上、遠征試合やら、長期合宿やらで、学校にもあまりいけない。

中学のときも、ジュニアユースに所属していたから、学校も、休まなければならぬときもたくさんあったよ…。

お金だつてすごくかかるから、両親には申し訳ないし…」
フォワード、ストライカー、セレクション、国立、桜の全く知らない

い言葉がたくさんでてきたので、篠原英治の言ったことの全てが理解できたわけではなかった。
ただ、彼が今とても悩んでいることは、十分すぎるほど、伝わってきた。

第二十二章（後書き）

「桜の咲く頃に」の、前世邂逅編、思った通り超人気ないです（ノ
ー。。。）

まあ、だいたい前世邂逅編の前は30人ほど読んでくださっていた
と思われるのですが、前世邂逅編に突入してからは、20人くらい
かな？^^;と思います。

10人も…約3分の1の方が読まれなくなってしまったようです…

…。

まあね、そこは、自分でも、覚悟してましたから、大丈夫っす（、
。。。）

なにせ、あのバファリンをはるかに上回る荒業ですし（あーでも今
のところはまだスポ根モノにはなっていないですね）、大体、こ
れまで読んできてくださった皆さまは、主人公左近、ヒロイン凛花
の恋愛が読みたかったと思うんですよ。

それがいきなり、20話くらいにして、いきなり主役顔で、主人公
英治パパ、ヒロイン桜ちゃんがでてきたんですから、そりゃあ
仕方ないです。

今までの19話分を返せ、ってカンジですよ。はい、分かります。

おまけに、前世邂逅編から、現代に戻るまで、8月くらいまでかか
ります、とか書いてしまったし……。

いや、本当のことなんですけども（><..）

でもまあ、そりゃあ、せつかく感情移入とかしてた、主人公クラス
のメンバーが入れ替わってっていうのは、楽しみに読んでくださって
いた方に見れば、がっかりですよ。

ただ、この前世邂逅編で、英治パパと桜ちゃんが出会っていなかったら、今の左近君もいなかったワケなので、どうか、まだ読んでいただく人には、温かい目で見守ってくださいたらなあと思います。

あとね、発想の逆転ですよ。

逆転の発想？（ー）

…んまあ、どっちでもいいですねw

個人ブログの方でも、2、3人は、読んでくださっていると勝手に予想してるので…。

そうすると、「小説家になろう」様の20人と足して、たったの2人しか読んでくださっていない、ではなく、まだ22人も読んでくださっている、という考え方もできると思うんです。

そりゃあ、「桜の咲く頃に」は、ゼーんぶの話を足して、合計で、1000名の方に読んでいただけていますが（重複含みます）、「小説家になろう」様サイトでは、たったの一日で、800人〜1000人読んでくださっている小説も、ふつーにありますからね。

そんなたくさん小説がある中で、22人というのは、断然少ない方だと思えます。それでもね、22人といったら、学校の教室に少し人数が足りないくらいだし、バスだったらほぼ満車ですよ。サッカーだったら、2チームに分けて、対戦できちゃいます。

私なんかの小説に、そんなに……って、本当にありがたいです（ー。ー）

しかも、あきらかに、読者様に見捨てられるの覚悟で、前世邂逅編

やっちゃってますからね、それでも22人も、読んでくださる方がいるんですから。

これは、読んでくださる方が減ってしまった、と嘆くよりも、喜ぶべきことなんじゃないかと思うワケです。

まあ、前世邂逅編、につきまして、私が考えておりますことは、そんなカンジです。

見捨てないで読んでくださっている方、この場をお借りいたしました、て、お礼申し上げます。

「桜の咲く頃に」は、すでに出来上がった作品だ、と以前書きましたが、最近新しいアイデアが浮かびまして、ラストの方が変わる予定です。

そのうち、手が空いたときにでも、推敲しようと思っています。

（あ、あのっ……下方修正じゃないですからっ！！ 良くなる方の修正だと思っんで、そこは大丈夫だと思います、（；´・｀）（ノ）

なにはともあれ、ありがとうございます&これからもよろしくお願
いいたします。

ずっと読んでくださっている方には、この言葉しかありません。〇）

—*）〇

第二十三章

「何故、そんな話を、今日まであなたの存在すら知らなかった私に？」

言ってしまったから、桜は、あつ、と口を押さえた。

しかし、もう遅い。

(やっちゃった…)

桜は、ここに来るまでの間、一番、自分が心配して、悩んでいたことを、あっさり自分から告白してしまったのだ。

「ご、ごめんなさい…。同級生だったのに…。同じ高校にも入学していたっていうのに、私、全然篠原君のこと、知らなくて…」

桜は、申し訳ない気持ちでいっぱいになり、うつむいた。

それをなんでもないことのように、篠原英治は、桜を元気づけるためなのか、また明るく笑って見せた。

「やっぱり、水野さんは僕のこと知らなかったんだね。でも、そんなの全然気にしないでよ。僕はジュニアユースに入っていたから、学校も休みがちだったし、何より、水野さんとは、一回も同じクラスになつたことがないから」

それでも……。

それでも、篠原英治は、自分のことを知っていてくれたではないか。せつかく気を使ってもらっているのに、桜は落ち込んだままだった。そんな気持ちを察したかのように、篠原英治はぼつりと言った。

「水野さんは、一目見たら忘れられないような、存在感があつたよ」その言葉に、はじかれたように顔を上げた桜は、優しく穏やかに自分を見つめる篠原英治と目が合つて、またうつむいた。

「はは…僕は、存在感とかないから…」

「あのっ、国立ってなんですか！」

突然ソファに身を乗り出すようにして、勢いよく質問した桜に、篠原英治は、驚いて圧倒されたようだった。

「あ…国立？ えーと、国立競技場のことかな。そこで、年に一回大きな大会があるんだよ。ものすごく大きなね。全国のサッカーをやっている高校生にとって、国立は、憧れの場所と言うか、大会というか」

「それは、野球でいったら、甲子園、みたいなものですか？」

「うん、そうだね」

「じゃあ、そこ、行きましようよ！ いえ、行ってくつて、もちろん遊びに行くんじゃないですよ？ 大会に出るんです！」

「うん。残念だけど、それは無理かな。ユースに所属している人間は、たとえ高校生でも、国立はいけないんだよ」

桜は、しばらくの間、考え込んだ。

そして、これしかない！と思いついたことを提案した。

「じゃあ、ユースやめちゃえばいいんですよ！ そしたら、国立にもいけるじゃないですか！」

> i 2 7 3 2 5 — 3 4 3 9 <

しかし言ってしまったあと、桜はそんな簡単な問題じゃなかったかもしれない、と思いついた。

さつき、篠原英治は、たくさんの友達がユースのセレクションに合格できなかった、と言っていたのか？

セレクションの意味は分からなかったが、前後の言葉から想像するに、試験のようなものだろう。

きつと、おそらく、それはものすごい競争率だったはずで…。

ユースに所属していなくても、プロサッカー選手にはなれる、とも彼は言っていたが、そのためには、例えば国立のような大きな大会で、実績を残さなければならぬのではないか？

サッカーの名門校だったなら、国立へ行くのも夢ではなかったかもしれない。

しかし、今桜の通う高校は、サッカーが強いとか、そんな話、一

度だつて聞いたことがない。

そんな高校のサッカー部が、果たして、そんな大きな大会まで勝ち残れるのか？

篠原英治がどんなに、プレイがうまかろうと、サッカーはチームでやるものなのだから、他のチームメイトも、そこそこプレイがうまくなければ、大会の上の方まで勝ち進むことは難しいだろう。

だとすれば、途中の小さな大会で、どんなに彼が好プレーをしたとしても、それがプロのサッカー選手につながるには、確かに思えない。

どう考えたって、きっと今のままユースに居続ける方が、プロのサッカー選手への近道なのだ。

第二十三章（後書き）

今回も、イラスト挿入してみました。

いつも通り、知り合いの今重朱里さんに描いてもらいました。

イラストといえば、昨日第15章の左近君のイラストを差し替えました。といっても、修正しただけのイラストですが……。

なんか、その知人が、PCでイラストを修正したらしいのですが、PCで修正するためのツール等、何も持っていなかったらしく、髪の毛一本一本まで全部マウスのみで修正したそうです^^; でしたら、「60時間くらいかった」と言っていました(。・11) 私は思いました。

（最初から描き直した方が、早かったんじゃないかね……？（——））

しかも、マウスのみで……。あーちなみに、なんで手書きで修正しなかったかというと、「ホワイトで修正すると、その上にカラー塗ると、はじいてしまっただけ塗れない安いカラー用具しかもってないから、PCで修正するしかなかった」そうです^^;

あと、昨日のブログに「桜の咲く頃に」の番外編書いてます！ シリアスな話じゃないんで、わざわざ読みに来ていただくほどのものではないと思うのですが、一応ご報告を……。

第二十四章

「すみません。考えなしに適当なこと言ってしまった……」
桜はしゅーんとしおれた。

篠原英治を元気づけようと考えたことだったのに、あまりの発想の貧弱さに、逆に桜が落ち込んでしまった。

しかし、そんな桜に、篠原英治は意外な言葉をかけた。

「そうだね。ユースをやめよう。それで国立を目指してみよう」

「そうです。その方がいい……ってえ　　！　　ちよ、ちよっ

と待ってくださいよ。どうしてそうなるんですかっ」

「どうしてって…水野さんがそう言ったんじゃない」

あっけらかんという篠原英治に、桜は彼の心が全然つかめなかった。

「いや、言いましたよ。確かにそう言いましたけど。でもそれじゃあ、プロのサッカー選手になるっていう夢が遠のいちゃうじゃないですか」

「そんなの。国立行って、いいプレイをすれば、絶対にプロのスカウトは見に来ているはずだから、大丈夫」

あくまでにこにこと楽天的に言う彼に、桜は、もしかしてこの人、サッカーはうまいのかもしれないけど、頭は残念なの…？と、失礼な疑問まで抱きだした。

「…だからですね、その、今の高校じゃあ、サッカーの名門高でもなんでもないんだし、国立へいけるかどうかっていうそもその問題が…」

「まあね。一人じゃ無理だろうね」

「そうですよ。どうするんですか？」

「君と一緒に行く。君がユースをやめて、国立へいけばいいって言ったんだから、君に責任取ってもらおうよ」

(……………?)

桜の頭の中に、？マークがたくさん飛び交った。

この人は、何を言っているの？

女子がサッカー部に入れる訳がない。

なのに、一緒に行くって？

「言ってる意味が全然分らないんですけど……」

「サッカーは、確かにプレイする11人それぞれの身体能力、技術、判断力等が重要だと思う。」

「ただ、それ以上に重要なのは、それら全ての能力を知り尽くして、そのチームに合った戦術をたてること、だと思うんだ。」

「具体的に言えば、ひとりひとりの個性を知り尽くしていれば、適材適所で、どこに配置すれば、一番その人が活躍できるかも分かるし、もっと言えば、その人のまだ眠っている才能を引き出すことだってできるかもしれない。」

「そうやって、ひとりひとりの能力を向上させて、一番いいポジションにつかせることができれば、その11人分だからね。チーム全体の戦力も大幅に上がるはずだよ。」

「そして最後に、そのチームを客観的に見て、的確な判断を常にして、基本はチームの得意なパターンで試合に臨んで、試合の流れが変わった時には、瞬時にそのとき一番有効な戦術に変更する。」

「まあ、優秀な監督みたいなものを、水野さんがやれば、今の高校でも、国立、行けるんじゃない？」

「か、かんとくう？」

「何を言い出すんだ、この人は。」

「桜は呆れてものも言えなかった。」

「それでも、頭痛のしてきたこめかみを押さえながら、桜は思った。」

「(はつきり言わなければ、この楽天的な人には分からない!)」

「桜は、サッカーに関してど素人なのであって、そんなど素人がよりもよって、チームを導く監督になどなれるわけもない。」

「それは、どう考えても当たり前のことだと思っただったが、あえて、当たり前前のことを再確認させて、現実を突き付けることに、桜はした。」

「サッカーのことなんて、基本的なことですら何にも知らないし、篠原君がさつき言ってたポジションだって、戦術だって、私には何にも分かりません。はっきり言って監督とか、そんなの無理です」「じゃあ、今から知ればいいと思うよ。僕の分かる範囲内なら答えるし」

「いや…そういう問題じゃなくて…。そもそも、何で私が監督なんですか？ 私が監督やったら、何で国立いけると思うんですか？」「水野さんだから、行けると思う。逆に他の誰かだったら行けない」

篠原英治の言った言葉は、あまりに確信に満ちていて、一体どこからそんな根拠のない確信が生まれてくるのか、桜は理解に苦しんだ。「僕を国立に連れてって」

そして、とどめに、篠原英治は、自分の整った美しい顔を最大限活かして、満面の笑みでほほ笑んで、そう桜に言った。

（なんかそのセリフ…どこかで聞いたことある…。でも、男女が逆じゃなかったっけ？）

そこで、はーっと、桜は大きなため息をついた。

そしてそのあと、真剣なまなざしで、篠原英治を見つめた。

「本当に、ユースをやめるんですか？」

「うん。そして、一緒に国立へ行く」

「…分かりました。そこまで言うのなら、私も腹をくくりますよ。」

…言いだしたのは、確かに私だし。そのかわり、絶対に国立、行きましょうね！」

「ありがとう」

篠原英治は、このままユースに所属し続ければ、高い確率で、プロのサッカー選手になれるのかもしれない。

それをあえて蹴って、そんな賭け（しかも大穴だろう）にでるのは、桜には、何故だか分からなかった。

しかし、元々彼は、ユースに所属し続けることについて悩んでいた様子だったから、そんなときにあっさりと、じゃあやめればいい、

などと言われて、決心がついたのかもしれない。

けれども、だからといって、それは、プロのサッカー選手になることをあきらめた、ということではないのだ。

彼は、絶対的に信じている。

桜とならば、国立に行くことができ、そこで最高のプレイをしてみせれば、スカウトの目にとまり、プロになれる、と。

だったら、桜だって、ひるんでいるわけにはいかない。

ひとひとりが、将来の大きな夢を実現できるかどうか、という、あまりに大きな賭けにのることを、引き受けてしまったのだから。

そして、そんな賭けをさせるきっかけを、深い考えもなしに提案してしまったのは、他の誰でもない、桜自身だった。

今の時点で、サッカーと素人の桜が、1からサッカーについて知識を得て、最終的には、ひとつのチームを導く、なんていうことは、並大抵のことではないだろう。

すぐれた監督だと言われるような人ですら、苦勞を重ねているに違いない。

(だけど…やるしかないよね)

篠原英治が、自分となら、国立へ一緒に行けると断言したうえ、自分もそれに乗ったのだから、もう引き返すことはできない。

篠原英治と水野桜は、そのとき、ひとつの夢を追うパートナーとなったのだった。

第二十四章（後書き）

この間、挿絵に使ったイラストで、悪ノリして、ドラゴンボールのパロディのイラストを作ってしまったっていう件なんですけど、わざわざ、ブログまで足を運んでくださる方もそうそういないと思い、あとがきにでも、載せておきます。

こんなんができました（、、；）

> i 2 7 4 2 8 | 3 4 3 9 <

前の章の、普通の挿絵と比べてみると、どこが違うか分かると思います。

いや、比べなくてもすぐ分かりますね、はい、すみません。

なんでこんなアホなことやってしまったかという経緯はブログに載ってます。

……誰も興味なんてないんでしょうけれども、一応……。 （P
、 q ）。

第二十五章

学校の廊下の曲がり角。

大量の本を積み重ねて抱えていた桜は、目の前が見えていなかった。なので、角を曲がってきた人物と、思いつきりぶつかって、二人は転び、桜の抱えていた膨大な数の本は、ばらばらと床に散らばった。「ごっ、ごめんなさいっ。大丈夫ですか？」

桜は急いで起き上がって、転んだ相手を助け起こそうとすると、相手は、桜のクラスメートの友人だった。

「大丈夫。ってか、桜、何やってんの？ 何、この大量の本は！」

友人は、転んだ自分に手を差し伸べる桜と、周りに散らばった大量の本を見比べながら、驚いて桜に尋ねた。

「んー、ちよつと図書館から借りてきたんだけど、大すぎちゃったかな」

友人がちらつと見た限りによると、多くの本に共通して、サッカーというタイトルがついている。

「サッカー？」

「あ、あはは。うん、ちよつと調べ物なの」

桜はそう言って、急いで廊下に散らばった本を一冊ずつ拾い集めた。ちよつと調べ物、という量じゃないだろう。

と、友人は突っ込みたかったが、あえて言わなかった。

「半分持っついていこうか？」

友人の親切を、桜は丁寧な、ありがとう、でも大丈夫だよ、と断って、また大量の本を抱えて歩きだした。

（ほんとに大丈夫かなあ）

友人は、両手いっぱい大量の本を抱えて、ふらふらと歩く桜の後ろ姿を、心配そうに見送った。

篠原英治の家を訪れた翌々日、桜は、朝登校してきた本人に、ユースをやめた、と聞かされた。

それは、近いうちにそうなるだろうと分かっていたことだったが、それでも桜の心に、重くのしかかっていた。

少し顔を曇らせた桜に、

「大丈夫だよ。今日から、うちの学校のサッカー部に所属できるように、顧問の先生にお願いしてきたから」と、明るく言って、彼は笑って見せた。

「うん……」

これで本当に、もう後戻りはできなくなった。

それならば、前に進むしかない。

「今日からが、スタートだね」

桜も、笑って見せた。

絶対、この先、篠原英治に後悔だけはさせまい、あの時、ユースをやめなければよかった、と。

もちろん、最終的に、ユースをやめる決意をしたのは、篠原英治本人だったし、仮に、それでプロのサッカー選手になれなかったとしても、彼は絶対に、桜を責めるような人柄ではない。

それは分かっていたが、もしも、なんて考えるのはやめた。

サッカーをやっている高校生全員の憧れである国立へ行つて、さらに、篠原英治はプロのサッカー選手になるのだ。

もうそれは、篠原英治だけの夢ではなくなっていた。

桜の夢でもあるのだ。

早速桜は、生徒指導室に、図書館から持ち出してきた大量の本を持ち込み、大量のほこりをかぶっていた椅子のほこりを大雑把に払いのけたあと、そこに座って、一冊目を読み始めた。

椅子も机もかなりほこりをかぶっているだけあって、この部屋は、随分前から使われていた痕跡がない。

図書館で、その場で読んでもよかったのだが、図書館には友人たちも来るし、見られて困るようなものを読んでいるわけではないのだが、理由などを聞かれると、とてもややこしい説明をしなければならぬ。

そこで、桜が目をつけたのか、学校の片隅に存在し、ほとんど誰にも使用されていない、生徒指導室、だった。

ここなら誰にも邪魔されることなく、集中して本が読める。

早速桜は、サッカー入門知識、と書かれた、おそらくサッカーの基本的なことについて書かれているであろう本から読み始めた。

読み始めて数分後、桜は頭を抱えた。

入門、などと書いてあるのに、いきなり専門用語がばしばしでくるのだ。

フォワード、ミッドフィールダー、ディフェンダー、ゴールキーパー。その中で、唯一桜が理解できたのは、ゴールキーパー、だけだった。あとは、英語の知識を活かせば、ディフェンス、とは守ることだから、ディフェンダーは、守備的な役割のことか、と想像できたくらいだ。

しかし、入門、と書いてあるからには、これらの専門用語は、サッカー界では、普通に使われているものなのかもしれない。

(なかなか手ごわいじゃないの)

しかし、こんな入門書で挫折している訳にはいかない。

桜は、次々ページをめくって、本に書いてある知識を覚えていった。

第二十五章（後書き）

この章あたりから、スポ根モノ路線に迷走していきます）。
ええと…その…、スポ根路線…、あと、5章くらい…続きます<><
つまらないかとは思いますが、見捨てないで読んでくださると、とても嬉しいです。
よろしくお願いいたします。

第二十六章

ひと月かけて、桜は、本、テレビ、雑誌等から、基本的なサッカーの知識をほぼ覚えていた。

まずは、一番基本である、サッカーのルール。

これを知らなければ、始まらないだろう。

どんな行為が反則で、その場合、どんなペナルティが科されるか。

ついでに、時と場合によっては、選手はその時の判断で、あえて反則覚悟で動くこともあることも覚えた。

オフサイドなどは、反則のひとつではあるが、有効な戦術ともなりえる、などなど、単にルールを暗記するのではなく、実際に試合で使われているような使われ方も、併せて理解していった。

基本的なプレイ時間は、前半45分。後半45分の計90分。ただ、高校生の試合では、60分になったりする場合もある。

途中選手の交代があった場合や、負傷者の救出などに充てられた時間は、ロスタイムとして、最後に追加される。

ロスタイムが何分かは、主審が決める。

それでも決着が着かない場合は、延長戦が行われ、さらにそれでも決着がつかないと、PK戦にもちこまれる。

それから、選手のポジション。

ゴールキーパーは一人で、ゴールを守る役。

ディフェンダーは、守備の要。

ミッドフィルダーには、攻撃タイプ、守備タイプなどがあるが、主な目的は、フォワードへボールをつなぐこと。

試合全体の流れを見通して、その場その場で臨機応変に動かなければならない。優秀なミッドフィルダーは、チームの司令塔、とも呼ばれる。

そして、篠原英治のポジションである、フォワード。

これは、果敢にゴールを奪う攻撃的ポジションだ。

しかし、これらの定義は、あくまで一般論にすぎない。

別に、前線にできて、ゴールを攻めるディフェンダーがいたとしても、それも戦術のひとつならば、別におかしくはない。

基本をしつかり踏襲しつつ、各個人にあったスタイルを身につけるのがいいだろう、と桜は思った。

もちろん、試合の流れや現在おかれている状況によって、ポジションを超えた動きも要求されるだろう。

仮に相手側にすでに2点取られているとして、それなのに、ディフェンダーが守備ばかりしては、意味がない。

そんな時は、チーム全体が、攻撃的なプレイをしなければならないだろう。

とにかく、基本のポジションはもちろん大事だが、個人のスタイルに合わせたり、その時の試合の流れに合わせてたりして、臨機応変なプレイが、どのポジションにも要求されるのだ。

それから、ボールを前線に運ぶ手段も覚えた。

ドリブル突破。

パス回し。

どちらにしても、左サイドからいくのか、右サイドからいくのか、中央突破なのか、咄嗟の判断が必要になってくる。

さらに、選手個人によっては、左が得意だったり、右が得意だったりするわけで、そもそもドリブルがうまいか下手かというドリブルの技術等も、考えなければならぬ。

ドリブルで運ぶか、パスで運ぶか。

それは単純に考えれば、ただの二者択一なのだけれども、パスをだすと見せかけて、ドリブルで突破するとか、そういう、相手をだます戦術もあると考えれば、いく通りのパターンも、作ることができる。

さらに、パスを出すタイミングや、パスに強弱をつけることなどによって、もっとパターンを増やすことができるだろう。

そして、サッカーで、かなり重要な局面といえば、セットプレイだ。

ゴール近くでのフリーキックや、コーナーキックは、点を取るための絶好のチャンスとなる。

実際の試合でも、セットプレイで得点する場面が、非常に多い。しかし、こちらが守る場合は、逆に絶対的ピンチだとも言える。

セットプレイにも、直接ゴールを狙うのか、誰かにパスをだすのか、やはり駆け引きがあり、例えそれがうまくいきそうになったのを何とか防いだとしても、そこで油断してはいけない。

なぜなら、本来のシュートがはずれても、それに安心して、こぼれだまにまでは注意がいかず、それを拾った選手が、誰にも阻まれることなく、あっさりゴールを決めてしまうこともあるからだ。

このように、基本的な知識だけでも、これだけたくさんあり、そして、それらは全て、応用がきく。

これらをどう応用し、各選手に合った応用テクニクを身につけさせるか、がポイントになってくるだろう。

そのためには、もうそろそろ、実際にサッカー部の練習を見に行つて、どんな選手がいるのか、見極めなければならない。

そうしてはじめて、それぞれの癖や特徴、持ちうる技術等を把握して、それにあわせた有効なテクニクや戦術を考えることができる。

(まだまだやることは多い)

桜は遠くをみやった。

そこには、まだ見たこともない国立競技場がある。

第二十六章（後書き）

もー今回の章辺りから、とうとう、スポ根モノ全開状態になってき
ちやいました（。 。 。 ;）

この小説のどこら辺が恋愛ー！（。 。 11）

と、読んでくださった方は、つつこみたくなると思います。 . . .

（ノ、（）

予告通り、「前世邂逅編」は、90%くらいスポ根が占めて、残り
10%くらいしか恋愛がありませんー！（、 . . .（ ） 開き直つて
ます。

それでも、あと4章分くらいで、恋愛っぽくなっていくと思います
ので、よかつたら見捨てずお付き合いくださるとうれしいです。

よろしくお願いいたします（* . .（）* | |（）

第二十七章

5月の半ばころ、初めてサッカー部の練習を、桜は見に行った。サッカー部のメンバーは総勢14名で、とりあえず、これなら最低人数の11人を満たしている。

それから一月の間は、何も言わずに、ただ練習を見ることのみに集中し、各部長の特徴や持っている技術の把握に努めた。

顧問の先生は、一応いるはしかつたが（練習の場にも来ていなかった）、サッカーに関して無関心なのか、もしくは知識がないのか、実際に部長たちを指導していたのは、篠原英治だった。

彼は、1年生だったが、元ユースで、しかもそのユースの中でも将来が期待されていた選手だったので、先輩たちも彼のことを尊敬しているはしかつた。

なので、1年の彼が指導の立場にあることに、特に波風が立っていないということもなく、皆、一生懸命練習していた。

ユースの中のエリートというのは、本当にすごいのだ。

勉強していて、理解していたつもりではあったが、桜は改めて、篠原英治のすごさを知った気がした。

彼は、選手としても素晴らしかったが、指導者という立場においても、15歳とは思えない才能がある、と桜は思った。

彼の行う練習方法には、ほぼ無駄がなく、特に特筆すべきは、メンタル面において、人のモチベーションを高めたり、やる気を引き出させたり、選手の内面をコントロールするのが非常にうまいのだ。

これは、彼の生来の性格によるところが大きいだろう。

桜も、初めて彼と会ったときは、穏やかで、人を丸ごと大きく包み込むような、彼の性格に、安心感を感じたのを覚えている。

そんな篠原英治に、絶対の信頼を寄せられれば、誰だって、ついその気になってしまうのだ。

あの日の桜もそうだったように。

部員たちの練習風景を見ていて、桜は、選手ひとりひとりが、それぞれに合ったテクニクを身につけることと、メンタル面の管理は、篠原英治に任せておいてよさそうだ、と判断した。

テクニクにおいては、篠原英治はフォワードというポジションでずっとやってきた、と言っていたが、他のポジションに必要なテクニクも知っていたし、実際に自分でそれをすることもできた。

それにそもそも、テクニクに関しては、いくら知識を詰め込んだのであっても、実践経験のない桜は何も教えることはできない。

桜が能力を発揮する場面があるとすれば、それは、選手にあったプレイ方法と、チームにあった戦術を生み出すことだ。

そのために、桜は、練習風景をひと月しっかり観察し、部員それぞれの特徴や癖、チーム全体がどんなタイプなのか、といったことをしっかりと記憶した。

大事なところは、ノートに書き留めたりもした。

その後桜は、サッカー部のメンバー14人全員と、ひとりずつ、時間をかけて、面談を行った。

現在不安に思っていることや、悩んでいること、練習で身につけた技術やその他の希望、とにかく、何でも思っていることを遠慮なく打ち明けてほしい、とお願いして、親身に聞いた。

普通考えて、ただの一般女子高生がそんな面談を設けたって、誰も真剣に話などしないだろう。

しかし、篠原英治が、桜のことを、彼女なら自分たちを国立に連れて行くこともできる、と紹介したので、ユースのエリートでもあった篠原英治がそこまで言い切る女子高生なら、実はすごい才能の持ち主なのではないか、などと噂が広まり、面談では、部員全員が、桜と真剣に話をしてくれた。

そもそも、サッカー強豪校でもなんでもない、ごくごく普通の高校でサッカーをやっている彼らに、当然のことながら、国立へいく、などという目標を持っている人は誰ひとりいなかった。

その時初めて、部員たちは、篠原英治が本気で、このメンバーで、

国立を目指していることを知ったのだ。

しかし、たったの2カ月で、部員たちの心をつかんでしまっていた篠原英治のその目標を聞いて、笑ったり、呆れたりするものは、一人もいなかった。

むしろ、自分たちでも、あの憧れの舞台に立てるのではないかと希望とやる気を出させたくらいだ。

（本当に不思議な人…）

篠原英治と一緒にいると、どんなに果てしない夢でも、不思議と叶ってしまふような気になってしまうのだ。

そうしたおかげで、桜の面談は、結果としてかなりの情報や、選手の本音、今後の課題といった、様々なデータを、引き出すことができた。

桜の想像以上に、この面談は収穫があった。

時間をかけてやっただけの価値があり、今後色々な戦術を組み立てる上で、とても重要な情報源となった、と言ってもいい。

それらと、練習風景を見ていて気付いたことを合わせて、桜は思いついたことをいくつか試していった。

例えば、MFの佐藤先輩は、90分フルで試合で動いていたとしても、試合終了後、他の部員たちはへとへとになって、中には倒れこんだりしている部員さえいるのに、彼らに比べて、ほとんど疲れた様子を見せない。

だからといって、彼は試合中さぼっていたわけではない。

他の部員と同じくらいか、それ以上に動いていた。

もしかして、佐藤先輩のスタミナは並はずれてあるのではないか？ だとしたら、そのスタミナを駆使して、時には前線まで駆け上がったゴールを攻めたり、また時には、最後尾まで下がって守備をすることもできるかもしれない。

桜は、佐藤先輩に、「一度今度の試合で、フルで動くことがあったら、最初の指定位置にとらわれずに、ボールを追って、コートを走り回ってほしい」と頼んでみた。

桜の予想は見事に当たった。

90分の間、ほぼ走り回っていても、佐藤先輩は、ほとんど疲れが見えなかった。

たとえば、今までMFという枠組みの中だけでプレイしてきた佐藤先輩が、なかなかゴールを決められなかったとしても、常にボールを追ってゴールを狙ってくる存在は、相手方に見れば、かなりのプレッシャーになる。

それは、守備面でも同じことが言えた。

やはり、常にボールを追って守備にあたる存在がいれば、味方も数が増えた分、気持ち的にも実際にも楽になるし、敵にとっては、攻めにくくなる。

さらに言えば、MFだと思っていた相手プレイヤーが、すぐにボールを追って、時には前線まででてきて、また時にはゴール前で守備にあたっている。

その人並ならぬ運動量で動き回っていると、相手プレイヤーは、どこにいても佐藤先輩と遭遇することになり、なんだこいつは、と驚くのだ。

佐藤先輩の今まで眠っていた特技は、疲れを知らない人並み外れた運動量だったのだ。

他にも、桜が気づいて実践したいくつかのことは、たいていのことが、桜の予想通りになった。

「やっぱり、僕の思った通りだ。水野さんは、監督に向いている」
ある日、篠原英治が、桜にそんなことを言った。

（それは違う。あなたの夢は、もうすでにあなただけの夢ではなく、私の夢でもある。だから、私はそれを叶えるためだったら、できることがあるなら、ひとつ残らず実践しているだけだ）

本当は、直接言葉で伝えたかったが、桜は、心の中でそう言った。必死で覚えたサッカーの知識と、試行錯誤を繰り返して編み出した戦術を、それらの、これとこれを結合させたらどうなるのか、桜は、頭の中で、数えきれないくらいのパターンをシミュレーションして

みる。

それから、実際の部員たちに何が足りなくて、何が向いているのか、を見極めた後、そのシミュレーションで成功した方法を、ひとりひとりに与えていく。

それらが結果として、部員ひとりひとりの能力を最大限活かした、最高の戦術やプレイ方法となったりするのだが、それだって、自分は監督だから、などと思ってやっているわけではない。

全ては、自分の夢を叶えるため、そして同時に篠原英治の夢を叶えるためにやっているのにすぎないのだ。

でも、それは、今打ち明けることではない。

自分はまだ、目標を達成していないのだから。

夢が叶ったそのときには、全てはこの瞬間のためだった、と告げよう。

桜はそう決めていた。

それから　　まだ、言いたいこともある。

でも、それもまた、国立競技場で言つと決めたのだ。

第二十八章

4月から、篠原英治の指導の元、部員たちは皆それぞれ、日々練習に励んできて、季節は夏が終わろうとしていた。

サッカー強豪校でもなんでもない、普通の高校でサッカーをやっていた彼らだったが、この約4カ月の間、見違えるように強くなっていた。

付近の高校と試合をしても、ここところは負けなしで、あんな名もない高校が突然どうしたんだ？ と、県内で噂になっているくらいだった。

そしていよいよ、9月からは、県の予選が始まる。

国立競技場に行くためには、正確には、全国高等学校サッカー選手権大会に出場するためには、まず、県の代表にならなければならぬ。

東京都のみ2校行けるのだが、それ以外の都道府県は、たった一校のみが参加する権利を得られるという、厳しい条件だった。

つまり、県の代表にならないことには、そもそも国立にすらいけない、ということだ。

県の代表になることが、まず今目指すべきこと。目標は、まだまだその先だ。

「とりあえず、県で一番になる。これまでの成果を出し切れれば、全然不可能なんかじゃないと思う。これから始まる県の予選、頑張って行こう！」

篠原英治が皆に、その声をかけると、おー！と、皆も気合を入れた。桜の高校は、初戦から順調に勝ち進み、途中、県の代表になるだろうと誰もが思っていた本命の高校も、4対1という大差でくだった。4点は全て篠原英治が得点したものだだったが、彼は、自分にゴールするチャンスを与えてくれた皆のおかげだ。だから、この得点は皆で取ったものだ、と言った。

しかし、地元の新聞やらマスコミは、本命高を圧倒的にねじ伏せた桜の高校を、大々的に取り上げたが、その内容は、元ユースであった篠原英治が一人で活躍したため、という、一体試合のどこを見ていたのだ、と言いたくなるものだった。

確かに、篠原英治の実力は、他の部員たちと比べると、圧倒的で、彼の力がなければ、勝てなかったのかも知れない。

だとしても、サッカーは一人でやるものではないのだ。

いくら篠原英治がスーパープレイヤーだったとしても、他の部員たちの協力、助け、連携なしには、何もできない。

「分かってないね」

桜は、部員全員の目の前で、その記事が載った新聞をびりびり引き裂いた。

部員たちは、普段おとなしくて、参謀的な影の存在である桜が、そのような激しい行動を取るのを見て驚いていた。

「うん。どうやったら彼らに分からせることができるかな？」

篠原英治の言葉に、桜は決意を込めて言いきった。

「決まってるじゃない。国立の舞台にたつのよ」

新聞やマスコミが書いたり、言ったりしたことに、少なからずショックを受けていた部員たちは、桜のその一言で、一気にこれまでのやる気を取り戻した。

「そうだ、そうだ。そうすれば、誰にも文句なんて言わせねーよ」

「おう！ 国立までいくのに、一人でいけるかってんだ」

「全員でここまでできた、って証明になるよな」

湧き上がる部員たちには聞こえないように、こっそり篠原英治が、桜の耳元に口を近づけて囁いた。

「きみも、選手のメンタルをうまくコントロールできるんだね。監督として一流じゃない」

「どうかな」

今回の場合、いくら篠原英治が部員のメンタル面をコントロールするのが得意だと言っても、彼は、新聞やマスコミが褒めちぎった側

の人で、対する他の部員たちは、けなされた側の人間なのである。だとすると、そんな褒められた側の人に何を言われたって、他の部員達の心には届かないだろう。

だから、桜は、今回自らがその役をこなした。

（篠原英治にもできないことがあるなら、その時、私は動く）

それが、夢を叶えるために、必要なことなら、元より何でもやる決意だった。

とはいっても、これまで共に頑張ってきた仲間たちを侮辱するような記事を書いた、新聞やマスコミに怒りがわいて、つい直情的にやってしまった、というのもあったが。

「私を褒めるのは、最後までとっておいて」

桜は首をかしげて、にこりと笑った。

青い芝で埋め尽くされた、大きなグラウンドに、長い長い、ホイッスルが響き渡った。

すぐには信じられず、その場に立ち尽くす部員。

疲れと、嬉しさで、その場に転がる部員。

仲間に、抱きつく部員。

皆それぞれが、その瞬間の喜びを体中で表現していた。

長かった予選を勝ち進み、今日のこの決勝戦にたどり着き、見事に対戦相手をくだして、今、桜の高校の勝利が決まったのだった。

「みんな、よく頑張った！ だけどこれは、僕たちの目標の通過点にすぎない。でも今日は、この勝利を喜んで皆で祝おう！」

そう言った、篠原英治を皆で囲んで、次々と歓声があがった。

（おめでとう、みんな…）

桜も、皆のそんな姿を見てみると、今までの苦勞が思い出され、ただただ嬉しさがこみあげてくる。

そして、翌日の新聞には、桜たちの高校が、並みいる強豪校をくだ

して、見事県の代表になったことが、大々的に書かれていた。

『誰もが予想しなかった、まさかの奇跡!』

新聞に書かれている通り、サッカーの強豪校でもない、ただの普通の高校が、県の代表になれたなんて、誰もが奇跡だと思えないだろう。

でも、それは違うのだ。

(奇跡なんかじゃない。ただ、誰ひとりあきらめなかっただけ)

その裏には、ひとりひとりの努力があるのだ。

それは、皆がそろって、もつとずつと先にあるものを目指していたから。

「ここからだね」

「ああ、ここからだ」

桜と篠原英治は、一緒に遠い空を眺めた。

その遠い空の向こうには、ずっと目指し続けてきた国立競技場がある。

第二十九章

「県の代表になれたってことは、次の試合は、いよいよ国立競技場だな！」

部員たちは、喜びわきたっていた。

「あの…水を差すようで悪いんだけど、国立でプレイできるのは、開幕戦の試合と、ベスト4以内だよ。開幕戦の試合のうち、一校は東京代表のうちの一校って決まっているから、その学校を合わせても、全部で6校だね」

「え、なんだよ、それ。聞いてねーよ！」

「って、たった6校かよ…。どれだけ難易度高いんだよ。国立……はんぱねー」

「てことは、運よく開幕戦の東京代表と試合になるか、それがダメだったら、ベスト4にならないといけないってことじゃん」

「…うん。そういうことなんだよな」

ずん。

打ちひしがれる部員たちを前に、篠原英治は必死に皆を元気づけようとした。

「でもさ、僕たち、最初から比べたら随分強くなったし。ほら、県の代表になったぐらいなんだよ？ だからさ、ベスト4だって夢じゃないと思うよ？」

そ、それにつ、くじ引きで運よく開幕戦に当たれば、いきなり国立で試合できるわけだしっ、ねっ」

「…いやあ、さすがに、ベスト4は…いくらなんでも、なー？」

「だよな。くじ引きだって、もつと無理だろ…」

メンタルコントロールの達人である篠原英治の言葉でも、さすがに、現実の厳しさを目の当たりにした彼らには、効かないようだった。その様子に、篠原英治は首をひねってしばらくの間考え込んでいた

が、よし、とある決意を固めた。

(こうなったら、運命の女神に頼るしかないか)

「確かに、国立でプレイするのは、かなり難しいと思う。けど、ひとつだけ、確実な方法がある」

篠原英治は、イタズラを思いついたことのように、にやりと笑ってみせた。

「確実な方法？　なんだよ、それ」

「そんな裏技みたいなもの、あるのかよ？」

部員たちは、半信半疑で篠原英治の顔を見つめた。

「くじを、水野さんに引いてもらうのさ」

自信満々に言った篠原英治の言葉に、部員たちは、あっけにとられた。

「はあ？　それが、国立でプレイする確実な方法？」

「…いや、誰がくじ引いたって、おんなじだろ…」

「そんなことはない。だって、僕たちがここまで勝ち上がってきた経緯を考えてみてよ。

彼女がいなかったら、たぶん、とっくに僕ら、どこかで終わってたよ。

サッカーなんて、一度だってプレイしたことないはずなのに、水野さんの言う言葉は必ず当たるんだ。

もちろん、適当に言って、当たってる訳じゃなくて、その裏には、ものすごい知識と、計算と、誰も考えつかないような発想があるからなんだけど」

そこまで、言って、篠原英治は皆を見渡した。

「でも、何より僕が彼女をすごいと思うのは、どんなときもあきらめない強い思いだと思っただよね。

この世には、僕たちの想像もつかない、何か大きな力がはたらいていて、それが、時に、運命すらひっくり返してしまう気がするんだ。その力が、人の強い願い。つまり、彼女の力なんじゃないかって、

僕は思う」

篠原英治の言葉を聞いて、部員たちは静まり返った。

そのあと、お互いの顔を見合わせて、

「まあ、言いたいことは分かるよ。確かに、水野さんがいなかったら、こんな順調に勝ち進めなかったよな」

「僕も、彼女はすごいと思う」

「水野さんに、くじ引いてもらえば、確かに開幕戦に当たるかもしれないな」

と、口々に言い始めた。

それを聞いて、篠原英治は、ほっとしていた。

「そういうことだから、くじ、引いてもらえるよね？」

と、背後に控えていた桜に、振り返らずに声をかけた。

「……はい」

> i 2 8 2 3 0 — 3 4 3 9 <

全てのやりとりを、篠原英治の後ろで何も言わずに、静かに聞いていた桜は、何だか心が締め付けられるような、苦しくて、それでいてじーんと心温まるような、不思議な感覚に陥っていた。

そして、運命の国立の試合の組み合わせを決める、抽選の日がやってきた。

抽選には、桜と篠原英治が代表して行った。

大会を運営する大人たちに、説明を受けて、自分たちの順番を待っていた。

いよいよ順番がきて、桜がそろそろとくじを引こうとすると、ある大人が驚いて声をかけた。

「マネージャーさんがくじを引くんですか？」

「いえ、彼女はマネージャーではありません。監督です」

きっぱりと言い切った篠原英治を見て、その人は、

「はあ、そうなんですか。まあいいですけど……」

と、不思議そうな顔をしていた。

そして、今まさに、運命のくじを引き抜こうとしていた桜は、生涯のうち、これほど緊張したことは、なかったのではないか、というほど緊張していた。

これから、自分が引く番号で、全てが決まってしまう。

(お願い！ 彼の夢を、私の夢を叶えて！)

ぎゅっと目をつぶり、決意を固めると、桜は一枚の紙を引き抜いた。桜が引いたくじの番号は、九、と書かれていた。

篠原英治が、それを覗きこんで、

「僕の背番号と同じ番号か。これは、幸先がいいかもしれないね」と、桜に笑ってみせた。

まだこの、九、の番号が、これからどういう組み合わせになっているのか、今の段階では、分からない。

けれど、大任を任せられて気負っていた桜に、篠原英治が、そんな言葉をかけてねぎらってくれたのは、嬉しかった。

あとは、この九、の番号がどうなるか、それは運命に任せるしかない。

それからしばらく経ったある日、いつものように、サッカー部の部に活にでるため、グラウンドに行った桜は、突然篠原英治に抱きしめられた。

というか、背の高い彼は、155センチの桜を軽々と抱き上げて、強く抱きしめたまま、何回かその場でくるくる回ってみせた。

(……?)

突然、今までされたことのない、変な？ことをされて、何が起こったのだろう、と、桜は、彼のするままに任せて、茫然と彼を見つめ

た。

「やったよ！ 水野さん。僕ら、開幕戦で戦えるんだ！ 国立、行けるんだよ！」

やっと、地面に下ろされて、未だ何が起こったのか訳も分からず、不思議そうに見つめる桜に、篠原英治は、興奮してそう言った。その言葉に、桜もはじかれたように、彼を見つめた。

(…と、いうことは……)

「あの九番が、開幕戦の試合に？」

「うん、そうなんだよ」

彼は、全身で喜びを表現していた。

これまで、彼と過ごしてきたなかで、こんなにも彼の嬉しそうな姿を、桜は見たことがなかった。

(ああ…とうとう…本当に、二人の夢は叶ったのだ)

桜は、長かったこれまでの日々を思い出し、胸が熱くなっていた。

おめでとう、とか、本当によかった、とか、言いたい言葉は山ほどあった。

だけど……今は言わない。

あの遠い、見たこともない、いまや桜にとっても憧れの地となっている、国立競技場で、全てを告げるのだ。

第二十九章（後書き）

今回、ほんのちょこつと恋愛っぽくなってきました（ほっ）、

＊）

スポ根よ、さよなライオン！！（＊）

…しかしですね、ずっと「国立」目指して頑張ってきた「前世邂逅編」の英治パパ&桜ちゃんの、メインともいえる、ひとつのエピソードだったのに……「最後はくじ引きで行くんかいつつつつ！！！」（。・。 111）「……みたいな……ね……」。

たぶん、読んだ方、ほぼ全員つつこみたいところだと思っただけで、あえてそこは、「運も実力のうち」とかゆるー言葉でできとーに流しておきましょう（*・*）

ウン、まあ、物事には、柔軟な対応で、ってコトでお願いします（〃〃）

あと、「ドラゴンボール」のパロディじゃないイラスト（個人ブログがみてみんなアップしてあります）をPCで描いた後、「イラストから逃避します。さよなライオン」と言っていた今重朱里さんですが、まだ逃避中らしく、今回のイラストは、背景以外全て手書きだそうです（；^ ^）

…まあ、挿絵描いてもらえただけでもよかったですわ

あと、今日は、昨日と連続アップしていますが、私が小説をアップするのに、法則みたいなのは 아닙니다。

基本、私が小説アップする日は、決まっています。

気まぐれとか、気が向いたとか、時々は、少し理由があったりしたりもしますが（例えば、この章とこの章は関連があるから、連続でアップしよう、とかです）

何曜日にアップするかも、次いつアップするかも、なーんにも、決まっています。

私の小説を読みに来てくださっている、激レア読者様には大変申し訳ないので、このパターンで小説をアップする、という確定的法則がありませんので、本当申し訳ないです。

これからの小説も、たぶん、アップする日は、曜日も日にちも適当に決めていくと、思います。

でも、どんなに間を開けても、3日間以上は開けないように、なるべくしています。ご迷惑をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします（*・・・）（*ーー）（ペコリン）

第三十章

12月29日。

いよいよ、明日、全国高等学校サッカー選手権大会（通称、冬の国立）開幕日の前日、学校はすでに冬休みに入っていたというのに、全生徒が学校に集まった。

「全国高等学校サッカー選手権大会、出場おめでとう！」とか「祝！ サッカー部、冬の国立出場！」とか、たくさんの大きくて長い垂れ幕が、校舎の4階から掲げられていて、時々吹く風に揺れていた。

吹奏楽部が、それらの垂れ幕を背後に、一列に並んだサッカー部員たちに、校歌と、ファンファーレを演奏してくれた。

それが終わると、学校に集まった全生徒から、

「頑張れ。サッカー部！」

「国立までに行けないけど、テレビ見て応援してるからなっ」と、いった歓声が、次々に沸き起こった。

「オレ、今までの中で、一番、感動してるかも……」

「……うん。こんな日がくるなんて、思わなかったよな」

部員たちの中には、感極まって泣き出す者もいたほどだった。

桜と篠原英治は、お互いを見つめ合って、どちらからともなく頬笑みあつた。

「さあ！ 東京へ！ 国立へ向けて出発だ！」

12月30日の開幕式を経て、いよいよ、31日の大みそかである今日、開幕試合が行われる。

その場所に、東京都新宿区にある、正式名称、国立霞ヶ丘陸上競技場のピッチに、11人が立っていた。

残りの部員3名は、控えとしてベンチに座って、まっすぐ彼らを見ていた。

控えの選手だって、目で追っているものは、レギュラーの彼らと同じだった。

ピッチに実際立っているのは11名かもしれないが、ここまでずっと、14人でやってきた。

だから、全員が今ピッチに立っているという気持ちなのだ。

そう、全国でサッカーをプレイする高校生たちの憧れであり、聖地でもある、国立に、今皆で立っているのだ。

(ここが、国立…)

桜は、観覧席から、皆の姿を見下ろしていた。

やっとここまで来た…、という実感も、本当に国立にこれたのだ、という実感も、今はまだ全然わいてこない。

でも、桜の眼前に広がる、大きくて綺麗な青い芝のコートは、間違いないく、国立競技場なのだ。

桜の脳裏に、初めて篠原英治と出会った日が、突然蘇ってきた。

あの日が、長かった今日までの、始まりの日だった。

サッカーについて、かけらほどの知識もなかった桜が、篠原英治のもつ不思議な、けれどもあたたかい雰囲気と、その誠実な人柄に魅かれて、彼の夢を、自分の夢にもしたい、と思った。

だから、一生懸命、知識を覚えたり、戦術を考えたり、また各選手にあわせたプレイスタイルを編み出したり、とにかくここまでがむしゃらに、やれること全てをやってきたつもりだ。

後で、あの時、ユースをやめなければよかった、と、篠原英治に後悔だけは、絶対にさせないために。

ユースをやめたって、今の学校のサッカー部員たちと一緒に国立に行く。

そして、国立で、好プレイをすれば、それがスカウトの目にとまり、プロへの道が、また開けるかもしれない。

(まあ、そこは、あなた次第だけだね)

桜の仕事は、彼を国立に連れていくことだけ（もちろん実現できたのは、篠原英治をはじめ、他の部員たちの努力の賜物でもあったが）。

だから、その先は、篠原英治が自分で切り開いていくしかない。でも…彼なら、やってみせるだろう。

ピッチに立つ篠原英治の姿を見つめて、桜はそう思っていた。

開幕戦の東京代表校との試合は、誰もが驚くような結果で終わった。そもそも、県の代表になれた時点で、奇跡、などと言われていた、名もないサッカーチームである。

その大穴だった彼らは、東京代表校を、5対3でくだした。

サッカーの試合というのは、お互い間にそれほど実力の差がなければ、たいていの場合、そんなに大量の得点が入らない。

2対1とか、3対0とか、そんな辺りが、平均的な試合の結果となる。

1試合で、5点も取るのは、驚異的な数字だといえた。

しかも、相手チームだって、国立まで駒を進めてきた訳だから、相対に強いはずで。

ちなみに、今日の試合の、その5点の得点は、全て篠原英治が取った得点だった。

東京代表チームだって、初戦の相手のデータくらい事前に調べていただろう。

その中に、元ユースのフォワード、篠原英治がいて、彼が一番危険人物だという認識も、当然持っていたはずだ。

だから、観戦席の桜から見ても、篠原英治に対する守備は、常に徹底して、相当厳しく固められていた。

それを振り切つての、5得点である。

まさに、天才、としかいいようがない。

(いや、それほど、サッカーが好きだけなのかな)
天賦の才も、もちろん、篠原英治は持ち合わせいたが、それだけでは、こんな圧倒的なプレイはできなかつただろう。
誰よりもサッカーが好きで、自分の実力に驕ることなく、常に努力を続けてきた結果、彼は素晴らしいプレイヤーとなったのだ。
そんな彼を、桜は、誇らしいと思って、ずっと見つめていた。

第三十章（後書き）

7月28日（木）の13時30分ごろ、前章の「第二十九章」に、あとがきを加筆いたしました。それ以前の時間に読まれた方、たいした内容&量ではないのですが、よかつたら、1P戻っていただいで、読んでくださるとうれしいです（、、*）

あと、話は変わりますが、人気がないと言っておりました「前世邂逅編」ですが、最近「前世邂逅編」が始まる前までと、だいたい同じくらいの方に読んでいただけているようです。

よかつたー（>|<） あのバファリンを上回る、スポ根率90%という超荒業に踏み切った上、主人公クラスが総入れ替えという、見捨てられてもおかしくないような「前世邂逅編」だったので、どうやら、大丈夫だったようです（、、）

見捨てず読んでくださっていらっしゃる方、本当にありがとうございます（|—*）。

これからもよろしくお願いいたします。
もうすぐ、「前世邂逅編」も終わります。

第三十一章

コートから、帰ってきた部員たちは、皆とても嬉しそうにはしゃいでいた。

それも当然だろう。

誰もが憧れる国立でサッカーをプレイできただけでなく、勝利までおさめてしまったのだから。

「このままベスト4までいって、また国立にこれるんじゃないか？」

「それは、さすがに楽天的すぎるだろ。せめてベスト8くらいだつて」

「1試合負けるだけかよつ。それなら、あと1試合くらい頑張ろーや」

そんなやりとりに、皆大笑いしていた。

喜びにひたっている皆から、そつと桜は離れて、国立競技場のコートが見える場所までひとり、歩いてきた。

もう、この場所を見られるのも最後かもしれない。

そう思ったから、もう一度、見ておきたかったのだ。

美しい芝生のコートを眺めていると、ふいに背後から、桜を呼びとめる声がした。

「水野さん、どこか行っちゃったと思ったら、ここにいたんだ」
振り返ると、篠原英治が立っていた。

彼は、桜の隣にきて、桜と同じように眼下に広がる国立競技場を見下ろした。

「うん。ここからの眺めは、確かにいいね」

目を細めて、まぶしそうに見つめる彼の横顔を、綺麗だ、と桜は思った。

「あの…もし、あの日二人で決めた夢が叶ったら、そのつまり、国立にこれたら、その場所で言おう、と思っていたことが、みつつあるんだけど……」

桜が、緊張しながら、おそろおそろ声をかけると、篠原英治は、桜の方に向き直った。

「なに？」

桜を見つめた彼の顔は、女性の桜がため息をつきたくなくなってしまったほど、繊細で、整っていて、ただ美しかった。

そのことに少し気おくれしながら、桜は、ずっと胸に秘めていた言葉を思い切って口にした。

「まず、ひとつめは、おめでとう。」

あの日：篠原君が、ユースをやめるって言った時、どうなっちゃうんだろう？ って不安に思ったけど、そのあとは、ずっと信じてた。絶対に、国立にくるって。

だから、それが今日叶ったから、おめでとうって言いたかったの」「僕の方こそ、ありがとう。僕を国立へ連れてって、って頼んだら、ほんとに連れてきてくれたね」

篠原英治は、おかしそうにくすくすと笑った。

「べ、別に…私の力なんかじゃないよ…」

「そんなことない。君がいたから、僕は今ここにいると思ってる」笑うのをやめて、急に真剣な眼差しで桜を、篠原英治は見つめた。その目が、あまりに真剣だったから、桜はドキドキした。

（まだ言いたいことが残っているのに、そんな目で見つめられたら…言えないじゃない…）

桜はうつむいた。

しばらく、桜の言葉を待っていたあと、桜が黙ってしまったので、篠原英治が、ふたつめは？ と聞いてきた。

彼に促されて、桜は、勇気を振り絞って話し始めた。

「ふたつめは、最初は、国立の舞台に立つっていう夢は、篠原君だけの夢だったのだけど、いつからか、私の夢にもなってた。

だから、どんなに大変なことだろうと、それが可能なことならば、全部やるつもりでやってきた。もうこれ以上他にやることはない、って言いきれくらい、残さずやってきたつもり。」

だから…こうして今、ここにすることが、とても嬉しい。篠原君の夢が叶っただけじゃないの。私の夢も叶ったから」

桜が言ったことに、篠原英治は、驚いたようだった。

「そうだったんだ…。どうして水野さんの夢になったのかは分からないけど、それなら、水野さんにも、おめでとう、って言わなきゃね」

彼は、優しくほほ笑んで、さらに言葉を続けた。

「でも、水野さんは、ピッチにたつてプレイしたわけじゃないけど、君の努力と能力は、本物だったと思う。

僕が今まで見てきた中で、一番のすばらしい監督だ。

あと、君は、運命の女神でもあるね。だって本当に、あのたくさんのかくじが入った抽選箱の中から、今日のこの試合を選び取ったんだから」

篠原英治は、また楽しそうにくすくすと笑った。

その様子から察するに、あんなに、確信を持って、桜にくじを引かせるように仕向けたのに、まさか本当に引き当ててしまうとは思っていなかったのかもしれない。

いや、現実的な確率の低さを考えれば、当然そう思っていたのだからうけど、桜なら現実そのものをひっくり返してしまうことができるなどと思っていたのかもしれない。

そう考える思考は、桜には分からなかったが、そもそも、会ったその日から、篠原英治、という人は、桜をそんなふうに見ていた。

だから、誰もが無謀だと思えるような賭けに、桜を巻き込んだのだ。

「で、みつつめは？」

最後に聞かれた桜は、うつむいた。

なぜなら…さいごのみつつめが、一番言いにくいことだったからだ。だけど、同時にそのみつつめこそが、1番、この場所で言いたいことだった。

だから桜は、心の中で決意を固めて、篠原英治をまっすぐ見つめた。「みつつめは…その、二人で一緒の夢を追いかけている間、すごく

楽しかった。叶った今も。

だから、これからも…その、また一緒に夢を追いかけたいな、って思ってる…。

えと…なので…よかったら、その、わ、私と、つきあってくれませんか？」

篠原英治がどんな答えを言ってくるのか分からなかったので、桜はぎゅっと目をつむった。

篠原英治が、何か言うまでの間が、とても長い時間のように、桜には感じられた。

桜は、男の人を好きになつたのも初めてだったし、つまり初恋だったし、当然告白するのも初めてのことだった。

だから、口にするには、全身全霊の勇気が必要だったし、言ってしまったあとは、この先どうなるのか、不安でいっぱい、今にも自分が崩れ落ちてしまうのではないか、と思えるくらいだった。

「僕の方からも、お願いします」

(……え?)

篠原英治の言葉に驚いて、目を開けて、彼を見つめると、彼は愛おしそうに桜を見つめていた。

> i 2 8 5 9 9 — 3 4 3 9 <

「ほ、本当に…?」

信じられないように問い返す桜に、篠原英治は穏やかに微笑んで、うなずいた。

「あーあ、先に言われちゃったなー。水野さんのこと好きになったの、僕の方が先だったのになー」

篠原英治が、残念そうな顔をするので、桜は、緊張して張りつめていた糸が切れて、ふっと笑った。

「笑わないでよー。中学校のとき、君を見た時、一目ぼれしたんだから。それなのに、水野さんは、僕のこと、顔も名前も知らなかつ

「たんだもんない。それを知った時は、さすがにへこんだっけ……」

「しゅーんとしおれる篠原英治に、桜は慌てて言い訳をした。」

「そつ、それは、そのつ、何というか……。……うう、ごめんなさい。って、あれ？ 篠原君、中学の時から、私のこと好きだった……って……」

「うん……。中学1年のとき、初めて僕の前を通り過ぎて行った君を見たとき、まるで、周りの時間が止まったみたいだった。」

「僕の前には、たくさんの人が動いていたはずなのに、全部止まってしまつて、ただのモノクロの背景みたいになつて……。笑いながら歩いている君の姿だけしか、僕の目には映らなかつたよ。そのあと、君の姿が見えなくなるまで、ずっと目で追つてた。」

「それから、時々、君を見かけるたびに、僕はドキドキしていたよ」

> i 2 8 6 0 0 — 3 4 3 9 <

「篠原英治が、今まで見たこともないくらい、恥ずかしそうにうつむいて、もじもじしているの、それが桜にまで、伝染してしまつた。」

「そ、そうだつたんだ……」

「うん……」

「二人は、しばらくの間、うつむいたり、あらぬ方を見たりしながら、恥ずかしさで沈黙していた。」

「それを破つたのは、篠原英治だった。」

「彼は、突然桜を強く抱きしめた。」

「ずっと、そばにいてほしい……。……桜。大好きだ……」

「彼の温かな腕に包まれながら、桜は、これ以上ない幸せを感じていた。」

「……うん。ずっとそばにいる」

第三十一章（後書き）

やっと恋愛っぽいお話きました!!（*く>）
これで、この小説のカテゴリーも、堂々と「恋愛」って言い切れま
すっ!!

しかも、今回は、挿絵も2枚つきです！ 今重朱里さんが頑張って
描いてくれました

（、*）

（すごい少女マンガチックなイラストですが……（；^ ^） 特
に一枚目の方……）」

あと、昨日と一昨日のブログで、小説制作裏話と題しまして、サッ
カーについての裏話を書いています。

正直、スポ根ばかりだった「前世邂逅編」のサッカーにはあまり興
味のある方いらっしやらないとは思うのですが、ほとんどサッカー
について何も知らなかった私が付け焼刃で身に付けた知識の謎とか、
ここだけのお話（・・）、みたいなのもありますので、お暇があ
る方、いらっしやいましたら、見にいましてください（、*）
この間、「なでしこジャパン」はワールドカップで優勝しましたし、
この機会に（便乗してw）サッカーを好きになるっていうのも、「
桜の咲く頃に」激レア読者さまも、どうですか？w

それから、明日のブログでは、今重朱里さんの謎？に迫る予定ですw
（たぶん、読んでくれている方、サッカー以上に興味ないだろうと
は思うのですが…

（つ・一一）

第三十二章

全国高等学校サッカー選手権大会では、3回戦で惜しくも破れてしまった。

試合はトーナメント形式なので、一度負けてしまったら、次はもうない。

だから、ベスト4になって、再び国立競技場の地に立つことはできなかった。

しかし、もともと、サッカーの名門校でもなんでもない、ただの普通の高校がそこまでいったのは、快挙といえるだろう。

部員たちは皆、その結果に満足していたし、開幕戦で、国立で試合をしたこともあったので、試合に敗れたあとも、すがすがしい顔をしていた。

地元に戻ってきた彼らを、学校中の生徒や、地域の人たちが、彼らの健闘を称え、称賛の声とともに出迎えた。

そんなお祭り騒ぎも、ひと段落した頃、桜と篠原英治は、初デートをした。

どこに行くのか、お互いが譲り合って、結局決まらなかったため、待ち合わせ場所だけ決めて、あとは適当にその場で決めようということになった。

待ち合わせの3時間以上前から、桜は、持っている服をひとつずつ出してきたは着てみて、鏡の前に立っては、うーんと考え込んで、また次の服をだしてきて…というのを、何十回も繰り返していた。

（篠原君で、どんな服装が好みなんだろ…）

それはどんなに考えたところで、分かるはずもなかったし、何度も何度も服を着替えて、やっと、自分の一番気に入っている服で行こう、という結論に達した。

桜のお気に入りの服は、黒いカーディガンに、桜色のミニスカート。スカートには、白いフリルが着いている。それに、茶色のブーツを

履いて、桜はでかけた。

(ちよつとこどもっぽいかなあ)

他の人にも、桜の趣味はこどもっぽいと言われることがよくあったので、篠原英治にもそんなふうに思われたらどうしよう、と少し不安になった。

しかし、今から家に引き返して、他の服に着替えていたのでは、約束の時間に間に合わない。

桜は、覚悟を決めて、約束の駅前の噴水広場に向かった。外に出ると、1月の冷たい風がびゅうびゅう吹いていた。

カーディガンに、ミニスカート、という軽装の桜は、冷たい風が吹く度に、凍えそうになった。

(さむっ。外の寒さとか、全然考えてなかった…) せめて、コートくらい、はおつてくるべきだった。

どんな服がいいのか、そればかりしか頭になかった桜は、外が真冬で、とても寒いことをすっかり失念していた。

(服がこどもっぽいとかいう以前に、こっちのほうを呆れられそう…)

だんだん、気持ち沈んで行く桜だった。

待ち合わせ場所の駅前噴水広場に、桜が到着したのは、約束の15分前だった。

しかし、もうすでに、篠原英治は来ていた。

私服の彼を見るのは初めてだったが、背がすらりと高く、細身の彼は、センスのいい服をすんなり着こなしていた。

桜は、しばらく遠くから、その姿に見とれていたのだが、すでに待たせているのだった、ということに気づいて、慌てて彼の方へ駆けて行った。

「あのっ、お待たせして、ごめんなさい」

「僕も今来たところだから」

篠原英治は、にっこりと笑った。

「その服、かわいいね、似合っているよ」

「あ、ありがとう……」

嬉しくて、桜はうつむいた。

「でも、少し寒そうだ……」

(う……やっぱりそう思うよね)

しゅーんとうなだれた桜の体に、突然、ほんわり温かい服がかぶさった感触がした。

驚いて、顔をあげると、篠原英治が、自分の来ていたカーキ色のコートを脱いで、桜の体に着せたのだった。

「男物だから、少し大きいかな……。でも風邪をひくといけないから確かに身長185センチの彼のコートは、桜にはぶかぶかだった。

だけど、何だか、体だけでなく、心まで温かくなった気がするのだった。

> i 2 8 7 8 0 | 3 4 3 9 <

「ありがとう」

桜は、顔が赤くなるのを感じて、思わずうつむきながら、篠原英治にお礼を言った。

第三十三章

待ち合わせ場所で一緒になった後も、結局どこへ行くか決まらなかつた。

なので、とりあえず、二人はその辺をぶらぶらすることにした。

桜は、篠原英治について、たくさん知りたい、と思っていたので、色々な質問を投げかけた。

例えば、好きなものは何か、とか、サッカー以外に興味はあるのか、とか。

桜は、好きな人と一緒にいられることに、とても幸せを感じていたから、こうして彼と会話するのも嬉しくてしょうがないのだった。

だから、次々と興味津津で質問するのだが、何故かそんなハイテンションな桜に対して、篠原英治の答えは、心がこもっていないように、返事も遅かったりした。

そんな彼の様子を不思議に思って、桜がよくよく彼を観察してみると、いつもの彼のような元気がなく、時々心ここにあらず、といったぼんやりした表情をしていた。

（私と一緒にいるの、つまんないのかなあ……）

桜の元気まで、一緒に消えていってしまうようだった。

そんなだったから、二人の会話は途切れがちになり、気づくと、沈黙したまま、ただ当てもなく歩いていった。

ぼんやりしながら歩いていたので、普段は誰も通らないような細い路地りいつの間にか入り込んでいた。

そこをさらに奥へ進んでいくと、突然周囲から浮いている、かわいらしいお店が姿を現した。

ここは、桜の地元で、よく来る駅の通りの近くだったはずだが、この店を見たのは初めてだった。

それもそのはず、この店にたどり着こうと思ったら、細い路地を抜けたり、普通の人だったら、絶対に見逃してしまうような曲がり角

を曲がったりしなければならなかったからだ。

桜たちは、無言で、当てもなく彷徨っていたので、偶然そのお店にたどり着くことができたのだった。

「パイ専門店：アメリカ……」

桜は、お店に掲げられた看板を読んだ。

こんな誰もこないような場所にお店をかまえて、大丈夫なのかなあ、と桜は余計な心配をした。

「そういえば、随分歩いたね。お腹減った？　中で食べれるのかな？」

桜が、このかわいらしい外観のお店に興味を持ったのだと思ったのだろう、篠原英治は、

桜の方を見て、そう尋ねた。

確かに、お腹も減っていたが、それよりも、ただ無言で歩きまわること、気まずさを感じて、いたたまれなくなっていたので、桜は、中に入ってみよう、という気になった。

「うん。入ってみていい？」

につこり頷いた篠原英治とともに、二人は、パイ専門店アメリカに足を踏み入れた。

店内は、外観と同じく、かわいらしい装飾であふれていて、まるで、童話にでてくるお菓子の家のようなお店だった。

狭い店内には、テーブルと椅子がふた組ずつあり、どうやら、そこで食べて行くこともできるらしい。

桜は、ガラスケースの中を覗き込んだ。

中には、おいしそうな、アップルパイ、ポテトパイ、パンプキンパイ、マロンパイ、洋ナシパイ、チェリーパイの5種類のパイが飾られてあった。

その中で桜が食べたことがあるのは、アップルパイだけだった。どれもおいしそう、と迷った末、桜が選んだのは、チェリーパイだった。

「じゃあ、僕もそれで」

パイを選び終わると、テーブルについて、二人はパイが運ばれてくるのを待った。

途中、店員さんが、飲み物を聞きにきたとき、桜はミルクティーを、篠原英治はコーヒーを注文した。

椅子に座って、お互い顔を合わせても、やはり、篠原英治は浮かない顔をしている。

寂しげで、憂いを秘めた目をしていて、桜のことなど、眼中に入っていないようで、心はどこか別のところにあるようだった。

（そんなに、私と一緒にいるの、つまらないのかな…）

初めてのデートってこんなものなの？ と桜は悲しくなっていた。

桜が予想していた、初デートは、とても楽しくて、一緒にいるのが嬉しくて、とても幸せな時間になるのだと思っていたのに。

もしかしたら、篠原英治は、自分と付き合おうと決めたことを、後悔しているのではないか、などと思えてきた。

だから、こんなに、つまらなそうなんだ…と。

そう考えると、桜も、悲しくなつて、自然うつむいてしまっていた時、店員さんが、飲み物とチェリーパイを運んできた。

それは、ガラスケースの中で見たパイよりも、ずっとおいしそうなパイだった。

桜が一口食べると、甘酸っぱいチェリーと、甘くて柔らかいパイの生地が絶妙に合っていて、中に少量入っているバジルとカスタードクリームがそのおいしさを一層引き立てていた。

「すごくおいしい！」

無意識に、ついパイを食べた感想が、桜の口をついてでていた。

「桜が桜を食べておいしいんだ」

ぷつと、篠原英治は吹き出した。

その笑顔は、今日のデートの中で、一番楽しそうな笑顔だった。

桜が見たかった、心から笑う姿だった。

だから、それを見たたん、桜の目からぼろぼろ涙がこぼれおちた。篠原英治はびっくりして、慌ててポケットをまさぐって、ハンカチ

を取り出すと、桜の頬を伝わる涙をぬぐった。

「どうしたの？ 僕、何かいけないこと言った？」

「だって…篠原君、今日ずっとつまらなそうだったから…。話をしている、ほとんど上の空だったし…。私と付き合うの後悔しているのかと思って…」

「そうか…ごめん。気付かないうちに、そんなふうに振舞ってしまっていたんだね…。その上、余計な心配までさせてしまって…。ダメだなあ、僕」

本当にごめんね、と何度も謝ってくるので、桜は、今まで思っていたような理由ではなかったのだと、安心した。

「じゃあ、なんで？」

桜が尋ねると、篠原英治は、言葉に詰まったようだった。

そして、言いにくそうに、ぼつりぼつりと話し始めた。

「たぶん…こうして会えるのは、最後になると思う」

「…………え？」

突然の思いもよらなかった言葉に、桜は絶句した。

第三十四章

「いや、最後つていうか、当分会えないつていうか…」

歯切れの悪い篠原英治に、桜は詰め寄った。

「どういふことか、ちゃんと説明して」

篠原英治は、その勢いに圧倒されたようだった。

それで、思い切って、全てを打ち明け始めた。

「実は、この間の国立の試合をスカウトの人が見ていて、その後の2戦目、3戦目の試合も見えてくれたらしいんだ。それで、うちのJリーグのチームと契約しないか？つて誘われて…」

高校生が、Jリーグと契約を結ぶなんて、前例がないらしい。だから、どういふ扱いになるのか僕もまだよく分からないんだけど…」

ただはつきりしているのは、そのチームのある県に、行かなければならないんだ。そうすると、もうここにはいられなくなる…」

篠原英治が、今日のデート中、ずっと寂しそうな顔をしていたのは、そのせいだったのか、と桜は納得した。

「プロのサッカー選手になれたんだ…。すごいじゃない。高校生では前例もないんでしょ？」

おめでとう。遠くからでもずっと応援するよ。もう一つの夢、こんなに早く叶っちゃったね」

桜は、まるで自分のことのように、嬉しそうに笑って言った。

それに、篠原英治はとて驚いたようだった。

「もうしばらく会えなくなるよ？ 会いたいと思っすぐ会えるような距離じゃないんだよ？」

「そんなの。私が高校を卒業したら、その県の大学に進学するとか、就職するとかすればいいだけじゃない。その間は、今まで一緒にいたときのことを、思い出したりして、会いたくなくても我慢するよ」あくまでにここに言い切る桜に、篠原英治は、ほっとしたような、でも少し寂しそうな顔をした。

「桜が、そう言ってくれるなら…僕の方が悩んでるわけにはいかないね」

「いつ引越すの？」

「それが…来週なんだ…」

それには、さすがに桜も驚いた。

「ず、随分急なんだね…」

「うん。FIFA U-17ワールドカップって知ってる？」

「確か、17歳以下限定で参加できるワールドカップだよな？」

「そう。その候補に、僕が上がっているから、早急に来てほしいって言われて…。それが始まるのが6月からだから、確かにあと5カ月しかないからね」

それを聞いて、桜は、何も言葉がでてこないほど、驚いた。

17歳以下限定とはいえ、ワールドカップといえば、サッカー界で最も有名な大会ではないか！

そんなすごい大会に、自分の恋人がでるのだから、あまりにスケールが大きすぎて、全然実感がわかない。

「…なんて言ったらいいの…。すごく驚いたよ。だって、プロのサッカー選手どころか、それって日本代表じゃない。篠原君、サムライブルーになるの？」

目を輝かせて聞く桜に、篠原英治は苦笑した。

「まだ、出られるって決まったわけじゃないよ。あくまで、候補にあがっているだけだから…」

「それでもすごいよ。…なんだか、どんどん遠い人になっちゃうみたいだね…」

桜は、世界に羽ばたこうとしている篠原英治のことを思って、遠くに目をやった。

寂しくないと言ったら、それは嘘になる。

篠原英治の引越す先は、同じ日本だが、それでも随分遠いと思っていたのに、それが、外国となったら…。

同じ日本にいるのとは比べ物にならないくらい、とてつもない距離

で、離れ離れになってしまうのだ。

距離も遠いが、篠原英治の存在も、遠い人になってしまうのではないか。

彼の活躍が嬉しい半面、そんな一抹の不安が、ふと桜の脳裏によぎった。

しかし、そんな不安を顔にだしてはいけない。

最後まで、笑って送り出さなければいけない。

彼の大きな夢は、今からが始まりなのだから。

「頑張ってきてね。もし、ワールドカップにでられることになったら、全部の試合、テレビで見えて応援するからね」

桜は精一杯、笑って見せた。

そんな桜を見ていた篠原英治が、ふと、真剣な表情になって桜を見つめた。

その表情に、桜はどきり、とした。

篠原英治は、穏やかな優しい笑顔も素敵だが、こういう真剣な眼差しをするときも、やはり美しく、ぼーっと見入ってしまいそうになる。

「次に会えるのは、いつになるのか分からない。…本当を言うと、その間に桜に忘れられてしまったら…と、ずっと不安で仕方がなかった。

だから　　僕と結婚してくれないか？」

そう言っつて、彼は、ズボンのポケットから、小さな紺色の箱を取り出した。

それは、桜も見たことがある箱だった。

（そう、その中に入っているものは、きつと…）

篠原英治がその箱を開けると、中には、桜の想像通り、銀色に光る指輪が入っていた。

桜は言葉を失った。

まさか、一体この世のどの女性が、初デートでプロポーズされると思っただろう。

確かに、篠原英治とは、まだ恋人になっただけで、今日が初デートなのだったが、それ以前から、彼とともに過ごした時間は、たくさんあった。

約1年の間、桜と篠原英治は、同じ夢を追うパートナーであり、お互いが支えあった。

いつも、お互いを信頼し合い、手を取り合って、夢に向かって全力で駆け抜けてきた。

そんな毎日を過ごしているうちに、いつしか、この夢が叶っても、次の夢もまた一緒に追いかけて、そしてできるなら、この先ずっとそばにいたい。

桜は、そう願うようになっていた。

だから、初デートだろうが、彼のプロポーズなら、何の迷いもなく受け取ることができる。

そして、もしかしたら篠原英治は、自分が、海外で活躍することによって、遠い存在になってしまっているのではないかと、桜が不安を抱くことも予想していたのかもしれない。

桜の気持ちなんて、口で伝えなくても、最初から彼は、分かっていたのではないかと。

だから、桜のそんな不安をぬぐい去るための、プロポーズなのかもしれない。

だとしたら、篠原英治というひとは、桜の思っている以上に、桜のことをよく分かってくれている人なのだ。

そこまで思い至って、桜はじつと篠原英治を見て、うなずいてみせた。

「はい、喜んで」

桜の返事を聞くと、篠原英治は、とても安心したようで、はーっと長い息をついた。

きつと、プロポーズをするというのは、ものすごい勇気がいることなのだろうし、その後、桜がどう返事するかも、不安で仕方なかったのだろう。

「ありがとう、桜。法律上、18にならないと結婚できないから、役所に書類をだしたり、結婚式を挙げたりするのは、まだまだ先になるけど…。離れている間、桜のことは、もう僕の妻だと思ってるから」

「私も、たった今からあなたのこと、夫だと思ってる。これからもよろしくね、えいちゃん」

にっこり笑って言う桜に、篠原英治は不思議そうな顔をした。

「…えいちゃん？」

「だって、結婚したら、私も篠原桜になるんだもの。篠原君って呼ぶのは、おかしいでしょ？」

「う、うん。まあ、そうだけど…。ちょっと恥ずかしい…かな」

篠原英治は、照れ笑いを浮かべた。

「じゃあ、慣れるまで、何度も何度も呼んであげる。えいちゃん、えいちゃん、えいちゃん…」

意識を失っている間、まるで長い夢でも見ているかのように、凜花は、前世の記憶を見ていた。

そして、えいちゃん…と、うわごとのようにつぶやいていた。

第三十五章

凜花と左近が遭った事故から一ヶ月後。

季節は梅雨が終わり、初夏を迎えていた。

少しずつ、暑さが増していく今日この頃だった。

そんなある日、左近と左近の父は、近くの大きな病院に来ていた。

凜花は、あの後すぐに病院に運ばれ、ICUに入って2週間、生死の境を彷徨った。

なんとか、一命を取り留めた凜花は、その後普通の病室に移され、今日やっと面会ができるようになったのだ。

医者も、命が助かったのも奇跡だが、後遺症すら残らなかったのも、また奇跡だ、と言っていた。

左近と左近の父が病室の前で待っていると、凜花の母親と父親らしき人物が、病室からでてきた。

左近の父は、深々と頭を下げ、今回のことを詫びた。

「お互い、こどもが無事に助かったのですから……」

と、声をかけてくれた凜花の両親は、一切左近と左近の父を責めることなく、それでは、と会釈して去っていった。

凜花の両親は、凜花の親だけあって、優しくて大きな人柄の人物のようだった。

左近の父はそれに感謝しながら、凜花の両親の姿が見えなくなるまで、頭を下げていた。

そしてそのあと、二人は、病室のドアをノックして、中に入った。中は個室になっていて、凜花がベッドに横たわっていた。

事故の直後の凜花を見ていた左近は、実際に凜花の姿を見るまでは、血まみれの凜花しか想像できなかったのだが、もうそんな悲惨な姿ではなかった。

当たり前、といえば、当たり前なのだが、左近は凜花の命が助かったのだ、と聞いても、信じることができず、あの酷い惨状の姿が最

期の凜花の姿だったのだ、としか思えなかったのだ。

今でも、体中包帯まみれで、痛々しいことは否定できなかったが、しかし、あの時の姿と比べれば、生きているんだ、と実感できる姿だった。

そのことに左近は、長い間の苦しみから解放され、やっと安堵した。本当に生きていてくれたんだ、と泣いてしまいそうに嬉しかった。

「左近、あの時、すぐ意識を失っちゃって、左近のこと確かめられなかったんだけど、大

丈夫だった？ 怪我とかしなかった？」

開口一番、大怪我で入院している凜花が、見舞いにきた二人に言ったセリフが、左近の心配であった。

「おまえな、死にかけてたヤツに心配されたくねーんだよ。……ってあれ？」

左近は、つい呆れて言い返したが、ある疑問が浮かんだ。

「何で、オレのこと左近って呼び捨てにするんだ？」

それは、生死の境をずっと彷徨った後に、やっと会えた愛する人に最初にかける言葉としては、おかしいものであったが、左近は気になってしまったのだった。

事故の以前までは、凜花はずっと、自分のことを、先輩、と呼んでいたはずだ。

それに、自分にはいつも必ず敬語で話しかけていた。

しかし、今の凜花の言葉は、完全にタメ口だった。

「それはね、左近、あなたが、私の息子だからよ」

凜花はにっこり笑って言った。

「……は？」

事故による後遺症はなかった、と医者は言っていたが、頭を打ったとかして、凜花はおかしくなってしまったのではないか、と左近は不安になった。

「えいちゃん。約束を守ってくれてありがとう。ここまで一人で左近を育ててくれて、ありがとう。……左近は私が思ってたよりもずっ

と、立派になつてたよ」

今度は、凜花は、左近の父に視線をやつて嬉しそうに話した。

「…桜、桜なのか、きみは？」

事故で頭を打ったかもしれない凜花がおかしなことを言いだすのはいいとして（よくはないが）、左近の父までもが、訳の分からないことを言いだすので、左近は面喰つてしまった。

「男の子の赤ちゃんが生まれるつて分かった時、名前、どうする？つてえいちゃんに聞いたよね。そしたら、桜が決めていいつて言つてくれたから、じゃあ、左近にする。

左近の桜だから、左近。

> i 2 9 1 6 3 — 3 4 3 9 <

それで、名前を決めたの。

だからね、左近、あなたは私の息子なの」

（左近の桜…）

歴史にも、古文にも興味がなかった左近だったが、その言葉は聞いたことがあった。

意味は、当然分からなかったが。

そういえば、左近の母の名は、桜、だった。

「えいちゃんが、初デートの時、たまたま見つけたパイ専門店アマリアのチェリーパイを、今でも何かの記念日に食べていてくれたのも、嬉しかった。私がすごくおいしいつて言ったら、えいちゃん、

『桜が桜を食べておいしいんだ』つて笑つてたつけ」

凜花は、遠い日を思い出すように、懐かしそうに語り、そしてくすくすと笑つた。

凜花の言つた言葉を、左近の父も、遠い日の記憶をたどるように、懐かしく思い出していた。

「僕も約束を守ったかもしれないけど、桜も約束を守ってくれたんだね。

「えいちゃん、桜は死なないよ。確かに一度は散ってしまうかもしれない。でもまた咲くんだよ。だから…待っていて。その時まで、左近をお願いします」

本当に桜の言った通り、桜はまた咲いたんだ。こんな季節はずれにね。

おかえり、桜」

左近の父は、左近がこれまで見たこともないほど、嬉しそうに、そして愛おしそうに凜花を見つめていた。

「えいちゃん…。私が桜だって、信じてくれるの？」

「信じるも何も、僕が生涯たったひとり愛した人を間違える訳ないよ」

「…そっか、そうだね」

凜花は、ぼろぼろ涙をこぼしながら、笑っていた。

左近は、最初は二人の言動に戸惑っていたが、今はなんとなく、そんな不思議なこともあるものなのかもしれない、とそれほど違和感を感じていなかった。

それは、あの事故の直後、確実に死に向かっていた凜花の命を助けてほしい、と強く願ったら、それが叶って、現にいまこうして、凜花は生きているからだ。

それすらがもうすでに奇跡ではないか。

この世界には、自分が想像もつかないような、何か大きな力がはたらかいていて、それが時に奇跡を起こすのかもしれない、そんな気がしていた。

そして、もし今起こっていることが本当なら、左近の母、桜は、確かに一度は自らの命を犠牲に左近を救ったが、また新しい命として蘇った、ということになる。

それなら、左近はもう、母の犠牲の上に生かされているのだ、と自

分を責めなくてもよくなるのではないか？

なぜなら母は、今ここに、生きているのだから

「あー、その、まあ、おかえり、母さん」

「……」

左近の言葉に、凜花はとても驚いたようだった。

そしてしばらくの間、左近を見つめていた後、嬉しそうにはほほ笑んだ。

「ただいま、左近」

第三十六章

「早く学校行こうよ！ もー、そんなにゆっくりしてたら、遅刻しちゃうじゃないっ、左近」

「まだ、大丈夫だろ。そんなに早く行きたきゃ、先に行けよ」

左近は、父の作った朝食の味噌汁を、ずっと飲みながら愛想なく凜花に言った。いや、桜に、というべきか、母親に、というべきか。見た目は中学生なのだが、これでも凜花は、一応左近の母親なのだった。

現在、凜花は左近の家で、左近と父親と3人で暮らしている。

元々の家族に、凜花がどう説明してきたのかさっぱり分からないが、凜花が退院したと同時に、この奇妙な3人の共同生活が始まったのだった。

…まあ、元々の元々は本当の家族なんだから、見た目は奇妙だけど、これが普通だといったら、そうなのかもしれないけれど。

「左近は2年だし、部長だから後から部活に来てもいいかもしれないけど、私は新参者なんだから、一番に行かないといけないでしょ」

「だーかーらー、じゃあ一人で行けばいいじゃん」

「いや。左近と一緒にいきたい」

「……」

かなり自分勝手な理由で、左近を急かす母親に、ため息をつきながら、左近は急いで学校へ行く支度を始めた。

なんだかんだ言っても、さからえないのだ、父親にも、母親にも。父親は、男手ひとつでこれまで自分を育ててくれたし、母親は昔命をかけて自分を助けてくれた。

それをありがたく思っている以上、多少のわがままくらい聞いてやらないといけないか、と左近は思うのだった。

「左近、早く、早くー」

「そんなに急がなくても大丈夫だって」

と、二人して玄関をでたところで、同じサッカー部の同級生3人とばったり出会ってしまった。

(う…なんてタイミング悪…)

今まで、ちょうど玄関をでたところで、同じ部活仲間と顔を合わせることなんてなかったのに…。

「あー、これは、その…」

左近がまず、何か言い訳をしようとしたのを、凜花が遮った。

「おはようございます。鈴木先輩、斎藤先輩、武田先輩」

「あ、ああ。おはよう、凜花ちゃん…」

3人は、当然驚いて、左近と凜花を見比べていた。

何故、同じ家の玄関から、二人一緒にでてきたんだ？ という疑問を思いつき顔に浮かべながら。

「ほらあ、左近がゆっくりしてるから、先輩たちと同じ時間になっちゃったじゃない！
走って行くよ！」

「あ、おい、待てよ…」

左近や3人の先輩を置き去りにして、学校へと走り出した凜花を左近が追おうとすると、同級生の斎藤に呼びとめられた。

「左近、これは…どういうことなんだ？」

「あつ、あははっ。話すとき長くなる！ うん、今はよそっ。部活に遅刻したらいけないしなっ」

そう言っつて、なんとかあやふやなまま事態を切り抜けると、これ以上質問されないために、左近は急いで凜花の後を追った。

(ったく…あいつ、事の重大さ、理解してないだろ…)
と、心の中でばやきながら。

以前は一カ月部活を休んだことがある凜花は、今回は入院している間の5カ月、さらにそのあと自宅で一カ月の間休養し、もちろんその間部活を休んでいた。

なので、久しぶりの部活の最初に、凜花はサッカー部の一人一人に、ひたすら低姿勢に、謝っていた。

「前回に引き続き…いえ、今度はもっと長い間またお休みしてしまって、大変ご迷惑をおかけしました」

前回の休みは、体調不良のため、とだけしか言っていなかったため、他の部員たちはどうして休んだのか知らなかったようだが、今回は、交通事故に遭い、大怪我を負ったと全員知っていたので、皆からは、心配や同情の声が凜花にかけられた。

なので、それを気遣う一人一人に、凜花は丁寧にお礼を言ったり、もう大丈夫です、と言ったりしていた。

そして、いつものように部活が始まり、皆練習に入って行った。しかし、5か月ぶりに、部活に復帰してきた凜花は、今までの皆知る凜花とは、別人のように変わっていた。

「あの…差し出がましいとは思うのですが、ちょっと意見を言ってもいいですか？」

「なにに？」

「なんでも言つてよー」

「まず、うちのチームは、セットプレイに弱いですよね。」

攻撃側のときも、守備側のときも。確かにセットプレイは、チャンスとピンチという性質がありますけど、攻撃側のときは、それを活かしかきれていませんし、守備側のときは、守備が手薄すぎると思います。

例えば、攻撃側の場合、ほとんどのパターンで、皆左近にボールを渡そうとしますよね？確かに、エースストライカーの左近にボールを集めたくなるのは、分かるのですが、それは敵も知っています。あえて、敵の守備が手薄になっている人にボールをおくるか、もっ

といえば、直接フリーキックからゴールを狙ってもいいと思います。リスクはありますが、失敗しても、そのあとまだボールは生きているのですから、失敗を恐れず、もつと直接ゴールを狙ってみたらどうでしょうか？ 今の皆さんは、リスクを犯すことを恐れすぎている気がします。

それから、DFの鈴木先輩は、右サイドに大きなパスをする癖がありますよね？ せっかく左サイドにからあきの選手がいる場合でも、右サイドから突破しようとしてしまう癖があります。

左サイドに控えていたがらあきの選手を活かさないのはもったいないですし、何より、攻撃パターンに癖をつけてしまうと、試合で、その情報もデータとして相手側が知ってしまい、とても不利になります。得意、不得意はあると思いますが、なるべくあらゆる攻撃パターンを身につけるべきだと思います。

そしてMFの吉川先輩は、高いポテンシャルを持っていますね。試合の流れを読む力や、瞬時の判断力は、群を抜いていて、まさに司令塔と言っていていいでしょう。

でも、吉川先輩も、やはりリスクを恐れすぎです。これはチーム全体にも言えることなのですが、吉川先輩は、こちらに勢いがあつてチャンスがありそうなときでも、後方のDFへボールを戻したりして、無難なプレイが目立ちます。こちらに勢いがあるときこそ、司令塔がボールの進む道を開いていくべきかと思えます。

これはメンタル面を鍛えることによって、常に冷静な判断をくだせるようになると思います。それから……」

凜花の長い長い指導？ は1時間近くに及んだ。

今のチームの足りない部分から始まり、選手ひとりひとりの特徴や癖、長所や短所を分析して、それらの選手に合ったプレイ方法を提案した。その中には、チームの中でも副部長をつとめる優秀なMF吉川のことも入っていたし、部長であり、エースストライカーでもある左近のことも入っていた。

それから、チームに合った戦術や駆け引きなども、時と場合に合わ

せて、細かく説明していった。

それらを聞いていた部員たちは、目が点になった。

これまでの凜花は、サッカーのサの字も知らなかったのに、一体この5カ月の間に何があったのか？

それほどに、凜花の話は、ものすごい量の知識と、選手ひとりひとりを見極める洞察力、それから、斬新で、おそらくこのチームにとって、とても有効な戦術を考える発想力に満ちていた。

それら全てが、一介の中学1年生の持ちうる能力とは、とても思えないほど、全てが的確で、的を射た判断であり、戦術や駆け引きに至っては、熟練の監督ですら思いつかないのではないか、と思わせられるくらいすばらしいものだったのだ。

「…凜花ちゃん。どうしてそこまで色々詳しくなったのか、経緯はよく分からないけど、すごいね…」

今まで、サッカーに無関心な顧問の滝口先生に代わって、チームを引っ張ってきた吉川も舌を巻いた。

「まあ、国立までいきましたから、これくらいは」

にっこり笑って言う凜花に、さらに、部員たちの頭の中に？マークが飛び交った。

(国立って…?)

第三十七章

左近は、今朝のことを追求されたらどうしよう、と心配していたが、そんなことより、凜花の激変ぶりの方が、あちこちで話題になっていたので、とりあえず今朝のことは、うまく忘れてもらえたようだった。

そのことにほっとしながらも、左近も凜花の激変ぶりには正直驚かされた。

おそらく、前世で身につけたのだろうが、それにしてもすごい能力だ。

(一体、どんな前世おくってたんだ…)

凜花の前世に心の中でつつこんでいた左近の元に、当の本人がやってきた。

「もー、また左近は、ユニフォームこんなに汚してー。いくら替えがたくさんあるからって、こんなに汚したら汚れがおちないじゃないの」

「バカつ。学校では、オレのこと左近、って呼ぶなよ！ さつきも、長々得意げに色々話してたときも、さりげなくオレのこと左近、って呼んでたよな？ いいか？ これからは絶対呼ぶなよ？ 話がややこしくなるんだから…」

左近が凜花に嚴重注意をしていると、いつの間にか、他の部員たちが、二人の気付かないうちに、左近と凜花を取り囲んでいた。

焦っていたせいで、凜花に注意する声が、つい大きくなっていったらしい。

(しまった…)

左近は後悔したが、もう遅かった。

「さつき聞いたんだけど、二人って、同棲してるんだって？ 左近、つれないなあ。そこまで二人の仲が進展したなら、俺にくらい、教えてくれてもよかっただろ。色々協力してやったんだしさ」

吉川が、他の部員を代表して、左近の前に出て言った。

（ど、同棲？…そーかつ、くそーっ、やっぱ今朝見られたの、ぼっちり噂広められてるのか。凜花の激変ぶりに皆びっくりしてるように見えたから、そっちは忘れてくれたと思って安心してたのにつ）
「いや、それはだな、ちゃんと話せば分かるんだよ。その…あれだ、それは、勘違いってやつで…」

ひきつった表情で苦し紛れに言い逃れようとする左近にさらに、他の部員が追い打ちをかけた。

「さつきも、凜花ちゃん、左近のことを先輩、じゃなくて、左近って呼んでたしな。そーいう関係になつたわけだ」

（う…耳ざとい）

「いや、だからっ、こんなやつと皆が想像するような関係になる訳もなくてだ…」

「母さんに向かつて、こんなやつとは何よつ。左近のバカっ」
凜花が怒ってつい放ってしまった言葉に、左近はあーあ、まためんどろなこと言っちゃって…と、とがっくり肩を落とした。

せっかくこっちは何とか事態を收拾しようと努力しているのに、これじゃあ台無しじゃないか。

いや、下手すると、台無しどころか、さらに泥沼にはまっていくんじゃないのか。

案の定、皆の頭はさらに混乱したようだった。

「……母さん？ それ、どーいうこと？」

「あ、あはは…はは。何のことだろ？ 全然分かんねーな。時々変なこと言いだすんだよ、こいつ。ったく、しよーがねーよなあ。あはは」

とりあえず、取り繕ってみたものの、皆の疑いの視線が晴れることはなかった。

そして、吉川がその時、分かった！とぽんと手を打った。

「左近……お前、そーいう趣味だったのか…。凜花ちゃんに母親みたいに面倒をみてもらうっていう、そーいうプレイを……」

おおっ、と他の部員たちもどよどよとざわめきたった。

「ちがーう！ それだけはやめてくれ

左近の心からの悲痛な叫びが、広いグラウンドに響き渡った。

その後、学校の中で、左近が変態だという噂が流れ、女子にあまりもてなくなった、というのは、後日譚である。

ともあれ、そんなふうになぎやかに、今日も左近と凜花との日々は始まっていくのだ。

第三十八章

左近の初恋は結局実らなかった。

事実から言ってしまうえば、それは当然のことだろう。

左近が恋したのは、彼の母親だったのだから。

今では、左近の凜花への想いは、完全に消えてしまった。

凜花が凜花でなくなった以上、もう想う人もなくなったのだ。

もしかしたら、本当は、凜花は凜花なのであって、左近の母親ではないのかもしれない。

けれどそんな事実がどうだとか、そんなことはどうだっていいのだ。なぜなら、もうすでに、左近にとって凜花は母親としか映らなくなっていたからだ。

生まれてから、母のいない分、父は、倍の愛情をかけて育ててくれた。

しかしそれに感謝しつつも、一度でいいから、母に会いたい、そうずっと思っていた。

無理だよな、とその想いをずっと心にしまっておいた左近の願いは、まさかの奇跡で叶ってしまった。

しかし突然叶ってしまった奇跡に、どう彼女と接していいのか、左近は戸惑ってしまふ。いや戸惑うというより、二度と会うことはなれと思っていた母親に、14年も経った今さら、素直に気持ちが伝えられないのだ。

（あーあ、初恋の相手が、実は母親だった……って、オレはマザコンなのか？）

などと、余計に母を慕う気持ちを、否定したりしてしまうのだった。桜は、その辺の左近の複雑な想いも、察していた。

だから桜は、今、背の高い左近に合わせて、精一杯背伸びをして、左近を抱きしめる。

「ごめんね。勝手に左近を一人残して、今まで寂しい思いをさせち

「やったね……」

左近は最初、驚いて、自分を抱きしめている桜を不思議な想いで見下ろしていたが、そのうち、桜の生身の温かさが伝わってくると、もうずっと心の中に秘めていた想いをとどめることができなくなっていた。

> i 2 9 5 2 3 — 3 4 3 9 <

「……ずっと言いたいことがあったんだけど、やっとと言える。

オレが助かったって、お前が死んだなら、何の意味もねーんだよ。やりきれないんだよ。」

後に残されたオレの気持ち考えたことあったのかよ。母親の命を犠牲にして生きてるって、ずっと責め続けながら生きなきゃいけない気持ちをも！ 自分の命が助かってよかった、なんて単純に喜ぶとも思ったのか、この大馬鹿ヤロー！」

「うん、うん、そうだね。ごめんね」

左近に罵られても、ただただ桜は、幼子をなだめるように、何度もうなずいて、左近を抱く手により一層力をいれた。

「一生会うことすらできねーって思ってた。でもほんとは……会いたかったよ。すっげー……会いたかったんだ……」

途中から、左近の頬を伝って涙がぼろぼろこぼれおちて、桜の髪を濡らした。

「私も、会いたかった」

手を伸ばしてなんとか届く左近の頬に手をやり、そこをつたう涙を、桜は拭った。

「もう、ずっと離れないよ。そばにいる……」

「当たり前だ。オレが離さない」

左近も、桜を抱きしめる手にぎゅっと力を込めた。

この大切な人を、二度と失うものか、と決意をこめて。

凜花に恋していたときと同じくらい、いや、きっとそれ以上に、今、

左近は桜を大事に思っていた。

それは、桜こそが、左近がこの世で一番会いたいとずっと願っていた人だったからだ。

第三十九章

3人の共同生活が始まると、英治と桜はいつも、それがたとえ左近の前であつても、ラブラブだった。

「えいちゃん。はい、あーんして」

「もお、桜つたら、ご飯くらい一人で食べられるよお」

そう言いつつ、大きく口を開ける、篠原英治32歳。

「……」

そういうときは、左近は呆れてものも言えなくなるのだったが、こゝろ毎日毎日いちゃいちゃといちゃつかれて、さすがの左近も、苛立ちが限界にきていた。

「どんだけ、お前らラブラブなんだよっ！ 見てるこつちが恥ずかしくなってくるわ！」

「そうは言つてもなあ、父さんたち、新婚から間もないときに、離れ離れになっちゃったからなあ」

「そうそう、今が新婚みたいなものなんだよねー」

ねー、とお互い顔を見合わせる両親を見て、左近は額がびくびくするのを感じた。

「あの頃は、海外で試合することも多かったから、本当に桜と一緒に生活できたのって、1、2カ月だったんだよなあ」

遠い昔に思いを馳せる父の言葉を聞いて、左近は少し驚いた。

母親が亡くなったのが20歳だったことは知っていたが、結婚から数えて2年目のことだと思っていたし、その間、二人はずっと一緒に暮らしていたものだと思っていたからだ。

（そんなに短かったのかよ…）

あまりにはかなく終わってしまった二人の結婚生活に、左近は、さつきまでの苛立ちも忘れ、少し同情した。

「そうそう！ 生きてた間のことは全部思い出したんだけど、そのあと、えいちゃんがどうなったか、聞きたかったんだ！ もちろん、

1歳から14歳になるまでの左近のこともね」

「それは、長い話になるなあ…。色々あったから」

「聞きたい、聞きたい」

桜にせがまれるまま、英治は桜が死んだあとの話を、順を追ってしていった。

桜が亡くなったすぐあとに、海外移籍の話が英治の元にもちかけられて、それをもちかけてきたチームは、海外でもトップクラスのチームだった。

桜を失って、打ちひしがれていた英治は、桜と一緒に過ごした日本に、いることさえも辛かったので、一時は、その話を受けよう、と思っただ。

しかし、と英治は思い直した。桜との思い出に目を背けるようなことはしたくないし、何より、左近の将来のことを考えると、日本にいた方がいいと判断し、海外移籍の話は、断った。

という話から始まり、その後のJリーグでどんなプレイをしていたか、とか、ワールドカップの日本代表に選ばれた、とか、プロサッカー界では、随分活躍したことも語った。

それを聞いた桜は、とても嬉しそうだった。

「えいちゃんは、大きな夢を叶えたんだね」

よかった、と目を細める桜に、いいや、違うんだ、と英治は否定した。

「桜がいたから、僕の夢は叶ったんだよ。もちろん、全ての始まりだった、国立だって行けなかっただろうし。そしたら、プロのサッカー選手になるっていう、その先の未来だってなかったかもしれない。

確かに、努力したり、実際にプレイしたのは僕だったかもしれない。でも、あの時桜がいなければ、なんの支えもなく、途中で挫折していたと思う。

だって、僕は君の喜ぶ姿がみたい一心で頑張ってきたんだから。それは、桜が死んでしまっただけから、変わらなかったよ。桜は、絶対

どこかで見ていてくれるはずだ、って確信していたから、僕は変わらず、君のために頑張った。

いや、正確には、二人の夢を叶えるために頑張ったんだ」

「そっか…。一緒に夢を叶えよう、って約束したもんね…」

「そっだよ」

嬉しそうな母親と、それを穏やかに見守る父親。

父親が、プロのサッカー選手として活躍していた裏に、そんな事情があったことを、左近は知らなかった。

一緒に夢を叶える…か。

(そっいう、愛の形もあるんだな…)

人を愛するとは、本当に奥が深いものなのかもしれない。

左近は、いずれ、自分も本気で愛する人ができたとき、自分の両親のように、お互いが強い絆で結ばれていることを、胸を張って言えるようになりたい、と思った。

その絆が、どんな形なのかは、今の左近には分からない。

両親のように、ともに同じ夢を叶えるパートナーなのかもしれないし、また違う関係なのかもしれない。

(ま、いつかは分かるだろ)

左近は、いつか出会える、愛する人のことを想像してみたが、今はまだ、やっぱりはつきりと頭の中に浮かんでこないのだった。

そこまで考えたところで、左近は、両親の言っていた言葉で、ひとつひっかかることがあったことを思い出した。

「あー、ちよつと質問いい？」

「なに？」

「この前も、確か母さんが、国立、とか言ってたことあったと思うんだけど、それってあの国立のこと？そこへ導いたとか、意味が分からないんだけど」

左近の質問を聞いた、両親は、二人顔を見合わせて、どちらからもなく笑い合った。

「それはね…」

父親と母親の、長くて険しい道を、共に力を合わせて戦い抜いたその話の一部始終を左近は聞いた。

父親は、順風満帆に、プロのサッカー選手という地位を手に入れたのではなかった。

あえて、無謀で、困難な道を選び、それを桜とともに実現したことによって、現在の父があつたのだ。

自分は今まで、ユースに所属することだけを夢見て、それがプロサッカー選手への近道だと信じていたが、そんな一般的に皆が目指すような道のりをはずれたって、プロになれない訳じゃない。

もちろん、それは確かに、近道ではないし、むしろ険しい道のりの方で、相当の覚悟と努力がいるのだろう。

そんな、険しい道のりを歩んだ父親だから、おそらく、自分だけの力で、プロサッカー選手になれた、なんて思っていないのだ。

きつと、それは、二人の力を合わせて手に入れたものだと思っっているのだろう。

（だから、一緒に夢を叶える、ということに、二人は強い意義を見出しているのか）

左近は、ようやく、ふたりのこだわりが理解できた気がした。

二人は、いつてみれば、運命共同体、みたいなものなのかもしれない。

それは、恋愛関係、という以前に、うらやましい関係に思えた。

別にそれが愛する人でなくてもいいから、そんなに信頼し合えるパートナーを、自分も見つけない、左近はそう思った。

第四十章

「ねえ、えいちゃん。今度は何の夢と一緒に追いかけてようか？」

「んー、そうだなあ。桜の夢は何かあるの？」

「…そうだね、左近を立派に育てることかな」

「はあ？ オレを育てる？ オレより年下なのに、おかしいだろ、それ」

「年とかそんなの、関係ないよ。だって私は、左近のお母さんなんだから。これからは、卒業式とか、授業参観とかも行かなきゃねっ」「お前だって卒業式も、授業参観もあるだろーがっ。大体参加できたとして、どこに、後輩の分際で先輩の授業を参観しに来るヤツがいるんだよっ」

左近の鋭いつつこみに、桜は、そこまで考えていなかったらしく、うーん、と考え込みだした。

「確かに、そうだ…。父母としての列席は、この姿じゃあ難しいね…」

「そういう場面は、今まで通り、僕が参加するよ。卒業式なら、桜は後輩の列席する場所から見られるしね」

「そっかあ。でも、しょうがないよね。そこはえいちゃんにお願いするしかないさそうだ。残念だけど」

「左近を立派に育てるっていうのは、そういう場面に参加することだけじゃないんだから。桜ができるところでやればいいと思うよ」「優しく諭すように言う英治に、嬉しそうに、うん、そうだね、と桜はうなずいた。

「じゃあ、今度は、えいちゃんの夢の番。何かある？」

「そうだなあ…」

英治はしばらく腕を組んで考え込んだあと、ゆっくり話した。

「僕はもう年齢的にも、現役を引退しなくちゃならない年になったけど、でも、サッカーにはずっと携わり続けたいって思うんだ。」

それでね、最近考えていたことなんだけど、桜、今度は監督じゃなくて、サッカーのプレイヤーにならない？」

「え……私が、サッカーをするの？ 女なのに？」

桜は驚いて英治を見た。

「今は、女子だつてサッカーやるの、全然普通なんだよ。僕たちが高校の頃はそんなの考えられなかったけどね。」

現に、この間は、女子日本代表の『なでしこジャパン』が、あのワールドカップで優勝したんだよ？

桜も知っていると思うけど、ワールドカップっていったら、サッカー界で、一番すごい大会なんだから。

だいたい、男子の日本代表だつて、今のところベスト16が最高の成績だつて言うのに、女子は優勝しちゃったんだからね。ある意味、男子より女子のがすごいのかも」

そう言つて、英治はくすくすと笑つた。

「……私が、サッカーをやる……」

桜は、英治の言った言葉をすぐ飲み込めず、ゆっくり英治の言葉を繰り返してつぶやきながら、意味を理解しようとした。

「そっだよ！ まだ、桜は中学1年なんだから、今から始めても全然遅くないよ。」

左近の中学が認めてくれるなら、マネージャーだけじゃなくて、プレイヤーとしても、サッカー部にいれてもらえばいいし、それが無理なら、僕や左近が君にサッカーを教えるから。

そして、左近も桜も、いつか日本代表になるんだ。僕はもう昔なつて、ワールドカップにもでたから、そしたら昔、桜が憧れていたあの日本代表ユニフォーム、桜だつて着られるんだよ。一家そろつて「サムライブルー」だ。あ、「なでしこブルー」って言うのかな？

女子の場合」

「いやいや、それは、ちょっと無理があるだろ。一家そろつて日本代表とか、一体どんな家族だよ」

ずつと黙つて話を聞いていた左近が呆れたように口をはさんだ。

「そんなことないさ。だいたい、左近だって、将来の夢は日本代表だろ？ そしたら桜だってなれる。」

左近は知らないと思うけど、桜は、ものすごく頭の回転が速いんだ。発想力も柔軟だし、頭脳プレイには、絶対に向いているよ。

何より、全てのことは、絶対に信じていること、あきらめないこと、強く願うこと。それを続けていけば、不可能なことなんてないんじゃないかって、僕は思っている。

そうじゃなきゃ、僕は国立にも行けなかったし、プロサッカー選手にもなれなかった。そして、日本代表にもなれなかったんだ。

今度はね、役割交代だよ、桜。僕が監督になって、君が選手になるんだ。

そして、同じ日本代表のチームになろう。

これが、僕が今、桜と一緒に叶えたい夢だよ」

英治は、桜が、前世で初めて見た優しい笑顔で桜を見つめていた。

遠い昔の英治の笑顔と、現在の笑顔が重なって見えて、桜は思わず泣いてしまいそうになった。

「相変わらずえいちゃんが言いだすことは、無茶で、極端で、無謀で……、それでも、ちゃんと全部叶えちゃったんだもんね。」

……だから、また、そのえいちゃんの夢、一緒に叶えてみようと思っよ」

桜は、まるで、あの日、英治のリビングで、二人で一緒に夢を叶えることになった瞬間に、今、いるような気がしていた。

(…ああ、また新しい私たちの夢が、始まって行くんだね…、あの日のように…)

そう、全てはあの瞬間から始まったのだ。

感慨深くうつむいて、あの時のことを思い出していた桜を見つめて、英治は突然、もじもじし始めた。

「そ、そのために、お願い、というか、その…提案があるんだけど

…」

「なに？」

桜は、突然顔をあからめてそわそわしだした英治を不思議に思つて、首をかしげた。

「ぼ、僕と…もう一回結婚してくれないか？ こんな32にもなつたおじさんと今の君とは、釣り合わないかもしれないけど…」

桜の目をまつすぐ見つめて、真剣な眼差しで英治は言った。桜は、最初とても驚いていたが、しかし、そのあと、嬉しそうに笑つた。

「はい、喜んで」

そして、あの日答えた時と、全く同じ言葉で、英治のプロポーズを受け取つた。

> i29830 — 3439 <

「はーっ。よかつたー。こんなおじさんにプロポーズなんかされて、今度こそ断られるかと思つたよ…」

英治は、本当にイエスをもらえる自信がなかつたのか、思いつきり安堵しているようだった。

「何言つてるの。おじさんだろうが、高校生だろうが、えいちゃんはいちちゃんでしょ」

そして、桜はくすくすと笑つた。

「だけど、人生で同じ人に、二回もプロポーズをされるなんて思わなかつた」

「僕だつて、まさかもう一度君にプロポーズする日がくるなんて、思わなかつたよ。プロポーズつて、ものすごい勇気いるんだから」

「あー、ちよつと、お二人さん。幸せそうなどこ悪いんだけどさ、オレがいるってこと、忘れてない？ 両親のプロポーズのシーンを、どこに見せつけられるかどもがいるんだよっ！」

二人の会話に割り込んで、左近は、そこにもしちやぶ台があつたならば、ひっくり返してしまいたかつた。

一体どこの世界で、実の両親が結婚の約束をするシーンを、見なけ

ればならないこどもがいるというのだ。

貴重なシーンを見ることができて感動した、などと思えるはずがない。

この世にタイムマシンが普通に存在するなら、そんなシーンみたさに、過去へ見に行くこどももいたかもしれないが。

（つて、そんなワケあるか）

別に、怒っているわけでも、呆れているわけでもなかったが、そういうことは、こどものいないところでやってくれーと、思いつきり叫びたいのだった。

「あーそうだ。左近の14歳になるまでの話も、桜は聞きたいんだつたね」

「うん、聞きたい！」

英治は、左近は小学生になってもおねしょをしたことがあった、とか、ある日小学校に、ランドセルを忘れて出かけて行ったことがあったとか、そういうおもしろおかしい話ばかりチョイスして、桜に話して聞かせた。

「ランドセル忘れて、学校行っつて、何しに学校いったの？ ありえないよね！ おかしー」

左近の笑い話をたくさん聞いた桜は、ソファの上で笑い転げた。

そんな二人の様子を見ていた左近の額に、ぴくぴくと怒りの筋がわいてでてきた。

「こんのクソ親父！ 自分の過去はかっこよくまとめておいて、オレのことをオチに使うな」

怒りと恥ずかしさで、真っ赤になりながら、今度こそ、左近は絶叫した。

エピソード

3人の共同生活が始まってからは、13年の歳月をうめるかのよう
に、たくさんの時間を3人で、過ごすようになっていた。

人はいつか必ず死ぬ。

当たり前が存在する、大切な人との時間なんて、あるわけないのだ。
どんなに、愛おしい人といつまでも一緒にいたくても、いつ突然に
終わりがくるのか分からない。

だからこそ、一瞬一瞬がこんなにも嬉しくて、大切なのだ。

英治と桜は、外に出ているときも、家にいるときと同じように、目
も当てられないほど終始ラブラブで、左近はいつも、あーあ、また
始まった、と呆れていた。

しかし、そのことに関しては、もう今さら何を言う気もなかったが、
左近が心配していたのは、二人の現在の外見の差だ。

例えば、セーラー服姿の13歳の桜を、32の見た目に差がありす
ぎる英治が抱きしめたり、キスをする。

はたから見れば、ちよつとおかしい。

いや、おかしいですめばいいのだが、犯罪に見られてしまうことだ
つてあり得るかもしれない。

そんな左近の心配を伝えても、全く聞く耳持たず、二人は今日も仲
良く手をつないで、街を歩く。

「ねえ見て、えいちゃん。今年も桜が咲いたよ」

「ああ、ほんとだ。綺麗だね。すぐに散ってしまうけれど、必ずま
た咲くんだ。

本当に桜は綺麗だ……」

目を細めて言う英治の視線の先にあるのは、咲き誇る桜、ではなく、
愛妻の桜、だった。

「つたく、あーあ、もう見てらんねー」

ため息をつきながら左近は言った。

「あー左近、妬いてるな？ 大丈夫だよっ、左近だって、大好きなんだからね」

「そうだぞ。左近もこっちへ来て、一緒に手をつないで歩こうじゃないか！」

両親に満面の笑みで迫られて、左近は後ずさった。

「やめてくれーっ」

顔をひきつらせながら逃げる左近を、笑いながら追いかけてまわす英治と桜。

> i 2 9 9 2 2 — 3 4 3 9 <

それは、13年の歳月を経て、やっと本来の姿を取り戻した、幸せな一家の姿だった。

篠原家のリビングに、これまで唯一飾られていた、たった一枚の家族の写真。

だがいつの間にか、そこには幸せな3人の姿が写った写真が、たくさん飾られていた。

そして、これからもっと、幸せな家族の写真は増え続けていくことだろう。

エピソード（後書き）

これで、「桜の咲く頃に」は、完結です。

これまで読んでくださった方、ありがとうございました。

特に、感想、評価等くださった方、本当にありがとうございました。とても、励みになり、こうして最後まで書き切ることができました。

詳しいあとがきは、明日の個人ブログの方で書く予定ですので、ここではあまり書きません。

もし、興味がある方がいらっしゃいましたら、遊びにいらしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6167t/>

桜の咲く頃に

2011年8月28日00時58分発行